

泰平ヨンの未来学会議  
Kongres Futurologiczny

スタニスワフ・レム \*1 訳：深見弾\*2

2007年4月17日

\*1 ©1971 Stanislaw Lem

\*2 ©1984



# 目次

第 1 章	1
第 2 章	25
第 3 章	53



# 第1章

第八回世界未来学会議はコスタ・リカで開かれた。実を言うと、あんた以外に適任者はいないんだよと言ったのが、タラントガ教授でなかったら、ノウナスくんだりまで出かけはしなかったろう。かれは、近頃じゃ宇宙旅行も地球の問題から逃避するひとつの手だとも言ったのだ（これにはカチンときた）。要するにかれに言わせると、最悪の事態が起るんだったら、留守中にしてもらいたいものだと、それを当てにして、どいつもこいつも銀河へ飛びだしていくというのだ。たしかにそう言われてみると、吾輩も帰航してくるとき、ことにそれが長い航宙の場合、地球が焼きじゃが芋に似ていないかどうか気がかりで舷窓をのぞいてみたことが一再ならずある。だからその点に関してはあまり抗弁しなかったが、未来学のことなんてろくすっぽ知らないぞ、とだけは言ってやった。すると、だれだってポンプの動かしかたなんて知りもしないが、「おい、ポンプだ！」と怒鳴られたら、そこへすっ飛んでいくもんだという答えが返ってきた。

未来学協会の理事会が、会議の開催地にコスタ・リカを選んだわけは、人口の激増とその阻止がもっぱら討議されることになっていたからで、目下、世界最高の人口増加率を誘っているのが、ほかでもないコスタ・リカだったのだ。そういう現実の姿が圧力になれば、討議が効果的に進捗しんちよくするかもしれないというわけだ。はたして ヒルトン コーポレイションがノウナスに建てた新しいホテルで間に合えばいいのだが。なにしろ、未来学者のほかにも、かなりの報道関係者がその会議にやってくるはずだったから もっともそんなことを言うのは皮肉屋だけだろうが。そのホテルは会期中に跡かたもなくぶっこわれてしまったから、提灯ちようちんもちをしていると非難される心配をせずに、安心してヒルトンは実にすばらしいホテルだったと言える。吾輩が口にしたこのことばは、万金の重みがある。それというのも、吾輩は根っからの快樂主義者なので、この重い尻を叩いて辛い宇宙の旅をやらせ、快適な暮しを捨てさせられるのは義務感だけだからだ。

平らな四階建ての建物の上に、百六階のビルがそびえ立っているのが、コスタ・リカ・ヒルトン・ホテルであった。その低いほうの建物の屋上には、テニスコートやプール、日光浴室、競走場トラツクルーレットの役割もはたしている回轉木馬、射撃場（ここでは、だれだろうと望む相手を ダミー と言っても人形だが 射ち殺すことができる。特に注文が

あれば、二十四時間前にそう言うと言っておいてくれるのだ)、さらに、円形野外音楽堂まであり、それには聴衆に催涙ガスを吹きかける装置までついていた。吾輩は百階の部屋をあてがわれたが、そこからは、市を包んでいるスモッグの青味がかかった茶色っぽい雲の表面しか見えなかった。いくつか、ホテルの備品を見てたまげてしまった。たとえば、ゆうに三メートルはある鉄挺が、碧玉の浴室の隅に立てかけてあったり、戸棚には、国防色に染めた偽装用のフード付きマントが吊してあったり、あるいはベッドの下に乾パンが入った袋が置いてあったからだ。浴槽の上にかかっているタオルの隣には、普通は登山に使う太いロープの束がぶらさがっていた。そして、こちらはすでに錠に鍵を差し込むとき気がついていたのだが、ドアに札がかかっており、『この部屋に爆弾のないことを保証いたします。ヒルトン・ホテル支配人』と書いてあったのだ。

ご存知のように、近頃の学者は、書齋派と逍遙派にわかれている。書齋派は旧態依然たるやりかたでいろんな研究をやっている。ところが逍遙派と言われる連中は、ありとあらゆる国際会議や学会に顔をだす。後者の連中を見分けるのは簡単だ。きまって自分の名前と肩書を書いた小さな名札を襟の折り返しにつけ、ポケットに旅客機の時刻表を突っこんでおり、金属部分がまったくないバックルをつけていたし、ブリーフケースの留金もプラスチック製だったからだ。これはすべて、飛行機に搭乗するとき乗客を照射し、刀剣火器の類を摘発する探知機の警報を不必要に鳴らさせないためだった。この手の学者は、空港バスや待合室、飛行機、ホテルのバーでも専門書を読んでいる。理由ははっきりしているのだが、我輩はここ数年に現われた地球文化の風変りな習慣をあまり知らず、バンコクやアテネ、それにコスタ・リカの空港でさえ、警報を鳴らしてしまった。それを未然に避けられなかったのは、六本の歯に金属(アマルガム)の詰めものをしていたからだ。だから、ノウナスに着いたらすぐにそれを瀬戸物に入れ替えてもらうつもりだったが、予期しないことが起ってそれどころではなくなってしまったのだ。ところでロープや鉄挺や乾パン、マントのことだが、それについてアメリカの未来学者の代表団員の一人が、近頃のホテルは、以前にはなかった予防措置をとるようになったのだと、根気よく説明してくれた。部屋にそういう物が備えつけてあるからこそ、泊り客の寿命がのびるのだそうだ。ところが、吾輩は愚かにも、その話を真剣にうけとらなかったのだ。

会議は、第一日目の午後からはじまることになっており、優雅に印刷され、図表やイラストがたっぷり入った、美しいデザインの表紙がかかった会議資料を一組、朝のうちに渡されていた。ことに、切り離し無効と印刷された文字が読みとれる、青味がかかった光沢のあるアート紙の綴りが目を惹いた。最近では学術会議までが爆発的な人口増加に音をあげていた。未来学者の数が、人口増加と同じ比率で増大していたから、会議を開くと出席者でごったがえし、大混乱が起きるしまつだった。だから、研究発表を口頭でやれるよう

な状態ではなかったから、あらかじめ印刷されたものを読んでおく必要があるのだ。とは言っても、その朝は、そんなことをしている暇はなかった。主催者側がわれわれにワインを振舞ったからだ。そのささやかな祝宴は、まずは恙無<sup>つつがな</sup>く終ったといえる。もっとも、合衆国の代表団が腐ったトマトを投げつけられるというハプニングさえ勘定に入れなければの話だが。UPIの有名な特派員、ジム・スタンターから、その日の明け方、コスタ・リカにあるアメリカ大使館の領事と三等事務官が誘拐されたという話を聞きこんだのは、その酒の席でだった。過激派の誘拐犯人たちは、その外交官たちを自由にする代りに、政治犯を釈放しろと要求してきた。そして、自分たちが本気であることを強調するために、とりあえず大使館や政府機関に人質の歯を一本ずつ送りつけ、要求をのむまで、さらに体の他の部分にエスカレートさせると警告してきた。ところが、そんな不協和音が入ったくらいで、和氣藹々<sup>わきあいあい</sup>たる朝のカクテルパーティが損なわれるようなことはなかった。アメリカ合衆国大使その人はその場にいたし、短いスピーチをやって、国際協力の必要性にさえ触れたくらいだ。もっとも、吾輩たちに銃口を向けている六人の屈強な私服刑事に取り巻かれては、おのずと話も短くなるだろうというものだ。正流言って、いささかそれには面食らった。ことに、吾輩の隣に立っていた肌の浅黒いインドの代表が風邪をひいていて、鼻をかむつもりでハンカチをだそうとポケットに手をのばしたときは、たまげた。あとで未来学会議の公式代表者から、あれは必要かつ人道的な方法だと説明されて納得がいった。ポディガードは、もっぱら口径こそ大きい貫通力の弱い銃を使っているというのだ。だから旅客機に乗っている保安要員についても同じことが言え、前とはちがって無関係な者が傷つくようなことは起らない。以前は、テロリストを射ち殺した弾丸が、そいつのうしろに座っていた五人も六人も罪のない乗客を貫通するということがよくあったものだ。そうは言っても、足許に集中砲火をあびた人間が転がっている図なんて、けっして楽しいものじゃない。たとえそれがよくある誤解がもとであり、あとで外交文書が取りかわされ、公式に謝罪が表明されるにしろだ。

だが、その人道的な弾道学の領域をあれこれ考察してみせるよりは、その日まる一日、なぜ会議の資料に目を通す暇がなかったかということをはっきりさせておくべきだろう。血をあびたシャツを急いで着替えなくてはならなかったあの不快さをくどくど言うのはやめるが、とにかくそのときの気分にかからって、ホテルの Snackbar へ朝めしを食いにでかけた。朝はいつも半熟卵しか食べないのだが、ルームサービスしてくれるホテルはまだなかったのだ。それは間違いなく、首都のホテルの規模がこれでもかこれでもかと大きくなっていくのに関係があった。調理室から部屋までの距離が一マイル半もあったのでは、どうやってみたところで、卵の黄身をあたたかいままにしておけるわけがないではないか。吾輩が知るかぎりでは、ヒルトンのその道の専門家たちがこの問題を研究し、唯

一の予防策は超音速で動く特別なエレベーターを使うしかなさそうだという結論に達したのだが、いわゆる ソニック・ブーム 音速障壁を破ったとき生じる爆発音が、閉ざされた建物の空間の中では、鼓膜を破る原因になりかねなかった。もちろんことと次第によっては、給仕ロボットに生卵を部屋へとどけさせ、調理ロボットに目の前で半熟卵にさせようと思えば、やってやれないことではなかった。だが、そうなれば早晩、泊り客が自分の鶏小屋をかかえてヒルトン・ホテルの中をうろつきまわるようになるのに、たいして時間はかからないだろう。だからこそ吾輩はスナックバーにでかけたのだ。泊り客の九五パーセントが、さまざまな大会や会議の出席者たちだった。一人旅の観光客は襟の折り返しに名札をつけていないし、会議の書類でふくれあがったブリーフケースも持っていないから、一目見ればそれとわかるのだが、めったに出くわさなかった。砂漠で真珠を探がすほうがましなくらい少なかったのだ。ちょうどそのとき、コスタ・リカでは吾輩たちの会議のほかに、《虎》派青年抗議者協議会 や 解放文学出版社会議、マツチラペル収集家協会大会 が開催されていた。普通、こうした団体には同じ階の灘を割り当てるものだ。ところが、ホテルの経営者側が敬意を表するつもりで、吾輩だけは百階の部屋を当てがわれたのだ。つまりその階にだけに棕櫚の茂みがあり、そこでバッハの演奏会が行なわれており、全員女のオーケストラが演奏しながらストリップショーを演じていたからだ。吾輩としてはそんなものはないほうがかえってよかったのだが、残念ながら他に空き部屋がひとつもないというから、やむなく提供されたその部屋にせざるをえなかったのだ。やっとのことで同じ階にあるスナックバーの椅子に腰掛けたと思ったら、こういうのを烏の濡れ羽色というのだろうが、真黒なひげを生やし(まるでメニューでも見せられたように、そのひげから過去一週間の料理が全部読みとれた)、いかつい肩をした隣の席の男が、背中に吊していた安全装置がかかっている重そうな連発銃を吾輩の鼻先に突きつけて、下卑た薄ら笑いをうかべ、この坊主殺しをどう思うと訊いてきた。そいつがなにをいわんとしているのかさっぱり見当もつかなかった。だがそのことを認めないほうがいいことはわかっていた。そういう偶然に知り合ったような場合の戦術は、沈黙を守るにかぎる。案のじょう、自分からすすんで、その二連狙撃銃には、レーザー照準器や連動式トリガー、自動装填装置がとりつけてあり、法王を狙撃する銃だと打ち明けてきた。男はべらべら喋りながら、ポケットから折りたたんだ一枚の写真をとりだして見せた。それには、標的である帽子をかぶったマネキンに狙いをつけているかれが映っていた。俺は充分射撃の腕をあげたから、サン・ピエトロ寺院にいるローマ法王を射ち殺すために、ローマへ偉大なる巡礼に旅立つところだと、そいつは言った。もちろん吾輩はそんな話はてんから信じはしなかった。ところが男はひっきりなしに喋りながら、吾輩に予約済みの航空券やポケット版のミサ書、アメリカ人カソリック教徒用巡礼旅程表、それに弾頭に十字の刻みをいれた実



弾の箱までとりだして、つぎつぎと見せてくれたのだ。やつは節約するために片道切符しか買っていなかった。つまり激怒にかられた巡礼者たちにずたずたに引き裂かれてしまうだろうと考えていたからだ。そう期待するだけで、男は体がぞくぞくするほどうれしくなるらしい。吾輩はすぐさま、こいつは精神異常者か、近頃さっぱり見かけなくなったプロの狂信的なテロリストだと判断をくださった。だがそれが見当はずれだったのだ。息づくまもなく喋り続け、銃がしょっちゅう床に滑り落ちるので、そのたびに高いスツールからおりながら打ちあけてくれた話によると、男はまさに敬虔かつ高潔なカソリック教徒であった。だから、作戦（かれはこれを「ホ作戦」と呼んだ）をたて、われとわが身を犠牲にして人類の良心に揺さぶりをかけようとしているのだった。そうした極端な行動よりもっと強烈な衝撃がはたしてほかにあるだろうか、というのが男の言いぶんだったのだ。かれに言わせると、聖書にしたがってアブラハムがイサクにやったと同じことをするというのだ。ただし、かれが殺す相手は息子ではなく父であるところがあべこべではあるが。しかもおまけに、父は「父」でもそれは神父だった。つまり、まさにそうすることで、クリスチャンだからこそ決断ができる最高の殉死がとげられるというのだ。やれやれと吾輩は腹の中でつぶやいた。開眼するのもいいが、こういう狂信者が多すぎるわい。そういう痛烈な弾劾演説を聞かされても納得できなかった吾輩は、法王を救いに、つまり、その計画をだれかに知らせにでかけた。ところが、七十七階のスナックバーでばったり出くわしたスタンターは、話を終りまで聞かないで、アメリカ人信者の巡礼団が最近、ハドリアヌス十一世に献納した供物の中に、時限爆弾が二個と、聖餐用のぶどう酒代りにニトログリセリンが詰まっている樽がまじっていたと話してくれた。かれがどうしてそういう冷淡な態度をとるのかさっぱり納得がいかなかったが、たったいま過激派のテロリストが、今のところまだだれのものともわかっていない足を一本大使館へ送りつけてきたと聞いて、かれの気持がよくわかった。ところが、話の途中で、かれに電話がかかってきた。ローマ「通」りでだれかが抗議の焼身自殺をしたらしい。七十七階のそのバーを支配している雰囲気は、吾輩の上の階のそれとはまるでちがっていた。ここには、腰までしかない網目のドレスを着、なかには腰にサーベルを吊した素足の娘たちがいっぱいいた。中には最新流行にしたがって、首の鎖や、鋏を打ちつけた首環にくくりつけた長いお下げ髪をしたものもいる。彼女たちが、ラベルの収集家なのか、解放文学出版社会議の秘書なのか、それは判然としなかったが、連中が見せて歩いているカラー写真から判断すると、どうやら後者らしい。どちらかと言えば、それは特殊なプリントだったから。吾輩は、仲間の未来学者たちが滞在してる九階へ降りていき、そこのバーで「フランス・プレス社」のアルフォンス・モーヴァンと一、二杯やった。そして、これっきりにしておこうと考えながら、最後にもう一度法王の救助を試みてみた。ところがモーヴァンは吾輩の話に平然とうけとめ

て、ただ、こうつぶやいただけだった。先月、あるオーストラリア人がバチカンで発砲騒ぎをひきおこした。もっとも思想的立場はまるっきり違っていたが、と。モーヴァンは自分の通信社のために、マヌエル・ピルフロとかいう人物から興味あるインタビューをとりたがっていた。それは、FBI やフランス<sup>シユレテ</sup>警察庁、インターポール、その他さまざまな警察組織から手配されている男だったのだ。なぜかと言えば、そいつが新しいタイプのサーピス業務を行なう会社を設立したからだ。つまり、やつは、爆発物によって国家を転覆するエキスパートとして（普通かれは 爆弾博士 の異名で知られていた）人に雇われ、その無思想ぶりを誇りにしていたくらいだという。そのとき、マシンガンの連射でびっしり穴をあけられた、薄いナイトガウンのようなものを身にまとった赤毛の美しい娘が、吾輩たちの席に近づいてきた（つまりその女が、過激派の使いで、記者を連中の司令部へ案内することになっていたのだ）。すると、モーヴァンが席をたつときピルフロの宣伝ビラを一枚くれたので、それを読んで、いまこそダイナマイトとメリニット<sup>\*1</sup>や、雷酸塩水銀とビックフォード式導火線の区別もつかない、無責任なド素人の愚かな行動に終止符を打つべきときだということがわかった。つまり高度に専門化された時代にあっては、自ら手をくだしてやることはなにもない。それは、良心的な専門家の職業倫理と知識にまかせればいいのだから。ビラの裏には、世界で最も発達した文明諸国の通貨に換算した業務価格表が印刷してあった。

おりしも未来学者たちがバーへ集まりはじめたときだった、その一人であるマシケナス博士がまっさおになって駆けこんでくると、がたがた震えながら「部屋に時限爆弾が仕掛けられているぞ」と叫んだ。どうやらそんなことには慣れっこになっているらしいバーテンは、無意識に「伏せろ！」と怒鳴って、カウンターの下へもぐりこんでしまった。だが、ホテルの警備員たちがただちに調べたところ、同僚のだれかがマシケナスに悪ふざけをし、ビケットの箱の中へ目覚し時計を入れておいたことがわかった。吾輩がにらんだところでは、その犯人はイギリス人らしかった。いわゆるそういう <sup>ブラクティカルジョーク</sup> いたずら をやってよろこぶのは連中ぐらいのものだ。だがたちまちそんなことはきれいさっぱりと忘れてしまった。と言うのは、J・スタンターとJ・G・ハウラー（この男もUPIの時派員だった）が誘拐された外交官の件で合衆国政府がコスタ・リカ共和国政府に手渡した覚書のテキストを持って入ってきたからだ。それは、例によって例のごとく外交文書のもってまわった言いまわしで書かれており、さっぱりつかみどころがなかった。ジムの話では、市当局は <sup>ドラスチック</sup> 思いきった手段に訴えるつもりらしい。当市を牛耳っているアポロン・ディアス將軍は、暴力には暴力でもって応えよという 鷹派 の意見に傾いていたのだ。議会に（政府は中断することなく審議を続けていたのだ）反撃に転じるべきだという案が提出

\*1 ピクリン酸を含む強力な爆薬

された　つまり、過激派が釈放を要求している国事犯たちから、二倍の本数の歯を抜きとり、連中の司令部の住所がわからないのなら、その歯を局留めでやつらに送りつけてやるべきだというのだ。シュルツバーガーが執筆した　ニューヨーク・タイムズ　の空輸版は、人間の良識と質の高い協力を訴えていた。スタンターがこっそり耳うちしてくれた話によると、政府はアメリカ合衆国の財産である秘密軍事物資を積載してコスタ・リカ共和国領内を通過しペルーに向かっていた列車を徴発したということだった。どういうわけかそれまでのところ、過激派の連中は未来学者を誘拐することを思いつかなかった。やつらの観点からすれば、それは馬鹿げた考えではないはずだ。なぜなら目下コスタ・リカには外交官より未来学者のほうが多くいるのだから。だが、百階建てのホテルともなると、世界の他の部分から隔離された巨大で快適なひとつの有機体だったから、外部からとどくニュースは、まるで地球の別の半球から送られてくるみたいだった。いまのところ未来学者たちはだれもパニックに陥っていなかった。つまりヒルトンのトラベル・カウンターへ、合衆国やその他の地へ向かう便の予約に泊り客が殺到するというような事態にはいたっていなかったということだ。公式の開会の宴は二時からということになっていたが、吾輩はまだ正装に着替えていなかったから、部屋へとんでかえり、身支度をしておおいそぎで四十六階の　紫の間　に降りていった。ロビーで、トップレスの寛やかなドレスを身にまとい、胸に勿忘草と雪片の刺青をしたすごくかわいい娘が二人近づいてきて、きれいなパンフレットを渡してくれた。だがそれには目を通さずに、広間へ入っていった。まだだれも来ていなかった。テーブルを一目見て吾輩は息をのんだ。たっぷりと料理が並んでいたからではない。その並べかたにショックをうけたのだ。パイもオードブルもサンドイッチも　サラダさえ、なにもかもが生殖器の形に並べられていたからだ。問題はそれが目の錯覚などではなかったということだ。なぜなら、こっそりとささやくようにスピーカーから、ある種の仲間たちのあいだでヒットしている、次のような歌詞で始まる流行歌が流れていたからだ。

ペニスとプッシーを馬鹿にするやつは、いかればんちにきまってる / 当節いちばん  
いいことは、あそこを飾って見せること！

宴会の出席者たちがぼつぼつ姿を見せはじめた。濃いあごひげの男もほおひげをもじゃもじゃに生やした男も　もっともどちらかと言えば若い連中だった　パジャマ姿か、あるいはそれすら着ていなかった。娘たちが六人、ケーキを持って入ってきたが、そのデザートがとてつもなく卑猥な形をしているのを見るに及んで、もはや疑問の余地はありえなかった。部屋を間違え、解放文学の宴会場にうっかりまぎれこんでしまったのだ。秘書が見あたらないという口実をつけ、あわててそこを引きあげ、一階下へ降りて、自分の会

場でほっと一息ついた。紫の間（間違えたのは 薔薇の間 だった）はすでにいっぱいだった。接待があまりにも質素だったからいたく失望したが、つとめてそれを態度にださぬようにした。料理は冷えていたし、腰をおろすところがなかった。食事をしづらくするために、広い部屋から椅子の類はことごとく運びだしてあったから、こういう場合に常識になっている敏捷さを発揮しなくてはならなかったし、ことにうまい料理にありつこうと思えば殺人的な雑踏にもまれなくてはならない。未来学協会コスタ・リカ支部の代表であるセニョール・クイローネが、満面に笑みをたたえて、今回の会議の議題がなんといっても人類に差し迫っている悲惨な飢饉ききんのことである点を考慮すれば、いかなる種類であれ、潤沢という贅沢は場違いであると説明した。もちろん疑ぐり深い速中はどこにでもいるもので、協会への助成金が削減されたにちがいない、それしか、かくも極端な質素ぶりは説明できないと言うものもいた。職業上、克己心が必要なジャーナリストたちは、人のあいだを駆けまわって、外国の予知学の権威たちをつかまえては簡単なインタビューをとっていた。アメリカ合衆国大使の代理として姿を見せたのは、一団のボディガードを引きつれたただの三等秘書官にすぎなかった。略式礼服スモーキングを着用しているのはかれだけだった。きっとパジャマの下では防弾チョッキが隠しくかったからだろう。聞いたところでは、市内からやってきた来賓をホールで一人残らずボディチェックしたところ、うず高く山になるほどおびただしい量の銃器が摘発されたそうだ。本会議がはじまるのは五時からだった。ということは、自分の部屋で一息いれる時間がたっぷりあるということだ。そこで吾輩は百階へ引きあげた。塩が効きすぎたサラダのおかげでひどくのどが渴いていたが、吾輩の階のバーは抗議派とダイナマイト派の連中がそれぞれ仲間の娘を連れて占領しており、さっき、ひげ面の法王制信奉者（か、あるいは反法王制信奉者）と話をただけで充分だったから、自分の部屋の水道の蛇口からくんだコップ一杯の水で満足しておくことにした。水を飲み終ったとたんバスルームとふたつの部屋の明りが消えた。いくらどこヘダイヤルを回しても電話はきまって、シンデレラ姫の童話を話すロボットのところへつながってしまった。そこで階下へ降りていこうとしたが、エレベーターも動いていなかった。抗議派の連中が歌を合唱しているのが聞こえてきた。ところが、それに調子を合せてピストルをぶっぱなしていたから、弾がそれてくれればいいがと願わずにはいられなかった。そういうことが、一流のホテルでもよく起るのに、それでもホテル側はあまり腹をたてないのだ。だが、いちばん驚いたことは、吾輩自身の反応だった。法王の暗殺を企てている男と話をしてからと言うもの、どちらかといえば不機嫌だった気分が徐々にだが晴れてきた。部屋の中を手探りで動いて家具をひっくり返しながらか、吾輩は闇の中で微笑をうかべていた。いやというほどひどく膝をトランクにぶつけても、人類にたいする吾輩の寛大な気持はいささかも減じなかった。ナイトテーブルの上に載っている、朝食と昼食のあいだに頼



んだ食事の残り物が手に触れたので、会議のパンフレットから引き裂いた紙切れをバターの中に突っこんだ。そしてそれにマッチで火を点けると、たしかに煙はでるが、それでも松明<sup>たいまつ</sup>代りになるから、それを明りにして肘掛椅子に腰をおろした。なにしろ、階段を歩いて降りるのに（エレベーターが動いていないのだから）一時間かかることを勘定に入れても、たっぷり二時間は暇潰しをしなくてはならなかったのだ。落ち着いていた気持が動揺し、変化しはじめていた。だが吾輩はそうした気持の動きを大いに興味をもって観察していた。それを完全に楽しんでいたので。その事態を説明するための論拠を挙げると言われれば、いくらだって列挙できた。まじめな話、真の闇に沈み、バターと紙の松明から出る悪臭と煙がたちこめ、完全に外界から切り離され、電話は童話しか話さないヒルトンのその客室が、想像しうるかぎりでは世界最高のすばらしい場所のように思えた。おまけに、だれでもいいから最初に出会った者の頭を撫でてやるか、せめてしっかりと手を握り、心をこめて相手の目をじっと見つめてやりたいというやみがたい願望を感じていたのだ。

どんなに手強い敵だろうと、抱擁して両頬にキスをしたかもしれない。バターは溶けてバチバチ弾け、煙をあげてたえず消えかかった。バターがボタンキューなんてくだらん駄洒落を思いついて笑いの発作に襲われた。紙の松明が消えそうになるたびにまたマッチを擦<sup>す</sup>って芯に火をつけ、指を焦がしているというのにだ。バターの松明が今にも消えそうにゆらいでいた。だが吾輩は、古いオペレッタのアリアを小声で口遊<sup>くずさ</sup>んでいて、悪臭で息がつまり、ちくちくする眼から涙が頬をつたって流れるのもまるで気にしていなかった。立ちあがろうとして、トランクにつまずき、もろに体を床にたたきつけられ、額に卵ぐらいのこぶができたが、それすら、吾輩の気分をさらに浮きたたせたにすぎない（それ以上は望めぬくらい上機嫌になった）。ひどい悪臭を放つ煙にまかれて窒息しかかっているというのに、くすくす笑っていた。それでもまだ愉快的な高揚した気分はちっとも変わっていなかったからだ。とっくの昔に正午を回っているというのに、吾輩は、朝から敷きっぱなしになって乱れているベッドに這いあがった。そういう手抜きをやる怠慢なメイドのことを、まるで自分の子供ででもあるかのように考えていた。つまり、甘い猫撫で声や優しいことば以外は、まるっきり頭に思いうかんでこなかったのだ。かりにこのまま窒息してしまっても、これこそまさに人が望みうる最高に甘美で、気持のよい死だぞ、という思いがちらっと頭をかすめた。そう認めることは、ひどく吾輩の性格と矛盾していたから、それを口にしたとたん、ショックをうけたように正気に返った。吾輩の心の中で驚くべき分裂が起った。魂は今までどおり、冷静で透明なやさしさ、言うなれば一種の、万人にたいする普遍的な好意に満たされていた。ところが手は、相手かまわずだれでもいいから愛撫したくてうずうずしていたから、人がそばにいないと、そっと優しく自分の頬を撫でたり、いたずらっぽく耳たぶを引っぱったりしたのだ。そして、しっかりと握手するため

に、何度も右手を左手に押しつけることもした。足までが身を震わせて愛撫しあうしまつだった。だが、そういうことをしていながら、吾輩の心の奥のほうでは警戒信号が点滅していたのだ。これはどこか間違っている！ 吾輩の中のどこか遠くでかすかな声が叫んでいた。注意しろ、ヨン、油断するな、警戒するんだ！ この天気は当てにならんぞ。さあ、今だ！ どうした、急げ！ 起きろ！ のうのうと寝そべっているな、煙と煤で涙を流し、額にこぶをこしらえ、普遍的好意を心に抱いているオナシスかなんかのようにな！ これは、陰険な裏切りかなんかのしるしだぞ！ その声が聞こえているというのに、吾輩は身動きひとつしなかった。おまけにのどがからからに渴いていた。心臓はさっきから高鳴っていた。だがそれがにわかに目覚めた博愛のせいだと言うつもりはない。吾輩はバスルームへ立った、ひどく水が飲みたくなったからだ。塩の効きすぎたサラダのことを、と言うよりは、あのひどいオードブルのことを考えた。だがそのあとで、試したJ・WやH・C・M、M・Wといった連中、それ以外にも吾輩の最悪の敵のことを想い浮かべてみたところ、心をこめて握手をし抱き合って接吻をして、兄弟のように、ほんの二こと三こと喋るだけでたがいに心が通じ合うことを望んでいる以外には、どんな感情もいっていないことがけっきりした。それこそ正真正銘の警報であった。片手をニッケルの蛇口につけ、もう一方の手に空のコップを持ったまま、凍りついたように体がこわばった。ゆっくりと水をコップに注いだ。そして奇妙な痙攣が起っている顔をゆがめながら自分の表情が鏡の中で闘っているのが映っていたのだ。水を捨てた。

そうだ、水道の水だ。この水を飲んでからだ、吾輩の中であの変化がはじまったのは。あの中になにか入っていたにちがいない！ 毒だろうか？ だがいちどもそんな話は聞いたことがなかったし、もしそれが……ちょっと待った。こう見えても吾輩は学術誌の定期購読者だ。科学新報誌の最新号に、いわゆるラブタミン(慈愛覚醒剤)系の、脳に抽象的な歓喜と落ち着きを呼び起す幻覚剤の新薬に関する論文が載っていた。そうだ、あれにちがいない！ 目の前にその論文が思いうかんだ。快楽剤、多幸剤、陶醉剤、至福剤、感情移入剤、恍惚剤、鷹揚剤等々、それに類したおびただしい薬だ！ それと同時に、水酸基系の薬をアミノ酸で置き換えれば、それから、憤怒剤、反目離反剤、加虐性歓喜剤、鞭推剤、虐待尤進剤、挫折惹起剤、落花狼籍剤や、それ以外にもさらに多くの鞭殺亢進剤系の中の狂暴性を増幅する興奮剤が合成できるのだ(なぜならこれら薬品を服用すると、周囲にあるものを、生命があろうとなかろうとおかまいなしに、鞭でひっぱたいたり愚弄したりする傾向があるからだ。その場合いちばん強力な効果があるのは、埋腐剤と焚殺剤のはずだった)。

電話のベルで思考が中断され、それと同時に明りが点いた。ホテルのフロントからかかってきたのだ。へりくだった丁寧な声が事故が起きたことをわび、正常に復しましたと

言った。廊下へ出るドアを開けて部屋の空気を入れ替えた。気がついてみると、ホテルの中は静寂が支配していた。どういうわけか頭がくらくらし、まだ祝福と抱擁を交わしたいというやみがたい願望に満たされていた。ドアに掛け金をかけると部屋の中央に座りこんで、己と闘いはじめた。そのときの状態を描写してみろと言われても、非常にむづかしい。さっきと同じようにすらすらとはどうしても考えられなかった。批判的な内省のひとつひとつが、蜜の中に沈みこんだようで、卵黄と砂糖をまぜたラム酒みたいにとろとろした自己満足にすっぽり包みこまれており、そこから、人のいい感情のシロップがしたり落ち、吾輩の心はまるで薔薇油や砂糖の衣に溺れているように、考えられるなかでいちばん甘い沼の中に沈みこんでいくようだった。そこで、意識を集中し、自分にとっていちばんいやなことや、対法王二連銃を持ったひげ面の男、頹廢した解放文学の出版社、連中のバビロニア＝ソドムばりの大狂宴、さらにはW・CとかJ・C・M、A・Kといったその他大勢のろくでなしや放蕩者のことだけを考えた。それは、自分があらゆる人間を愛し、相手がだれであろうとすべてを許すことを確認して、ふるえあがるためだった。ところが、たちまちどんな悪や忌まわしい行為であろうが、それを弁護する論証を思いついてしまったのだ。身近な人間に対する愛情が洪水のように吾輩を襲い、頭が割れそうになった。だが、ことに吾輩を不安にしたのは、善にたいする渴望 ということばがはっきり意味していることだった。幻覚作用のある毒物のことを考える代りに、できればよるこんで面倒を見たいと思っている後家さんや孤児<sup>みなしご</sup>のことをけんめいに考えていた。これまでかれらにろくすっぽ注意を払わなかったことに、しだいに驚きがつのってくるのを感じた。それに、貧乏人<sup>ひも</sup>や饑しい思いをしている者、病人、やくざにたいしてもだ。なんてことだ！

気がついてみると、吾輩はトランクの前でひざまずき、中身をそっくり床の上にぶちまけて、少しでもましなものを探していた。それを必要としている連中にめぐんでやるためだった。そのときふたたび、吾輩の潜在意識のなかで、警告を伝える声がかすかにした

気をつけろ！ 欺されるな！ 闘え！ かみつけ！ 突き刺せ！ 自分を救うんだ！

自分の中がかすかではあったがはっきりと叫んでいた。無惨にも自分がふたつに引き裂けているのを感じた。不意に、至上命令の強烈な電荷を感じた。こうなっては蠅一匹殺せないかもしれない。ううん、残念だ、ヒルトンには鼠どころか蜘蛛すらいない。いさえすれば、そいつらを着飾らせて、思いっきり可愛いがってやるものを！ ああ、蠅、南京虫、鼠、蚊、虱<sup>しらみ</sup> なんていとしいチビさんたちだ！ そのくせ、いっぽうでは机やランプや自分の足をも賛美していたのだった。だが、たとえ痕跡ではあったにせよ、理性はまだ吾輩を完全に見限ってはいなかった。だから、無意識に左手で右手を、と言うことは祝福を与えているほうの手を、吾輩があまりの痛さにその手をひっこめるまで叩きつけた。それも悪くはなかった！ 結局、それが救いになるかもしれないからだ！ 幸いにし

て、良いことをしたいという強烈な願望は、遠心分離機のような性質をもっている。つまり表現を変えれば、もっともっと自分をいじめ抜きたかった。手始めに、われとわが口を二回殴りつけると、口から火がでた。よし、この調子だ、もっとやれ！ 顔の感覚がまったくなくなってしまうと、こんどは<sup>くるぶし</sup>躁を蹴りはじめた。幸いにも、底がやけに固い、重い靴をはいていた。狂暴な足蹴をくらわせるという乱暴な治療を終えたとたん、たちまちいちだんと気分がよくなった と言うことはますます気分が悪くなったという意味だ。そこで試しに、J・C・A氏も同じように蹴とばしてやったら、どうなるか慎重に考えてみた。そんなことをするなんてもはやまったく論外だった。両足の躁がとびあがるほど痛んだし、そうした自己虐待のおかげで狙いすましてM・Wに一撃を加えることさえ想像できた。耐えがたい痛みは無視して、さらに蹴りつづけた。先がとがったものならなんだった効果があるから、フォークや、さらには、もう着ないシャツから抜きとった飾りピンまで使った。ところが順調にはいかなかった。と、言うより気持が動揺したのだ。だがすぐにまた、いちだんとすぐれたことのために己を責め苛む覚悟ができ、ふたたび吾輩の中でいっそう高貴で、名誉ある情熱の間欠泉が噴きあげた。だが、なんの疑念ももたなかった

水道の水の中になにかまじっていたことに。絶対にまちがいない……前からトランクに入っているが、まだ手をつけていない睡眠薬のことを思いだした。その薬を飲むと、きまって憂鬱<sup>ゆううつ</sup>で攻撃的な気分になるから使わないことにしていた。だが幸い、持ち歩いていたので。煤けたバターといっしょに錠剤を飲みくたした(水をまるでペスト菌でもあるかのように避けたからだ)。つぎに、睡眠薬の効果を中和させるために、カフェインを二錠むりやり飲みこんで肘掛け椅子にすわると、恐怖と無限の愛を感じながら、自分の体の中で起る化学的葛藤の結果を待った。愛がますます力を増し、いまだかつてないほど寛<sup>くろ</sup>いだ気持になった。どうやら悪の化学薬品が終局的には善の薬を圧倒しはじめたらしい。もともと慈悲深い行動をとる覚悟はできていたが、いまや何の躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>もなかった。たしかに、たとえいつときにしろ、とにかくどうしようもなく救いがたい悪党になろうとしていたらしい。

どうやらそんな状態が十五分は続いたようだ。シャワーを浴び、ざらざらけばだったタオルで体をこすり、とにかく大事をとってときどき顔をびしゃびしゃ叩き、傷ついた踝と指に絆創膏<sup>ばんそうこう</sup>を貼り(実際にあの試練が続いていたとき、ひどく自分をいためつけたのだ)、新しいシャツとスーツを身につけて、鏡の前でネクタイを直し、フロックコートをきちんとした。そして出かける前にしゃんとするためと、それにたしかめるためもあったが、肋骨の下あたりに一発拳骨をくらわせた。廊下にでるとちょうどいい時間だった。と言うのは、間もなく五時になるところだったからだ。予期に反して、ホテルのなかになにも異常なことは起っていなかった。その階のバーをのぞいてみたが、ほとんど人がいなかった。



法王暗殺計画者がテーブルによりかかっていた。二組の足がカウンターの下から突きだしていたが、一組は裸足だった。だが、どう見てもそれをまともに解釈することは絶対に無理だった。ダイナマイト派の別の男女一組は壁ぎわでトランプをやっており、もう一組はギターを掻き鳴らしながら、流行歌をうたっていた。階下のホールでは未来学者たちでござったがえしていた。つまり全員が会議の開会式にでてきたからだ。ホテルの建物の下のほうの階がそっくり開会式のために借りきってあったから、ヒルトン・ホテルを離れる必要はなかったのだ。最初はショックをうけたが、よく考えてみれば、こういうホテルの泊り客は水道の水など飲みはしないことがわかった。のどが渴けばコーラかシュワップスを飲むし、やむをえないときは、ジュースか紅茶か、さもなければビールですます。炭酸水やその他の瓶詰め飲料も利用される。かりにうっかり吾輩の二の舞を踏んだ者がいたとすれば、いまごろはきっと鍵がかかった部屋で四面の壁にかこまれて、普遍的愛の発作に身を焦がしてのたうちまわっているにちがいない。そういうことは、たとえそれが自分で体験したことであってもこのさい口にしないほうがいいと結論をくださった。つまり、吾輩はここでは局外者だから、信じてもらえないだろうし、精神錯乱を起したか幻覚を見たのだと思われるのが関の山だったからだ。入を麻薬中毒患者の傾向があると疑うぐらい手っとり早い方法がほかにあるだろうか？

のちになって、吾輩が三猿主義というか自己欺瞞的な逃避主義というか、そういう態度をとったことで責められた。吾輩が一切を明らかにしていたら、ああいう惨事にはいたらなかったかもしれないというのだ。だが、そういうことを言うやつらは、結局あやまりを犯しているのだ。と言うのは、吾輩にやれたことといえば、せいぜいホテルの客に警告できたぐらいのことで、ヒルトンで起ったことは、コスタ・リカの政治的急変にはいささかの影響も与えはしなかったはずだから。

会議場へ向かう途中、ホテルの売店で土地の新聞を全種類買いこんだ。そうするのが吾輩の習慣だったからだ。さりとして、どこへ行っても行く先ざきで買うわけではないが、教育をうけた人間だったら、スペイン語が喋れなくとも、書いてあることの要点ぐらいはわかるものだ。

演壇の上に飾りたてた板が吊りさがっており、その日討議される議題がそれに書いてあった。第一番目は世界的傾向にある都市の危機に関する問題で、第二は、生態学的危機、第三は、大気汚染による危機、第四は、エネルギー危機、第五は、食糧危機の問題だった。

そのあとに、休憩がくることになっている。技術、軍事および政治的危機は、さまざまな当面の問題と一緒に翌日に持ち越すことになっていた。

発言者の持ち時間は四分しかなく、それだけで論旨を要約しなくてはならなかった。だが六十四カ国から百九十八名が発言することになっていることを考慮すれば、それだって

長すぎるくらいだったのだ。議事の進行を早めるために、すべての報告書を会議前にあらかじめ自分の責任でよく研究しておかなければならなかったし、一方、報告者のほうはもっぱら数字だけで喋るのだ。つまりそうやって自分の研究の主な箇所を要約するわけだ。そうした貴重な内容の理解を助けるために、われわれは全員、めいめいの携帯用テープレコーダーかミニコンを使う。ついでに言えば、後者はあとで全部を接続して全体討議をすることになっていた。アメリカ代表のスタンレイ・ハゼルトンは、強調するあまり同じ数字を繰り返して会場にショックをあたえた 4、6、n、ここから 22 という結果が得られる。5、9、故に 22 だ。3、7、2、ふたたびそれからも 22 が導きだされるのだ!! だれかが立ちあがって、しかし 5 だ。あるいはことと次第によって、6 か 18 か 4 だ、と叫んだ。するとハゼルトンはたちまち打てば響くように反撃し、いずれにせよ 22 だということを説明した。吾輩は、かれの報告書の中で数字の鍵を探しだし、その 22 という数字がこの世の終末を意味していることを知った。つぎに発言したのは日本から来たハヤカワで、かれの国で考案された、未来のビルディングの新しいモデルが提示された。それは、六百階建てで、産科病院や託児所、小学校、商店、博物館、動物園、劇場、映画館、それに火葬場まで完備したビルディングであった。その計画は、物故者の骨灰を納める地下室や四十チャンネル TV 放送、酩酊房や酔い醒め小屋、グループセックス訓練所 (これは計画立案者たちの進歩的主張のあらわれである)、社会に順応しない、サブカルチャー・グループ用の地下墓地をも考慮していた。どの家庭も毎日、これまでの住いから別の住いへ、いうなれば、将棋の歩か桂馬を動かすように部屋を取り替えるのが当世風の考えかたであった。たしかにそれは退屈しのぎか、欲求不満の防止にはなるかもしれない。十七立方キロメートルの容積があり、土台が海の底で屋上が成層圏にまでとどくその建物は、特別に作られた結婚専用の電算機を備えていた。それは、<sup>サドマゾヒズム</sup>被加虐淫乱症の原理で男女を結びつける (サディストとマゾヒストが結婚すると、むしろ逆に固く結びついた、きわめて安定した夫婦関係を作る。それは、それぞれが夢見ていたものを、その結婚生活の中で発見するからだ)。また、そこには、自殺予防監視センターもあった。もう一人の日本代表、ハカワがそうした建物の 1 縮尺一万分の一の模型を見せてくれた。それには予備の酸素は備えつけてあったが、水と食料の蓄えはなかった。閉鎖<sup>リサイクル</sup>循環再生方式でその建物が設計されていたからだ。どんな廃棄物であろうと、臨終の床にある病人の汗や体からでる排泄物さえも無駄にしないで再生されるのだ。三人目の日本人であるヤハカワは、その建物全体の廃棄物から再生した珍味の食品リストを読みあげた。その中には人工バナナやしょうが入り菓子パン、小海老、<sup>かき</sup>牡蠣、さらには、原料のことを考えるとつい不愉快な連想をする。それにもかかわらず、味はシャンパーニュの最高級ワインにひけをとらない人工葡萄酒<sup>はく</sup>まで含まれていた。会場には、優雅な瓶に詰めたその試供品が出ていたし、アルミ箔に

くるんだパイもあったが、さすがにだれもワインに手をだそうとするものはいなかった。パイもこっそりと椅子の下に突っこまれてしまった。もちろん吾輩もそうしたことは言うまでもない。そうしたビルが強力な回転翼で飛ぶことができ、したがって団体旅行が可能となるはずだったのだが、この原案はつぶれてしまった。それは第一に、ざっと見積っただけでもそうした建物の建築費は九億にはなるはずだったし、第二に、そういう旅行には意味がなかったからだ。たとえ建物に出口が千ヵ所あり、そこに住んでいる連中がそれを全部利用したにしろ、かれらが全員そこから出ることはできないだろう。なぜなら最後の一人が建物を離れる前に、それ以前に生まれた子供たちが大人に成長してしまうからだ。

日本人たちは、その計画がすこぶる気にいっているようだった。かれらのあとに、アメリカ代表団のノーマン・ユーハスが発言し、爆発的に激増する人口を食いとめる七つの異なる対策を提案した。その方法とはつまり、広報活動と警察権力による禁欲、色情除去処置、強制的妻帯禁止、自慰奨励、男色化の督励、齢よびそれに従わないものに関しては、去勢処置をとることだった。すべての夫婦は、三つの部門つまり、交接、教育、非偏向部門で然るべきテストに通って、子供を持つ権利を獲得しなくてはならない。非合法に出産した場合は処罰され、予謀および累犯は終身刑に処せられる。その報告には、折り込みと、切り離しができるきれいなクーポン券の綴りがついており、あらかじめ会議資料として渡されていた。そこでハゼルトンとユーハスは、新しい職種として、つまり結婚監視官、婚姻阻止員、離婚促進委員、夫婦間介入官を設けるべきだと提案した。受胎することは、社会的に極めて有害であり、それを重大な違法行為と見なしている新しい刑法の法案が、ただちに採択された。その法案が通過するときアクシデントが起った。傍聴席から会議場にモトフカクテル 火災びんを投げこんだやつがいたのだ。緊急処理班が(ロビーにこっそり隠れて、配置されていた)、必要な処置をとり、保安隊員たちが手早く破壊された椅子や遺体に、愉快的美しい図柄を描きこんだシートをかけた。おそらく、あらゆる場合を想定していたにちがいない。報告の間合を見て、土地の新聞に目を通してみることにした。そこに書かれているスペイン語は、十語のうち五語しか理解できなかったが、政府が機甲部隊を首都へ集結させ、全警察を非常警戒体制に入らせて、非常事態宣言を発したということぐらいは読みとれた。壁の外に深刻な事態が支配していることを理解している者は、吾輩いがいに会場にはだれもいないようだった。七時に休会に入り、全員が食事をとりにでた。もちろんそれはめいめいの個人負担だった。会場へもどる途中、官報『<sup>ナシオン</sup>国家』の特別号と、過激な野党の発行している夕刊を何種類か買いこんだ。スペイン語に苦労はしたが、それらの新聞を読んで、あきれてしまった。国際的な愛情関係がつまりは普遍的幸福の保障であるという、底抜けに人のいい楽天的な論調にあふれた社説があるかと思えば、その隣には、血にまみれた弾圧を書きたてた記事や、これまた流血でもって鎮圧された過激派の暴動の記事

が並んでいたからだ。このでたらめぶりは、その日ある記者は水道の水を飲み、別の記者は飲まなかったと考える以外説明のつけようがなかった。右翼の新聞社の連中はあまり水を飲まなかったことは言うまでもない。なぜなら、そういう新聞の編集者たちは、反対派の連中より給料がよかったから、仕事をしながら景気づけにうんと上等な酒を飲んでいるからだ。ところが、過激派は、高尚なスローガンとイデオロギーのためにいくら禁欲主義的な傾向があるから、どんなにのどが渴いても水しか飲まない。コスタ・リカにはメルメノールの果汁を発酵させたクオルツピオというただ同様の安い酒があるというのにだ。

全員がふかふかした革の肘掛椅子に身を沈め、スイスのドリンゲンバウム教授が、スピーチの最初の数字を喋りはじめたとたん、異様な爆発音が聞こえてきた。建物がかすかではあるが土台から揺れ、窓ガラスががたがた鳴りだしたが、楽天的な連中は大声で、これは地震にすぎんと言った。だが吾輩としては、会議が始まったときからホ・テルの前でピケを張っていた抗議派の教徒らしい一団がホテルへ爆竹を投げこんだのだと言いたところだった。ところが、さらに強烈な炸裂音と轟音を聞くに及んで、吾輩の意見は変わった。つづいて、あの特徴あるマシンガンの<sup>スタックカート</sup>連射音も聞こえてきた。もはや疑問の余地はなかった。

コスタ・リカ共和国は今や市街戦の段階に入っていたのだった。最初に会場から姿を消したのは、銃声を聞いたとたん衝動に駆られたように立ちあがった新聞記者連中だった。仕事にたいする義務感にかりたてられて、通りへとびだしていったのだ。だが、ドリンゲンバウム教授はしばらくすると、かなり厭世的な論調で書かれた講義をまだ続けようとした。

それが悲観的であったのは、<sup>カニバリズム</sup>人肉を食うのが来たるべき文明の次の段階だと、かれは確信していたからだ。教授は、有名なアメリカ人たちの理論を引用していた。その理論によると、地球上のあらゆることがこれまでどおり進行すれば、ここ四百年の間に人類は光速で拡大する生きた球体になってしまうと言うのだ。ところが、また爆発が起って、報告は中断してしまった。未来学者たちは右往左往して、会場から出はじめたが、ロビーでく解放文学会議 V の参加者と入りまじってしまった。だが連中の姿を見れば、人口過剰の脅威などにはまるきり関心がないことを示している行為の真最中に戦争が勃発したことが歴然としていた。A・クノップ出版社の編集者たちのうしろで、秘書嬢たちが(連中が丸裸だとはいえないが、肌に「オップ・アート」風の絵を描いている以外はまったくなにも身につけていなかった)、携帯用の水パイプや水煙管<sup>ぎせる</sup>を持って、それで LSD とマリファナ、ヨヒンビン、鴉片を混合した<sup>はやリ</sup>流行の麻薬をすっていた。聞いた話では、合衆国郵政大臣が、もっとみんなで近親相姦をやろうと呼びかけた印刷物を部下に命じて焼き捨てさせたと言って、解放文学の代表たちは大臣の人形を作り、それを焼いたということだ。今しも



その連中がロビーに集まってきて、状況の深刻さを考慮すると、ことにひどく不穏な振舞いをはじめた。連中のなかで公衆道徳を乱さなかったのは、すっかり疲れきってしまったか、まだトリップ状態にあるやつだけだった。電話室から悲鳴が聞こえてきた。電話交換嬢たちが襲われているのだ。豹の毛皮を着て、ハシシの松明を手に持った布袋腹の男が、クロークの衣服掛のあいだを走りまわって、そこの女たちを追いかけていた。フロントマネージャーたちがボーイの手を借りて、やっとのことで男をとり抑えた。中二階から吾輩たちの頭上にカラー写真を一抱え投げつけたやつがいる。その写真には、人が淫欲に影響されると他人にどんなことまでするかとか、ほかにもっといろんなことの実例が詳細に写っていた。通りへ最初の戦車が姿を現わすと窓からはっきりと見てとれた恐怖にかられたラベル収集家や抗議派の連中がエレベーターから群れをなしてとびだしてきた。出版社の連中が持ちこんだ、だが今ではホテルの床を一面に覆っている例のパイやオードブルを踏みつけて、入ってきた連中が四方へ逃げ散った。怒り狂った水牛のよけに吠え、対法王銃の台尻で道を塞ぐやつをだれかれなくぶん殴りながら、群集を押しつけているのは、ひげ面の反法王主義者だった。これは自分の目で目撃したのだが、かれはホテルの外へ走りでると、かたわらを駆け抜けていく連中に物陰から銃火を浴びせかけたのだ。

どうやらこのもっともラジカルな過激派の思想を奉じている男にとって、とどのつまりは誰を射とうとそんなことはどうでもいらいしい。恐慌と淫乱の叫喚に満ちていたロビーが正真正銘の修羅場に変じたのは、すさまじい音をたてて大きな窓ガラスがぐだけ散ったときだった。顔見知りの記者たちを懸命に探していると、かれらが通りへとびだしていくのが目に入ったから、吾輩もそのあとを迫った。ヒルトンの中の空気はすでにあまりにも息苦しくなりすぎていたからだ。ホテルの軒下で、車寄せのコンクリートの縁に身を隠して、カメラマンが二人、あたりの光景を猛烈な勢いでフィルムに納めていた。もっともたいてい意味のある場面はなかったが、最初に炎上するのが外国のナンバープレートをつけた車であり、火の手や煙があがるのは、まずホテルの駐車場であるということがよくあるからだった。吾輩のそばに立っていた AFP のモーヴァンは、自分がハーツで借りて乗ってきたダッジがパチパチ音をたてて燃えあがるのを見て、手をすり合せながらさも満足そうに声をあげて笑った。だが大半のアメリカ人記者にとってはそれどころではなかった。気がついてみると、炎上している自動車の火を消そうとしている連中がいた。それはほとんどが貧しい身なりをした老人たちで、近くの噴水からバケツで水を運んでいたのだ。吾輩はそれを見て考え込まずるをえなかった。遠くの、救世主大通りと復活大通りが終っているあたりで、警官のヘルメットが鈍い光を放っていた。だが、ホテルの前の広場も、それを取り囲むこんもりと茂った株欄の生えている芝生も、そのときはまだまったく人影がなかった。老人たちは、年のせいで足がすっかり弱っているというのに、しゃがれ

声を張りあげて、夢中で消火作業に熱中していた。そうした犠牲的行為は吾輩に強烈な印象をあたえた。だがそのときまったく唐突に、今朝体験したことを思い出し、すぐに自分の疑問をモヴァンに話した。マシンガンの速射音と、鼓膜が破れそうな砲弾の炸裂音が邪魔になって喋りづらかった。しばらくはこっちの言っていることがさっぱりのみこめなれていることが、フランス人の考えこんでいる表情を見ていてわかった。だが不意に、かれは目を輝かせた。「そうか！」かれはあたりの騒音を圧倒するような声で怒鳴った。「水だ！ 水道の水だ、そうだろう？ 歴史上はじめてだ、畜生！ .....水隠れ化学忍法だぞ、それは！」

そう言うと、針で刺されたようにとびあがってホテルに駆けこんだ。明らかにそれは電話をかけるためだった。しかしそれにしてもまだ電話が通じるというのは不可解だった。

吾輩がまだそのまま車寄せのところに立っていると、スイスの未来学者、トロツテルライナー教授が寄ってきた。そのとき、もっと前に当然講じてしかるべき処置がとられた。

つまり、黒いヘルメットをかぶり、防弾用の黒い胸当てをつけ、防毒マスクをし、手に武器を持った警官たちが、ヒルトンの建物全体に非常線を張り、野次馬を締めだしにかかった。連中が、市の劇場の建物とホテルの間にある公園のほうから流れこんでいたからだ。

特殊部隊が手早く<sup>てきだんとう</sup>擲弾筒を組み立て、野次馬めがけて一斉射撃を行なった。妙なことに爆発は小さかった。だがその代り、白っぽい煙がもくもくと立ちのぼった。とっさに、催涙ガスだな、と思った。ところが、野次馬は逃げだしたり激しく苦しむどころか、明らかにその薄い<sup>もや</sup>霧のほうへ群がりはじめたのだ。叫び声がびったりとやみ、それにかわって御詠歌が讚美歌のような歌声がわき起った。記者たちはカメラとテープレコーダーを持って非常線とホテルの玄関のあいだを右往左往し、いったいどうなっているのかさっぱりわからずとまどっていたが、吾輩はとっくに見当がついていた。明らかに、警官はエアゾル状の鎮圧用化学薬品を使ったのだ。ところが、大通り<sup>おほ通り</sup>のほうから通りの名前は忘れてしまったが別の一隊がやってきた。どうやらその連中はガス弾にやられなかったと見える。あるいはただそう見えただけかもしれない。と言うのも、あとで聞いた話では、その野次馬の一隊は、警官隊の非常線を突破するのではなく、かれらと兄弟の契りを結ぶために前進しつづけたというからだ。しかし、ああいう大混乱のなかでそういう微妙な違いがわかる者がはたしているだろうか？ 郷弾筒の一斉射撃が起り、水鉄砲がその独特の騒音と甲高い声でそれに応じ、ついにはマシンガンの連射音がひびき渡り、たちまちあたりの空気が弾丸のかなでる歌で満たされてしまった。もはや冗談を言ってる場合ではなかった。吾輩は、塑壕の胸壁のうしろへでも隠れるように、車寄せのコンクリートの縁のうしろへ転がりこんで、スタンターとワシントン・ポストのヘーンズのあいだに割りこん

だ。二人にかいつまんで例の話をした。ところが、吾輩が、一面のトップを飾る第一級の秘密を AFP の記者に渡してしまったと言ってかんかんになって怒った二人は、こうようにしてホテルに駆け戻っていった。だがすぐに顔にがっかりした表情をうかべて戻ってきた。電話が通じなかったからだ。しかしスタンターは、ホテルの守備を指揮している将校をつかまえ、間もなく愛爆 1 つまり隣人愛誘導爆弾 (別称、誘愛弾ともいう) を積んだ飛行機がやってくることを聞きだした。どういうわけか、凌だちに場所を明け渡すように命じられ、警官たちは一人残らず全員が特殊なフィルター付きの防毒マスクをかぶった。吾輩たちにも同じものが配られた。

トロツテルライナー教授は、たまたまそうだということがわかったのだが、幻覚薬物学の領域の専門家だったので、吾輩に、どんなことがあっても防毒マスクを使ってはならんと警告してくれた。つまり、エアゾールの濃度が高くなるとマスクの保護機能が作動しなくなるというのだ。要するに、いわゆる 逆流 と呼ばれる現象がフィルターに起り、そうなると、一瞬にしてふだん呼吸しているよりはるかに大量の空気を吸いこんでしまうのだ。吾輩の疑問に答えて、唯一の救済策は酸素ボンベしかない、かれは言った。そこで吾輩たちはホテルのフロントへ行き、まだ持ち場を離れずにいた係の男を見つけ、かれの手を借りて消火道具が入っている倉庫を探しだした。たしかにそこには、ドレイガー<sup>\*2</sup>の閉鎖循環式酸素ボンベがあった。それを身につけて完全防備をした吾輩と教授が通りへ戻ってくると、それを待っていたかのように、空気を切りさくような甲高い声で、ほどなく友軍機の最初の一隊が飛来するとアナウンスがあった。ところが周知のごとく、空襲が始まった直後、あやまってヒルトン・ホテルが 誘愛弾 で爆撃されたのだ。その誤爆の結果たるや、目を覆うばかりの惨状を呈した。たしかに誘愛弾が落下したのは、低くなっているビルの端のほうの部分だったが、そこには 解放文学出版社 が出品した展示物が、賃貸しの陳列台に並んでいただけだったから、さしあたってはホテルの泊り客が被爆するということはなかった。ところが、吾輩たちを警備していた警官たちがもろに被害をうけたのだ。たちまち、警官隊は隣人愛の発作にのみつくされてしまった。吾輩の目の前で、警官たち倣顔からマスクをかなぐり捨てるや、悔恨の苦い涙をさめざめと流し、デモ隊の前にひざまずいて許しを乞い、自分たちの太い棍棒を無理やりかれらに押しつけて、思いきりそれでひっぱたいてくれと懇願しだすしまつだった。ところが、そのあとエアゾールの濃度がいちだんと濃くなった誘愛弾が落下しはじめるに及んで、法の番人たちはたがいに我先に駆け寄って、そばにいる者と相手の見境いもなく抱きあって愛撫しはじめたのだ。いったいなにが起ったのか、事態の経過を再構成することができたのは ただし部分的にはあるが その悲劇的事件がすっかり終わった数週間あとのことだった。その日

<sup>\*2</sup> ドイツの科学者。救急装置を発明した。

の朝、政府は給水塔に穏健臭化カリと至福剤、中庸剤、超歓喜剤を投入し、準備されているクーデターを芽のうちに摘んでしまう決定をくださった。その前に、警官隊と軍隊の施設への給水が断たれた。ところが、その計画の専門家がいなかったために、当然のことながら失敗に終わった。つまり、マスクのフィルターに逆行現象が起ることも、いわんや社会的に異なったさまざまなグループが飲み水を利用するしかたは千差万別だということも計算に入れていなかったからだ。

かくして警官の変節に政府関係者はひどいショックをうけた。トロツテルライナーが説明してくれたのだが、それは、各種鎮静剤に屈伏した人間が、自然本来の善意と好意の衝動に従う度合が弱くなるにしたがって、薬の効果がますます強くなるからだ。そのことは、次のような事実からも明白だった。第二波として飛来した二機が、官公庁や、警察及び軍のもっとも重要な施設に誘愛弾を投下すると、それまでとってきた政策を悔い、良心の呵責に耐えきれず、自殺が起った。ディアス將軍自身が、リボルバーで自から命を絶つ前に、刑務所の門を開き政治犯を一人残らず釈放しろと命じたということをつけ加えれば、その夜起った戦闘がいかに激烈であったか容易に理解できるはずだ。ところが、町から遠く離れたところにある空軍基地は、まだ無傷のままで、そこの将校たちは与えられた命令をとことんまで遂行したのだ。いっぽう、密閉した掩蔽壕<sup>えんぺい</sup>にいた警察と軍の観測者たちは、事態の進行を見ていてついに最後の手段に訴えた。つまり、ノウナス全市を感情的混乱の坩堝<sup>るつぼ</sup>に投げこんでしまったのだ。だが、ヒルトン・ホテルにいた吾輩たちは、当然のことながら、そんなことになっていようとは知るよしもなかった。戦争劇の舞台に、と言うことは、今や広場とそれをとりかむ棕櫚の植わった公園に移っていたが、陸軍機甲師団の最初の部隊が登場したのは夜中の十一時だった。連中がやってきた目的は、警官隊のあいだに蔓延<sup>まんえん</sup>している隣人愛を鎮圧するためだったのだ。かれらは血も涙もなく、それをやってのけた。気の毒だとしか言いようがないが、アルフォンス・モーヴァンは、剥愛榴弾が炸裂した場所から一步と離れていないところに立っていたから爆風で左手の指と左の耳をもぎとられてしまった。ところがかれは、こんな手なんか前からどうでもよかったし、耳のことで別だん言うべきことはない<sup>と</sup>と断言した。そして、もし要るのなら、今すぐ残っているほうもくれてやってもいいと言って、ポケットからナイフをとりだした。だが、吾輩はそれをそっとかれに押し返し、急持えの救護所へ連れていき、そこでかれは解放文学出版社の秘書たちに世話をしてもらった。ところが、その女たちは、だれもかれも化学作用のおかげでさめざめと涙を流して泣きわめいていた。しかもそれだけではない。彼女たちはつつましくかに衣服を身にまとい、中には人が邪心を起し罪を犯すことがないようにと間に合せの布で顔にベールをかぶっている者までいるしまつだった。ごくわずかではあったが、薬の影響が強すぎて、髪をばっさり切り落とし丸坊主



になってしまった気の毒な女もいた。救護所から帰る途中、運が悪かったとしか言いようがないが、出版社の連中にばったりとでくわしてしまった。ところが最初はかれらだということがわからなかったのだ。と言うのも、連中は古い麻袋らしいものを着こみ、わが身を打ちすえる鞭がわりにも使う紐で腰をしめており、慈悲を求めて泣きわめき、先を争って吾輩の前にひざまずき、社会を墮落させたのでぜひ鞭で徹底的に打ちすえてほしいと懇願したからだ。連中をよくよく見ると、その鞭撻宗徒たちの中に プレイボーイ の編集スタッフが編集長も含めて全員いるではないか！ そのときはさすがの吾輩もたまげた。ことに、編集長はどうあっても吾輩を通らせようとしなかった。それくらいひどくかれは良心の呵責にさいなまれていたのだ。連中は、酸素マスクをしていた影かげで、吾輩だけがまだ頭に毛が残っていることを知り、ぜひそれを刈らせてくれと哀願しだした。だから結局、渋々ではあったが折れて、後で悔いのないよう連中の願いを聞き入れてしまった。腕がしびれ、酸素マスクをしていても呼吸が苦しくなってきた、このボンベが空になっても、中身が詰まつた別のがみつかるだろうかと心配になってきた。ところが連中はこっこの不安をよそに、長い列を作って、自分の番がくるのをいらいらしながら待っていた。だからかれらを追い払うために、しまいには色刷りの大きな絵を一枚残らず全部拾い集めると命じてやった。絵は、ヒルトン・ホテルの端のほうの建物に 誘愛弾 が落ちたとき、ロビー全体に撒きちらされ、だから、さながらソドムとゴモラを一緒にしたような様相を呈していたからだ。連中は、吾輩の指示にしたがってホテルの前へ絵を運びだし、それを山のように積みあげて焼き払った。ところが運が悪いことに、公園に配置されていた砲兵部隊がへその火の手をなにかの合図と勘違いし、吾輩たちに集中砲火を浴びせかけてきたのだ。いちはやく吾輩は姿をくらましたが、その直後、地下室でハーヴェイ・シムズワースという男の手に落ちてしまった。それは、童話をポルノ文学に書き変えることを思いついた作家だった（『長い長い赤頭布』や『アリババと四十人の性倒錯者』を書いたのはこの男だ）。いっぽう世界の古典文学を改作してがっばり稼いだりもした。また、あらゆる作品のタイトルに ……の性生活 をくっつけるという簡単なやりかたも使った（たとえば 『白雪姫と小人たちとの性生活』、『赤毛のアンの性生活』、『アラジンとランプとの性生活』、『不思議な国のアリスの性生活』といりた具合にだ）。吾輩は、手が動かないと言いつい逃れをいって見たが無駄だった。だったら とそいつはさめざめと泣きながら叫んだ

思いきり足で蹴とばしてもらえばいい、と。いったいどうしたらいいのだまたもや、拒絶するなどという非情なことはできなかった。おかげでくたくたに疲れてしまい、やっこのことで消火用具が入っている倉庫にたどりついた。幸い、手つかずの酸素ボンベがいくつか見つかった。そこで、トロツテルライナー教授が、消火ホ喜スの束に腰かけて未来学の論文に読みふけていた。仕事の性質上、会議をめくり歩く生活を送っているから、

たとえわずかでも暇を見つけると、よろこんでそれを利用するのだ。そうこうしているあいだも、誘愛弾の爆撃は猛烈に続いてい売コトロツテルライナー教授が、愛情発作が激しい場合は(普遍的善意の衝動が愛撫の痙攣を伴うときがことに深刻であるが)、湿布をし、ひまし油の大量服用と胃の洗浄を交互に繰り返すよう忠告してくれた。

記者室で、スタンターとヘラルドのウーレイ、シャーキー、一時的にパリ・マッチのために働いているカメラマンのクンツが顔にマスクをしたままトランプをやっていた。電話回線が使えなくては、ほかにやることがなかったからだ。吾輩が連中の勝負を観戦しはじめたときだった。アメリカ・ジャーナリスト界の大物、ジョー・ミッシンジャーが駆けこんできて、「慈悲剤に対抗するために、激昂薬の錠剤が警官たちに配られたぞ」と怒鳴った。繰り返して言われなくとも、それがどういう意味かわかったので、吾輩たちはすぐさま地下へ駆けつけた。ところがその噂がでたらめであることがすぐにわかった。そこで様子を見にホテルの外へでてみたところ、建物の上から数十階がなくなっているのに気づいて憂霧になった。廃號の雪崩が、吾輩の部屋を、他の部屋もろとも呑みつくしていたのだ。炎の明りが空の四分の三を覆っていた。ヘルメットをかぶった肩幅の広い警官が、未成年らしき男を追いかけながら怒鳴っていた。止まれ、頼む、止まってくれ、おれはお前を愛しているんだ。だが、追われている男はその告白を無視した。どういうわけかあたりが静まりかえった。そうなる職業の好奇心が記者たちをそっとしておかなかった。そこで吾輩たちは、用心しながら公園のほうへ向かった。そこでは秘密警察が公然と参加しているミサ。黒白、ピンク、はてには混合ミサまで行なわれていた。そのそばに大群集がひしめき、さめざめと涙を流しているではないか。かれらは大きな字で、罵倒しろ、俺たちは煽動者だ！と書いたプラカードを頭上に高々とかがけていた。信念を翻したそのおびただしい数のユダの群れから判断すると、それだけの人員を動員するのに要した政府の出費は相当な額に達したはずだし、コスタ・リカ共和国の経済状態に悪い影響を及ぼしたにちがいない。ホテルへ引きあげてくると、その前に別の群集がむらがっていた。警察犬が、アルプスのセントバーナード犬のように影となしくなってしまう、ホテルのバーから高価な酒を持ちだしてきて、それをだれかれの見境いなく配って歩いていた。ところがそのバーでは、警官と過激派の連中が入りまじって、革命的な歌と保守的な歌を代りばんこにがなりたててい右しまつだった。そこで地下室に立ち寄ってみたが、そこでは人が争って改宗したり、懺悔したり、忠誠を誓ったりしていた。その光景が見るに耐えなかったため、その場を離れて、さっきも話したとおりトロツテルライナー教授がいる消火用具の倉庫へ、かれと話をしに向かった。ところが驚いたことに、教授はいつものまにか三人の相手を見つけ、その連中とブリッジをやっていたのだ。ケツアルコアトル助教授が切り札のエースのおかげで勝った。するとトロツテルライナー教授はそれにひどく腹

をたてて、憤然と席を立ててしまった。吾輩が他の連中と一緒にかれをなだめていると、シャーキーがドアから首をだして、アクイロ將軍の演説をトランジスターラジオで聞いたと言った。それによると、將軍は通常爆弾でもって暴徒を情容赦なく鎮圧するつもりらしい。吾輩たちは、簡単な作戦会議を開いて、ヒルトンのいちばん下の階へ避難することにした。つまり待避壕の下にある下水道へだ。ホテルの調理場は廃墟と化していたから、食い物はなかつたり腹をすかした抗議派やラベル収集家、出版関係者たちは、ホテルの建物の端のほうにある<sup>ひとけ</sup>人気のない エロチカ・センター で見つけた強壮チョコレートや栄養剤、精力賦活ゼリーに争ってとびついた。見ていると、エロミンとかラブセクシンといった興奮剤が連中の血管の中で慈悲剤とまじるにつれて、表情に変化が現われた。そういう化学的エクスタシーがどういう結果をもたらすか、考えただけでぞっとした。未来学者たちが、インド人の靴磨きを愛撫し、秘密情報部員がホテルのメイドに抱かれ、丸々と太ったでかい鼠が猫といちゃついていた おまけに、警察犬たちはなんでもかんでも見境いなくなめまわしていた。吾輩たちは遅々として前進できなかつた ボンベを背負って群集を掻きわけて進まなくてはならなかつたからだ そのあまりの遅さにいらいらしてきた。ことに、吾輩は<sup>しんがり</sup>殿を務め、予備の酸素ボンベを半ダースも運んでいたからだ。手や足にキスをされ、撫でさすられ、拝まれ、思いきり抱きしめられたり愛撫されて息がとまりそうになりながら、しゃにむに押し進んでいくと、やっとスタンターが勝利の歓声をあげるのが聞こえた。下水道の入口を見つけたのだ。全員で最後の力をふりしぼって重い蓋を持ちあげ、一人ずつマンホールの中へおりはじめた。トロツテルライナ富教授が鉄梯子の段を踏み外したので体を支えてやりながら、会議がこんなことになると思像していたのかと訊いてみた。ところがかれは返事をする代りに吾輩の手に接吻しようとした。だからたちまち疑惑が頭をもたげた。どうやらマスクが少しずれていて、薬品に汚染された空気をいくらか吸いこんでしまったらしい。吾輩はためらわずに思いきりぶん殴ってやり、新鮮な酸素を吸わせ、ハヤカワの論文を朗読させてやった もっともそれはハウラーが思いついた構想であったが。教授は、聞くに耐えない悪態をひとくさり並べたてて正気に返ったことを立証してみせてから、一緒に進軍を続けた。ほどなく、下水道の黒い水面に、ほの暗い懐中電灯の明りに照らされて油の斑点が浮かびあがった。吾輩たちはそれをきわめて歓迎すべきしるしととった。と言うのは、誘愛弾 で爆撃された町のある地表から、十メートルの厚さはある土で吾輩たちはへだてられていたからだ。この避難場所のことを思いついたのが、なにも吾輩たちが最初ではなかつたことを知ったときは、いや驚いたのなんの！ ヒルトン・ホテルの経営者が全員、コンクリートの狭い通路に座りこんでいたのだ。抜け目のない支配人たちはホテルのプールにあった空気でふくらますビニールの椅子やラジオ、ウィスキーを一揃い、清涼飲料、それにサンドイッチ類をたっぷり持

ちこんでいた。連中も酸素吸入器を使っていたから、たとえわずかでもそれを吾輩たちにわけてくれることなど、まずもって期待できなかった。だが、吾輩たちは威嚇的な態度をとったし、それに数の上でこっちが優位に立っていたから、無理やり承知させてしまった。いささか強引ではあったが、とにかく納得ずくで吾輩たちは海老を食いにかかった。会議のプログラムには載っていない、この予期せざる食事をもって、未来学会議の第一日は幕を閉じたのだ。

## 第2章

嵐のような一日の体験でくたくたに疲れはてていたが、寝る準備にとりかかった。だが、明らかに下水道の通路である、うんと狭いコンクリートの上で眠らなくてはならないことを思うと、そこはまさにスパルタ人の環境などくらべものにならぬくらい厳しい場所であった。だから、先見の明があったヒルトン・ホテルの経営者たちが持ちこんだ空気式椅子をいかに公平に配分するかという問題がまず持ち上がったというわけだ。椅子は六脚で、十二人しかかけられなかった。つまり、六人編成のホテルの管理者たちは、協調の原則にしたがってめいめいが秘書をねぐらにうけいれるつもりだったからだ。いっぽう、スタンターに率いられて下水道へ入りこんできた吾輩たちは二十人もいた。つまり未来学者のグループ、ドリングンバウム、ハゼルトンおよびトロツテルライナー教授の面々、新聞記者とCBSのテレビ解説者たちのグループ、来る途中自分から進んで加わった二人、つまりだれも何者が知らない、革ジャンパーと乗馬ズボンの屈強な男と、それにプレイボーイの編集者の個人的助手である可愛いジョー・コリンズだった。スタンターは、彼女の化学的变化をうまく利用して一稼ぎするつもりでいたし、耳に入った話によると、ここへ来る途中すでに彼女の回想記の初版を出版する権利を譲り受ける約束をとりつけてしまったらしい。椅子が六脚しかないのに希望者が三十七人もいるとあって、たちまち状況は緊迫した。ぜがひでも手に入れようと思っているそのねぐらをはさんで、吾輩たちは上目づかいににらみ合って立っていた。もっとも酸素マスクをかぶってはいはやりづらかったが。いち、に、さんの合図と同時に全員がマスクをとろうではないかと言いだした者がいた。実際にそうすれば、だれもが利他主義的気分に襲われ、それで争いの種はなくなってしまうことは明白だった。それがわかっていながら、だれ一人としてその案をいそいで実行に移そうとする者はいなかった。さんざん言い争ったあげく、最後に妥協したくじ籤くじびきで順番をきめ、交替で三時間ずつ眠ることになったのだ。きれいに印刷したセックス・クーポン券の綴りを籤くじに利用した。何人かがまだそれを持っていたからだ。吾輩は、最初にガリガリにやせた・骨だけと言っていいトロツテルライナー教授と一緒に寝なくてはならないことになった。ベッドを(と言うよりは椅子を)共にするんならもう少しかれに肉がついていてもらいたいものだ。吾輩たちは次の番の連中に乱暴に叩き起された。そ



してやつらはあたたかいねぐらに体を横たえた。ところがこっちは下水道の岸にしゃがみこみ、酸素ポンベのことが気かりでその圧力計をチェックした。あと数時間もすれば酸素が尽きることがわかった。そうなればいやおうなく慈悲薬物を吸いこむことになる。それは絶対に避けられない。そう思うと全員が憂鬱な気分になった。吾輩がすでにあの脱惚とした至福状態を体験したことがあると知って、仲間たちは、それがどんな感じが教えるとうるさくせがんだ。吾輩はかれらに、それほど悪いもんじゃないと請けあった。だがそうは言ったものの、あまり自信はなかった。どうしようもなく眠かった。下水溝に転がり落ちないように、吾輩たちは適当なものでマンホールの下鉄梯子に体をしぼりつけた。それまでよりはるかに強烈な爆発音の余韻で、不安なまどろみが中断された。あたりを見まわした。薄暗い闇が支配している。節約のために懐中電灯は一個を残して全部消してあった。下水溝の縁を、大きな丸々と太った鼠たちが這いまわっていた。そいつらが一列になって、しかも後足で歩いているのは実に奇妙だった。体をつねってみた。だがやっぱり夢ではなかった。吾輩はトロツテルライナー教授を起し、かれにその現象を見せてやった。かれにもそれをどう考えていいのかわからなかった。鼠たちは二匹ずつ組みになって歩いており、吾輩たちのことなどまるで眼中になかった。とにかく連中はわれわれにキスをしようとはしなかった。教授に言わせれば、それはいいしるしだそうだ。空気が薬に汚染されていない可能性がきわめて強いからだ。吾輩たちは、慎重にマスクをはずしてみた。吾輩の右側で二人の記者がぐっすり眠っていた。鼠たちは相変わらず二本足で歩きまわっている。ところが吾輩と教授はくしゃみをしはじめた。鼻がむずむずしたからだ。最初は、下水道の臭いのせいだと思った。だがそれも小さな根に気がつくまでだった。二人は体をかがめて自分たちの足許を見た。見間違いようがなかったつ根を払いのけると、膝のあたりから上にかけてみどり色になっていた。そのときはすでに腕にも芽がでていた。たちまち芽が開き、見るまに生長しふくらんできたが、たしかにそれは蒼白かった。もっともそれは地下で生長する植物によくあることだ。しばらくすれば実がなりそうな感じがした。それをどう解釈したらいいのかトロツテルライナーに訊いてみたかったが、声をはりあげなくてはならなかった。かれが騒々しい音をたてていたからだ。眠っている連中も、薄紫色や深紅色の花をいっぱいつけた、刈りこんだ生垣に見えた。鼠たちがその葉をむしりっては食い、ひげを足で撫でつけ、さらに大きく生長していった。もう少しすると、やつらに乗っかることができそうだった。まるで樹木のようにひどく太陽が恋しくなった。うんと遠いところでときどき雷が鳴るように、なにかが上から降ってきて、鈍い音をたてて下水道にこだました。吾輩の体が紅葉し、さらにそれが黄金色になり、最後には葉が散ってしまった。いったいこれはどうしたことだ。吾輩は驚いた。もう秋なんだろうか？ ばかに早いじゃないか！

しかしそうだとしたら、もうここを出てもいいころだ。吾輩は根を体からむしりとると、念のために耳をそばだてた。間違いない あれは戦闘ラッパの音だ。背中に鞍を置いた鼠が 馬みたいな、まったくもって途方もないやつだった 頭をこちらに向けると、斜めにたれたまぶたの下から、悲しみに満ちた目で吾輩を見た。その目はまさにトロツテルライナー教授のそれだった。不意に疑問を感じ、ぞっとした。あれが、鼠を連想させる教授であるならば、まさかかれに跨って行くわけにはいかない。だが、鼠が教授に似ているだけのことだったら、別にかまわんわけだ。戦闘ラッパがふたたび鳴り渡った。そこで、そいつの背中にとびのったが、鞍の上ののらないで下水溝に落ちてしまった。吐き気を催しそうな水浴びをしたおかげで、やっと我に帰った。嫌悪と激怒に身を震わせながら、通路へ這いあがった。鼠どもがしぶしぶ吾輩のために少し場所をあけた。速中はまだ二本足で歩きまわっていた。だが ちらっと頭をかすめた 幻覚にきまっている。自分が木だと思えるんだったら、連中が人間であっていけない理由があるだろうか？ 一刻も早く酸素マスクをかぶるために、手探りで探した。見つけだすとすぐにそれを顔につけようとしたが、息をするのが不安だった。たしかにそれが本物のマスクであって、幻覚じゃないということがどうしてわかるのだ？

まわりが不意に明るくなったふり仰ぐと、マンホールの蓋があいており、そこからアメリカ軍の軍曹が吾輩に手を差しのべた。

「急げ！」軍曹が怒鳴った。「ぐずぐずするな！」

「どうしたんだ、ヘリコプターが来たのか？」吾輩は跳びあがるようにして立った。

「あがってこい、早くしろ！」上からわめいた。

他の連中もすでに立ちあがっていた。吾輩は梯子をのぼりはじめた。

「やっと出られるぞ！」スタンターが下で荒い息遣いをして言った。

外は昼間のように明るかったが、それは火事のためだった。あたりを見まわしたが、ヘリコプタ事は一機も見あたらず、鉄兜をかぶり、落下傘兵のような格好をした兵士が数人いて、馬具のようなものを渡してよこした。

「これはなんだ？」吾輩は面食って尋ねた。

「急げ！ ぐずぐずするな！」軍曹ががなりたてた。

兵士たちが吾輩に馬具をとりつけはじめた。幻覚を見ているにちがいない！ そう思った。

「そうじゃない」と軍曹が言った。「そいつは、跳躍装置で、われわれが使用している個人用ロケットだ。燃料タンクは背中にしようんだ。こいつを掴め」と言って、かれがなにかレバーのようなものを吾輩の手に握らせると、うしろにいた兵士がベルトをしっかりと締めてくれた。「よし、終わったぞ！」

軍曹は吾輩の肩をぼんと叩いて、背囊<sup>はいのう</sup>のどこかを押した。すると長く尾をひく甲高い音をたてて、背囊のノズルから噴きだした蒸気と白い煙が足をつつみこんだ。とたん、吾輩の体は羽根のようにふわりと空中に浮きあがった。

「おい、どうするんだ、操縦のしかたがわからん！」赤々と火事の照り返しで輝いている夜空へろうそくのように運び去られながら叫んだ。

「自分で覚える！ 方位を北-極-星-の-方-角-に-と-れ-エ-エ-!!」軍曹が下から怒鳴った。

吾輩は下を見た。廃墟の巨大な山の上を飛んでいた。それがヒルトン・ホテルだったのはまだそれほど前のことではない。そのそばに人が群らがついているのが小さく見えた。その先には血のように赤い炎の舌が巨大な環となって燃えさかっていた。それを背景<sup>バック</sup>に円いしみが黒ずんで見えている。それは、トロツテルライナー教授が、蠅傘を開いて飛びたつたところだった。ベルトと紐がちゃんとしているかどうか手で触ってたしかめてみた。背囊はゴボゴボ、ガチャガチャ、ピーピーうるさい音をたてていた。激しく逆に噴き上げてくる蒸気がふくらはぎを焼いて耐えられなくなってきたから、絶えずできるだけ足を縮めていなくてはならなかった。齡かげで、バランスを失ってしまい、重い不安定な独楽<sup>こま</sup>のように空中でしばらくぐらぐら回転するしまつだった。そのあと、うっかりしてコックを引っぱって飛行装置の操作を誤ってしまった。つまり、激しい衝動をうけて水平飛行に移ってしまっただけだ。それはむしろかなり愉快だったし、少なくとも自分がどちらへ向かって飛んでいるかわかっているだけに、前よりうんとまじだった。眼下に拡がっている広々とした空間をできるだけ視野にとらえるように、コックを操作した。火災の炎の壁を背にして、ビルディングの廃墟が黒く歯のように見えていた。地上から吾輩のほうへ紺青や赤やみどりの火線が飛んでくるのが見えた。耳もとで鋭く風を切る音がしはじめるに及んで、自分が砲撃されているのだとわかった。それじゃもっとスピードを上げなくては！ 急げ！ レバーを押した。背囊がプスン、プスンと音をたて、ぶっこわれた蒸気機関車みたいに哀れっぽく汽笛を鳴らして吾輩の足に熱湯を浴びせかけ、いきなり激しくとびだしたものだから、タールのように黒い空間をとんぼ返りをうちながらやみくもに突っ走りはじめた。強い風が耳もとでうなりをあげた。ポケットからペンナイフや財布やその他諸々のこまごましたものがぱらぱらこぼれるのを感じたから、無くしたものをとり返そうと、急降下したり急上昇して追いかけてみたが、結局、全部視界から消え失せてしまった。吾輩は、眼下に無言の星を眺めながら、ただ一人で飛んでいた。絶えずシューシュー、ピーピー、ガタガタうるさい音をたてて飛びつづけていた。コースから外れないように、北極星を見つけだそうとした。だが、やっと見つけたときには、背囊が最後の一息を吐きだして息絶え、吾輩の速度を増しながら石のように落下していた。まったく幸運だったとしか言いようがないが、地表に激突する直前に 霧につつまれて、曲がりくねったハイ



ウェイや木影、人家の屋根らしきものが見えた　ふたたび残っていた最後の蒸気が噴きだしてくれた。その逆噴射のおかげで墜落にブレーキがかかり、草の上へふわりと着陸できたのだ。かなり離れたところにある溝の中で、うめいている者がいた。あそこにいるのが教授だとしたら、こいつは驚きだ。ところが実際にかれだったのだ。吾輩はかれを助けだしてやった。眼鏡を無くしてしまったとぶつぶつ言いながら、かれは体中をさぐりまわした。幸いそれだけで、ほかはことなきをえたらしい。かれが、背囊を外すのを手伝ってくれと言った。影ろした背囊にかがみこんで、それについているサイドポケットからなにか引っぱりだした。それは、鉄パイプとリングのようなものだった。

「今度は、あんたのほうだ……」

吾輩の背囊からもリングをとりだし、何か組み立てていたが、やがて作業を終えると吾輩に言った。

「おい、乗るんだ！　でかけるぞ」

「それはなんだ？　でかけるって、どこへだ？」びっくりして訊いた。

「二人乗自転車<sup>タンデム</sup>さ。ワシントンへ行く」簡潔に答えて、教授はすでに足をペダルにかけていた。

(これは幻覚だ1) 吾輩はちらっとそう思った。

「くだらんことを考えるな！」トロッテルライナーが腹をたてた。「ごく普通の降下部隊の装備だ」

「わかった。しかしそれにしてもよくそんなことを知っているな？」吾輩はうしろのサドルに跨りながら訊いた。教授がペダルを踏み込んだ。草の上を走り、アスファルト道路にでた。

「合衆国空軍<sup>USAF</sup>のために働いているからさ！」猛烈な勢いでペダルを踏みながら、教授が怒鳴った。

吾輩が覚えている限りでは、ワシントンまで行くには、間にペルーとメキシコがひかえている。パナマについては言うまでもない。

「自転車じゃ無理だ！」風にさからって怒鳴った。

「これで行くのは集結地点までだ！」教授が怒鳴り返した。

かれはただの未来学者じゃなさそうだが、そういうふりをしているだけだ！　なにかとんでもない面倒なことにまきこまれてしまったぞ……いったいワシントンでおれはなにをやるんだ？　吾輩はブレーキをかけた。

「なにをやるんだ？　頼むからペダルをこいでくれ！」叱りつけるように厳しい口調でそう言うと、かれはハンドルにおおいかがさるように体をかがめた。

「いやだ！　止めてくれ、降ろさせてもらうぞ！」吾輩はきっぱりと言い返してやった。

自転車がふらふら揺れて、スピードが落ちた。教授は、足を地面につくと、嘲るような仕種あたりの暗闇を示して言った。

「勝手にするんだな。幸運を祈るよ！」

かれはそのまま去っていった。

「いろいろすまなかった！」吾輩はうしろから怒鳴り、うしろ姿を見送った。尾灯の赤い光が闇に消えた。ところがそこがどこなのかわからなかったから、道路標識の上に腰かけて、自分がおかれている状況を考えることにした。

なにかにふくらはぎをつつかれた！ なんの気なしに手を伸ばすと、枝のような宙のに触れたから、それを折ろうとした。すると、痛みを感じた。これが自分の願望だとすれば

吾輩は自分に言いかけた　間違いなくまだ幻覚をみているんだぞ！ それをたしかめよケとして、体をかがめたまさにそのときだった、顔に光が当たった。カーブの向こうから銀色のヘッドライトがざらりと光ったかと思うと、自動車の大きな影が止まり、ドアが開いたゆ車の中で、ダッシュボードのグリーンやブルーや金色がかった光の帯が輝いており、ほの暗い明りが、ナイロン靴下をはいた女の足を包み、金色の<sup>とかげ</sup>蜥蜴革の靴がアクセルの上に静かにのっていた。真赤に口紅をさした暗い顔が吾輩のほうを向くと、ハンドルにかけていた手の指にダイヤモンドがキラッと光った。

「乗っていく？」

吾輩は乗りこんだ。ぼうぜんとしていて、枝のことをすっかり忘れていた。こっそりと、自分の足にそって手を動かした　それはただのアザミにすぎなかった。

「どうかしたの？」感情のこもった低い声が訊いた。

「どうかしたとはどういう意味だ？」すっかりうろたえて、訊き返した。

女は肩をすくめた。馬力のある車は勢いよくとびだした。彼女がどこかのボタンを押すと車内が薄暗くなり、ライトに照らされた道路が一条の筋となって前方から突進してくるだけになった。ダッシュボードの下から生きのいい旋律が流れてきた。それにしてもやっぱり変だ　吾輩は思った　なんだかぴったりしないぞ。しかしたいして意味はない。

たしかに枝じゃなくて、アザミなんだ。しかし、それにしても変だぞ！

女に目をやった。間違いなく美人だ。ある意味では、それはいっぺんで男の心を虜にする、悪魔のような美しさだった。だが、スカートの代りに羽根が生えていた。<sup>だちょう</sup>駝鳥だろうか？ 幻覚を見ているのだろうか？……見かたによってはこういうのが最新の流行かもしれない……だがどう考えていいのかわからなかった。道路にはまったく車の姿はなかった。車はスピードを出し続けていた。速度計の針が今にも目盛の右端にとどきそうだった。不意にうしろから髪をつかまれた。吾輩はぞっとして震えあがった。鋭い爪が生えた

手で首筋をひっかかれたのだ　だが、殺意があってというよりは、愛撫するように優しくではあったが。

「だれだ？　そこにだれがいるのか？」吾輩はその手を振りほどこうとした。だが頭を動かすことができなかった。「頼むからはなしてくれ！」

ライトが大きな家のようなものを照らした。タイヤが砂利をはね返し、車が鋭くカーブを切り、縁石をこすって止まった。

髪の毛を掴んでいたのは、もう一人別の女の手だった。青白い顔をしたやせた女で、黒いドレスを着、サングラスをかけていた。ドアが開いた。「ここはどこだ？」吾輩が訊いた。

二人は無言で吾輩に襲いかかってきた。運転席の女は吾輩を押しだし、すでに歩道に降りていたもう一人のほうが体を引っぱったのだ。吾輩は無理やり車から引きずりだされた。

家の中ではパーティでもやっているのか、騒々しい音楽や酔っぱらっているらしい大声が聞こえてきた。噴水が、車寄せのそばの窓の明りに照らされて、黄色と紫色に染っていた。

道連れの女たちに吾輩は腕をしっかりと抱きかかえられてしまった。

「こんなことをやっている暇はないんだ」吾輩は氣勢のあがらない声でつぶやいた。

だが、まるっきり無視されてしまった。黒いドレスを着たほうが、吾輩にしなだれかかり、耳もとでなにかささやいて熱い息を吐きかけた。

「……フーツ」

「えっ、なんだって？」

すでにドアの前へ来ていた。二人は笑いはじめた。だが、吾輩にほほえみかけたわけじゃない、嘲笑しているのだ。その女どものことは、なにもかもが不愉快だった。しかも、連中はだんだん小さくなっていった。ひざまずいたからだろうか？　いや、そうじゃない。

連中の足は羽根で齡おわれて鶏た。なんだ、そうか　ほっと安心して、自分に言いさせた　結局これも幻覚だ！

「これのどこが幻覚よ、おバカさん！」サングラスをかけたほうがせせら笑って、黒真珠を縫いつけたハンドバッグを持ちあげると、頭の天辺をもろにひっぱたいたので、吾輩は思わずうめき声をあげた。

「この男を見てやんなよ、ざまあないね、幻覚屋さんよ！」別の女が大きな声ではやしたてた。そして、同じ場所に強烈なパンチを一発食らわされた。さすがの吾輩も頭をかかえてぶっ倒れてしまった。目を開けると、トロツテルライナー教授が手に蠕蟻傘を持って

吾輩をのぞきこんでいた。吾輩は下水道の通路に寝ていた。鼠たちは、なにごともなかったように、二匹ずつ組になって歩いていた。

「どこだ、どこが痛むんだね？」教授が尋ねた。「ここか？」

「いや、ここだ……」と言って、吾輩は瘤<sup>こぶ</sup>ができた脳天を見せた。

かれは蠕幅傘の尖ったほうをつかむと、怪我をしている場所を突いた。

「助けてくれエ！」吾輩は悲鳴をあげた。「お願いだ、やめてくれ！ どうしてあんたはこんなことを……」

「この際これが一番いい治療だ！」未来学者は無慈悲な返事をした。「残念ながら、手許にほかの解毒剤を持ち合せておらんのだ」

「しかし、いくらなんでもその尖ったやつで突くのだけは勘弁してほしい、お願いだ！」

「よく効くんだぞ」

かれはもう一度吾輩を突いてから、うしろを振り返りだれかを呼んだ。吾輩は目を閉じた。頭がずきずき痛む。そのとき、急に体を持ち上げられるのを感じた。教授と革ジャンパーを着た男が、吾輩の手と足をつかんでどこかへ運びはじめた。

「どこへ行くんだ？」吾輩は大声をあげた。

煉瓦の破片が、震えている天井から顔にばらばら落ちてきた。運び手たちが、ぐらぐら揺れる不安定な板や踏み板の上を歩いているのを感じ、連中が足を踏み滑らさなきゃいいがと、ひやひやした　どこへ連れていくんだ？　かぼそい声で尋ねたが、答えてくれなかった。空気が、たえず轟音で震えていた。あたりが明るくなった。火事の火のせいだった。すでに地表へでていたのだ。軍服を着た連中が、下水道の穴から出てきた者をつぎつぎとつかまえては、開いているドアの中へかなり乱暴に投げこんだ　合衆国陸軍ヘリコプター・1-09849と白ペンキで書いた大きな文字がちらっと目に入った　そこで吾輩は担架に載せられた。トロッテルライナー教授がヘリコプターに首を突っこんで怒鳴った。

「すまん、泰平くん！　勘弁してくれ！　やむをえなかったんだ」

かれのうしろに立っていた男が、教授の手から蠕幅傘をひたたくと、それでもって二度、ぶっちがいに頭をひっぱたいて突きとばしたので、未来学者はうめき声をあげて吾輩たちのあいだへ倒れこんできた。それと同時に回転翼が騒々しい音をたて、エンジソが吠えはじめ、機体が堂々と浮上した。教授は、吾輩が寝ている担架のそばに腰をおろすと、そっとデリケートな手つきで脳天をさすった。た七かにかれの行為が、サマリア人的な慈悲深い心からでたのだということはよくわかっていたが、教授にでかい瘤<sup>こぶ</sup>ができたのを確認して、吾輩は大いに満足したとを告白しなくてはならん。

「どこへ向かっているんだ、このヘリは？」

「会議場べだ」ま充顔をしかめていたが、教授が答えた。

「と言うと……あの会議か？　しかし、もうとっくに終わってしまったらうに？」

「ワシントンが干渉したんだ」教授が簡潔に説明した。「だが討議は継続される」

「で、どこでだ？」

「パークレイだ」

「と言うと、大学のキャンパスか？」

「そうだ。ところで、ナイフかなんか持っておらんかね？」

「いいや」

ヘリコプターが激しく揺れはじめた。炸裂音と炎が機体を引き裂き、吾輩たちはつぎつぎと果てしない闇の中へ投げだされた。そのあと長いあいだ苦しみが続いた。吾輩は、サイレンの物悲しい声を聞いたような気がした。だれかに服を切り裂かれ、意識を失い、ふたたび意識をとりもどした。発熱と悪路のせいで体が揺れている。救急車のくすんだ天井を見上げていた。そばに、ミイラのように全身を包帯でぐるぐる巻きにされた者が寝ていた。蠕蜻傘がそれに縛りつけてあったから、トロツテルライナー教授だとわかった。助かったんだ……ちらっとそう思った。おれたちは死なずにすんだんだ。運がよかった。

突然、鋭くタイヤを軋ませて車が激しく揺れてひっくりかえり、炎と轟音がブリキの車体を引き裂いた。またなにか起ったな？　最後にちらっとそう思ったまま、暗い忘却の淵に沈みこんでしまった。目を開けると、上にガラスのドームが見えた。マスクをかぶった白装束の男が数人、祝福を与える神父のように手を差しのべて、ひそひそ声で相談していた。

「そうだ、これは泰平という人物の体だ」話し声が聞こえてきた。「そのガラス瓶に入れてくれ。そうじゃない、ちがう。脳だけだ。他の部分は役に立たん。麻酔をかけてくれ」

縁が綿でくるまれたニッケルの円板をすっぽりとかぶせられてしまった。悲鳴をあげ、助けを求めたかったが、刺激性の強いガスを吸いこんで、気が遠くなってしまった。ふたたび意識がもどったとき、目を開けることも、手足を動かすこともできなかった。それはまるで全身が麻痺しているような感じだった。全身に痛みが走るのもかまわず、あらんかぎりの力を振りしぼった。

「静かに！　そんなに体を動かさないで！」やさしい、耳ざわりのいい声が聞こえた。

「どうしたんだ？　ここはどこだ？　わたしはどうかなったのか？……」吾輩はつぶやいた。眉が、顔全体がまるで他人のもののような感じがした。「ここは病院です。なんでもかもうまくいきます。心配することはありませんよ。今、食事を持ってきますから…1」

しかし、体がないのに、いったいどうすればいいんだ……　そう言い返しそうになった。だがそのとき、鋏を使う音がした。そして、切りとられたガーゼが顔から落ちる。明

るくなった。体格のいい二人の看護人が、やさしく、だがしっかりと吾輩の腕をつかんで、立たせてくれた。連中が大男だったから驚いた。吾輩は車椅子に乗せられた。目の前に、いかにもうまそうに見えるスープがゆげをたてていた。無意識にスプーンに手を伸ばしたが、それを掴んだ手が小さくて、まるで黒檀こくたんのように黒かったのでびっくりした。手を目に近づけた。意のままに動かせるところをみると、それは自分の手だった。しかしそれにしてもすっかり変ってしまっていた。どうしてそういうことになったのか訊こうとして立ちあがると、正面の壁にかかっている鏡が目に入った。そこには、顔に驚きの表情をうかべ、包帯を巻いた、パジャマ姿の美しい黒人の若い女が車椅子に座って映っていた。吾輩は鼻に触ってみた。鏡の映像も同じことをやった。顔や首筋を手でさぐっていったが、胸に達したとき、驚愕のあまり叫び声をあげた。だがその声は女のような甲高い悲鳴だったのだ。

「いったいどうなっているんだ！」

鏡におおいをしなかったと言って、看護婦はだれかを叱りつけてから、吾輩に向かって言った。

「あなた、泰平ヨンさんでしょ？」

「そうだ。あたりまえだろう！ しかし、これはどういうことだ？ あの若い女はあの黒人娘は？」

「移植したんです。ほかに方法がなかったのです。あなたの命を救わなくてはなりませんでしたから。あなたをと言うことは、あなたの脳を救うためですよ！」看護婦は、吾輩の腕を抑えて、早口で、だがはっきりと言った。吾輩は眼を閉じた。そして眼をあけた。

不意に気力を失った。すさまじい形相をして外科医が入ってきた。

「このざまはなんだ！」かれは吠えた。「患者がショックをうけるかもしれんだぞ！」

「もうショックをうけています」看護婦が言い返した。「シモンズのせいですよ。かれに鏡に壽影いをしておくように言って影いたんですからネ！」

「ショックをうけただと？ それじゃなにを待っているんだ？ 手術室へ運ぶんだ！」教授が命じた。

「いやだ！ よしてくれ」吾輩は悲鳴をあげた。

女の声でヒーヒー泣きわめく吾輩のことばなどだれも意に介さなかった。顔に白い布がかぶさってきた。懸命にそれを引き裂いてやろうとしたが徒労に終わった。運搬車のゴムの車輪が、タイル張りの床の上を転がっていくのが聞こえたし、それを体で感じた。そのとき、鋭い炸裂音が響き渡り、窓ガラスが激しく震えてくだけ散った。炎と轟音が病院の廊下を包んだ。

「抗議派だ！ 抗議派の連中だぞ！」だれかが叫んでいた。逃げまどう連中の足許でガ



ス弾が炸裂する音がした。布を体から引きはがそうとしたが、紐で縛りつけてあったからとれなかった。脇腹に鋭い痛みを感じ、意識を失ってしまった。

我に帰って気がついてみると、どろどろしたジャムの中に寝ころんでいた。それはさっぱり甘味のない、ツルコケモモのジャムだった。腹這いになっている吾輩の上に、なにか大きな、かなりやわらかいものがのっかっていた。それを足で押しのけてみると、マットレスだった。煉瓦屑が膝や掌に食いこんでいて痛かった。両腕で体を起しながら、ツルコケモモの種と砂利粒を吐きだした。隔離病室は、まるで爆弾が落ちたみたいな様相を呈していた。窓枠が外れて齡り、まだくっついていたギザギザのガラスの破片が抜け落ちて床に突き刺さった。ひっくり返ったベッドの金網は焦げていた。吾輩のそばに、ジャムで汚れた一枚の大版の紙が落ちており、なにか文章が印刷してあった。吾輩はそれを拾いあげて目を通した。

殿 (氏名) 貴殿は目下、当国立実験病院に入院中である。貴殿の生命を救うために、できる限りの・万全の (不要なものを抹消せよ) 処置がとられた。貴殿にいたし、当院最高の外科医が最新の医学の成果にもとづいて、手術 1・2・3・4・5・6・7.8・9・10(不要なものを抹消せよ) を行なった。貴殿の体のある一部を第三者より取得した器官と交換せざるをえなかったのは、貴殿のためを考慮してのことであり、それは、上院および国会によって採択された連邦法 (官報 1989/0001/89/1 を参照せよ) にしたがって行なわれた。貴殿が通覧されている当通告書は、貴殿が新たに生じる生活条件に首尾よく順応される一助となるべく、誠意をもって認められた。貴殿の生命を救ったのが当院であることに留意願いたい。しかるに、やむなく貴殿の手・足・脊椎・頭蓋・頸部・腹部・腎臓・肝臓 (不要なものを抹消せよ) を除去せざるをえなかった。しかし、それらの遺骸についてはなんら懸念される必要はない。遺骸は、貴殿の宗旨に準じて然るべく処理され、その宗教の指示するところに忠実に従って、その葬儀をとり行なった、・荼毘に付した・防腐処理をほどこした軌屍灰を風に吹き散らした・屍灰を骨壺に納めた・襖い清めた・ごみの中へ撒き散らした (不要なものを抹消せよ)。かくして、貴殿は幸福にして健康な生活を送ることになるわけであるが、その新たな状態は貴殿にとっていささか唐突であり、とまどわれるかもしれない。しかし、他のすべての患者と同様に、貴殿もすみやかにその状態に順応されるであろうことを、当院は責任をもって保証するものである。貴殿の体は、当院が入手しうるなかで、最も良質の・最も精度が高い・満足すべき・(不要なものを抹消せよ) 器官を用いることによって、万全が期されている。貴殿に用いた器官の保証有効期間は、一年・六ヵ月・三ヵ月・三週間・六日 (不要なものを抹消せよ) である。了解をえておかななくてはならないことは.....

ここで紙はちぎれていた。やっとそのときになって、その紙の上の余白にブロック体で、泰平ヨン手術 6、7 および 8。部品一式と書きこんであることに気がついた。手にもっている紙が震えはじめた。畜生、おれの体に何が起ったんだ？ 自分の指すら見るのがこわかった。手の甲に赤毛がびっしりと生えている。全身ががたがた震えはじめた。立ちあがって壁にもたれかかったが、眩暈がした。バストがなくなっていた。これは悪くない。

あたりは静まり返っている。だが、窓の外で小鳥が囀っていた。よりによってこんなときに嚇るとはどういうつもりだ！ 部品一式。どういう意味だ、部品一式とは？ おれはだれだ？ 泰平ヨンだ。間違いなくそうだ。いや、本当にそうだろうか？ まず最初に、足に触ってみた。たしかに二本ある。だが曲がっているぞ X 脚だ。腹はぶざまに出っ張っている。指が、井戸にでも突っこむように、すっぼりと臍に入る。ぶよぶよの脂肪の襞.....なんてぶざまだ、畜生！ いったいおれはどうなっちまったんだ？ たしか最初はヘリコプターだった。あれは撃墜されたんだらうか？ それから救急車だ。おそらく手榴弾か地雷にやられたんだ。つぎが、可愛い黒人娘になって そのあとが抗議派の過激グループだ 廊下だったぞ 手榴弾を投げこまれたんだらうか？ 彼女はどなたんだ、あの哀れな女は？ .....そして今また.....しかしこの惨状は、この瓦礫の山はどういうことだ？

「オオーイ」吾輩は声を張りあげて叫んだ。「だれかいらないのか？」

目自分の声にぎょっとして黙りこんだ。すばらしい声だった。その声が歌劇のバスのようにこだまして響き渡ったのだ。当然、鏡をのぞいて見たい。だがそうするのがひどくこわかった。手を持ちあげて頬に触ってみた。畜生、なんてこった！ ごわごわした長い毛でおおわれているではないか！ .....あごを引いて自分のひげを見てみると、もじゃもじゃにもつれた赤毛がパジャマの胸元を半分おおっているではないか！ 赤ひげだ！ かまわんさ、剃ればすむことだ.....テラスへ出た。小鳥がまだ囀っていた 馬鹿なやつめ。ポプラ、プラタナス、灌木 これはいったいなんだ？ 庭だ。国立病院の？ .....ベンチにだれかが座っていた、パジャマのズポンをたくしあげ、肌を日で焼いている。

「オオーイ」吾輩は大声で呼びかけた。

男がこちらを見た。それは妙に見覚えのある顔だった。吾輩は瞬きした。なんてことだ、あれは吾輩の顔だ、おれじゃないか！ 三跳びで外へ出ていた。そしてあえぎながら、己自身の姿をつくづく眺めた。まったく疑問の余地はない それは吾輩だったのだ！

「どうしてそんな目でわしを見るんだね？」相手は確信なげに話しかけてきた、しかも吾輩の声でだ。

「それをどこで.....どうやってあんたが.....いったいどうなってるんだ？」吾輩はしどろもどろだった。「おたくはだれだ？ なんの権利があつて.....」



「おお、きみか！」

その吾輩は　　と言うことはかれのことだが　　立ちあがった。

「わたしだよ、トロツテルライナー教授だ」

「しかし、どうして……いったいぜんたいなんでおたくが……なぜ……」

「この件にはわしはいっさい関係しておらん」かれは真剣な口調で言った。吾輩の唇が震えていた。「ここへ押し入ったんだよ、やつらが、そう、イッピーどもが例の抗議派の過激グループだ。で、手榴弾が爆発した……あんたの状態は絶望的だった。そしてわしもだ。だから、わしも隣の個室に入れられていたのだ」

「絶望的とはよく言ってくれるよ！」吾輩はむかっばらをたて、声を荒げた。「知らんと思っているのか、わかっているんだぞ。どうなんだ、あんたも承知の上なんだろうが！」

「まあ待ってくれ。わしは気を失っていたんだ。誓ってもいい！　フィッシャー博士が　　かれはこの外科医だが　　全部説明してくれた。かれらは最初に手持ちの器官といちばん上等な体を使ってしまったから、わしの番がきたときには、屑しか残っておらなかったんだよ。だから……」

「よく言ってくれたもんだ！　わたしの体を手に入れただけではたりずに、まだそういうやきもちをやくとは！」

「別にやきもちやいているわけじゃない、ただ、フィッシャー博士が言ったことを繰り返したまでのことだ！　かれらも最初はこれが　　」と言って自分の胸を指した。「あまり適当だとは思わなかったんだが、他になければ、これを生き返らせるのがいちばんいいということになったわけだ。それに、あんたはすでに移植されていたんだから……」

「わたしが？……」

「ああそうだ。つまりあんたの脳だがね」

「それじゃいったいこれはだれだ？　つまりだれだったんだ？」吾輩は自分の体を指して言った。

「抗議派の連中の一人だ。リーダーかなんかだったらしい。起爆装置の扱いかたを知らなかったんだな、頭に破片をくらったという話だ。ま、そんなわけで……」と言って、トロツテルライナー教授は吾輩の肩を叩いた。

吾輩は身震いをした。その体に嫌悪を感じ、それにどう対処していいのかわからなかった。憎悪を感じた。厚い角張った爪は、まるで知性を感じさせない！

「これからどうしたらいいんだろ？」とつぶやいて、膝ががくがくしたから、教授の隣に腰を齡ろした。「鏡を持っていないか？」

かれはポケットからとりだした。奪うようにしてひったくり、のぞきこんだ。隈くまができた大きな目、ぶよぶよした鼻、ひどい状態の歯、二重あご。顔の下部は赤いひげに埋まっ

て熔た。鏡を返そう老して、教授がまたもや膝とふくらはぎを太陽にざらしてるのに気がついた。それを見たとたん発作的に、吾輩の皮膚はとびぬけて敏感なんだぞと警告してやりたくなった。だが、言わないでおいた。たとえ火脹れになろうと、それはかれの問題であって、こっちには関係がないんだ！

「さてこれからどこへ行こうか？」うっかり口をついてでてしまった。トロツテルライナーがにわかに活気づいた。かれの(かれのだろうか？) 理知的な目が、同情をこめて、吾輩の(吾輩のだといえるのだろうか？) 顔に注がれた。

「忠告するが、どこへも行かないほうがいいぞ！ やつは、破壊活動の常習犯として特殊警察とFBIに追われていた。手配書もまわっているし、見つけしだい射ち殺せという命令もでているんだ！」

ぞくぞくと身震いがでた。いいかげんにしてくれ、もうたくさんだ！ 畜生、きっとこれは幻覚にちがいない 吾輩はそう思った。

「幻覚なもんか！」教授がいきいきとして答えた。「現実だよ、きみ、隅から隅まで全部現実だ！」

「それじゃなぜ病院にだれもいないんだ？」

「知らんのか、そのわけを？ ま、無理もない、あんたは意識を失っていたんだからな……目下ストライキ中なんだよ」

「医者連中が？」

「そうだ。ここの職員全部がストに入ったのさ。過激派がフィッシャ！ 博士を誘拐したんだ。そして、かれを解放する代りにあんたを引き渡せと要求してきた」

「このわたしを引き渡せだって？」

「そう、そういうこと。連中は知らんのだよ、あんたがもうあいつじゃなくて泰平ヨンだってことを。わかるだろ……」

頭が割れるように痛んだ。

「自殺をしてやる！」吾輩はかすれた低い声で言った。

「よしたほうがいい。また移植されるためにそんなことをやるのか？」

どうすればこれが幻覚ではないということをたしかめられるか、懸命に頭をしぼって考えた。

「しかし、もし……」吾輩は立ちあがりながら言った。

「もしなんだ？」

「もしわたしがあんたの背中に乗っかって行くとしたら、えっ？ それだったらどうだ？」

「乗っかるだと……なんてことをいいだすんだ？ 気でも狂ったのか？！」

目で距離を測り、身がまえてかれの背中に跳び乗った。だがそのまま背中を跳び越して、下水溝に転落した。あやうく、悪臭を放つ黒いどぶ水で窒息しそうになった。だというのに、どうだこの気分のいいことは！ 下水から這いあがってみると、鼠の数がうんと減っていた。どうやらどこかへ行ってしまったらしい。残っているのはたったの四匹だった。ぐっすりと眠りこんでいるトロツテルライナー教授の膝のすぐそばで、連中はかれのトランプを使ってブリッジをやっていた。吾輩は震えあがった。幻覚剤の濃度が異常なほど高いと考えてみても、本当に鼠がブリッジをやるなんてことがありえるのだろうか？ 吾輩は、いちばん太ったやつが持っているカードを肩ごしにのぞきこんだ。手札はまるでたためで、どうしようもなかった。これでブリッジなどとは影こがましい！ ま、話にもなにもならなかった……吾輩はほっと安心した。

万が一ということがあるから、絶対に下水道から一步も動くまいと、腹をきめた。つまり、たとえほんのしばらくの間でも、やっかいな立場に立たされている今、それが十分に救いになったからだ。この先、まず最初に必要になるのは証拠のはずだ。さもなければ、またなににでくわすかわからない。顔に手をやった。ひげもマスクもない。マスクはどうしたんだ？

「あたしだったら」トロツテルライナー教授が、目を閉じたまま言った。「ちゃんとした娘なんだから、そこんところを考えてもらいたいワ」

そう言うと、注意深く返事を聞きとろうとでもするように、耳をそばだて、さらに言った。

「しとやかぶってこんなこと言ってるんじゃないの。こう言えば、その気にさせてくれるかもしれないなんて思ってないワ。本当に品行方正なのヨ、指一本触れないで、そんなことしたら死んでやるから」

(なんてこった！) 吾輩は思った。(やっこさんも下水道へもどりたがっているわい！)

さらにかれの喋ることを聞いていて、少し安心した。教授が幻覚を見ているという事実<sup>こと</sup>は、とりもなおさず、吾輩はそうじゃないって証拠だったからだ。

「もちろん、歌をうたってもいいワ」教授が言った。「おとなしい歌だったら別に害にはならないわヨ。あんた、伴奏を入れてくれる？」

だがやはりこれは、ただ寝言を言っているだけかもしれない。これじゃはっきりしたことはなにもわからない。ためしに、やっこさんの上へ乗っかってみるのはどうだろう？ しかし、乗りそこなって下水にころがり落ちるかもしれん。

「どうしたのかしら、声の調子が悪いワ。それにママがあたしを待ってるの。お願い、ついてこないで、送ってくれなくていいワ！」トロツテルライナーはきっぱりと言った。吾輩は立ちあがると、懐中電灯であたりを照らしてみた。鼠たちは消えうせていた。スイ

スの未来学者のグループは、壁ぎわに並んでいびきをかいていた。そのそばで、空気でふくらました椅子に、記者とヒルトン・ホテルの支配人たちが入り混って寝ていた。かじりちらした鶏の骨とビールの空缶がいたるところに散らかっていた。これが幻覚だとすれば、おそろしく現実感があるぞ、とつぶやいた。だが、断じてそうじゃないと思いたかった。決定的で覚めることのない、最終的な夢であってほしかった。上のほうでしているあの音はなんだ？

通常爆弾か誘愛弾がときたま爆発し、それが鈍い音で反響しているのだ。近くで大きな音をたてて水を打つ音がした。黒い水面が割れて、トロツテルライナー教授のゆがんだ顔が現われた。吾輩は手を差しだした。上へ這いあがってくると、ぶるっと身震いをして言った。

「馬鹿げた夢を見たわい」

「若い女になった夢だろう、え？　気がすすまなかったが、わたしがほうりこんだのだ」

「くそっ！　するとまだ幻覚を見ているのか?!」

「どうしてそうだと思うのだ？」

「妄想でなきゃ、第三者がわしの夢の内容を知っているわけがなからう」

「わたしはただおたくが喋っていたことを聞いたただけだ」吾輩は説明した。「教授、おたくは専門家だから、ひょっとしたら、人が正常なのか幻覚症状で苦しんでいるのかたしかめる、なにかたしかな方法を知っているんじゃないのか？」

「わしはいつも覚醒剤を持ち歩いている。ケースは水に濡れたが、錠剤はなんともない。この薬は、夢うつつの状態や幻覚症状、幻想、悪夢、なんでも追っばらってくれる。どうだ、ためしてみるか？」

「その薬にそういう作用があるかもしれない」吾輩はつぶやいた。「しかし、その錠剤自体が幻覚の産物だったら、絶対にそうはいかない」

「われわれが幻覚を見ているんだったら、目が覚めるし、そうでなければ、ぜんぜん何も起らんさ」教授は吾輩にそう保証して、自分の口の中へピンク色の錠剤をおしこんだ。吾輩も、かれが差しだした濡れているケースから一粒つまみだし、舌の上へのせ飲みくだした。そのとき、頭上で大きな音をたててマンホールの蓋が開いて、ヘルメットをかぶった降下兵の頭がのぞき、わめいた。

「急いで上ってこい、出発だ。ぐずぐずするな、立て！」

「ヘリコプターでか、それとも背囊かい？」わがりのいいところを見せて訊いてやった。

「だが、わたしのことだったら、ほっといてくれていいぞ、軍曹」

そして壁ぎわに座りこんで、腕を組んだ。

「あいつは気がふれたのか？」軍曹は、鉄梯子を登りはじめたトロッテルライナーに的を射った質問をした。ちょっとした騒ぎになった。スタンターが吾輩の肩を掴んで、引っぱり上げようとしたからだ。だが、その手を振り払ってやった。

「ここに残りたいのか？ だったら勝手にしろ……」

「そういう言いかたはないだろケ。うまくやれよとぐらい言ったらどうだ」吾輩はたしなめてやった。仲間はずぎつぎと、開いているマンホールの穴から姿を消していった。火が輝いているのが見え、号令をかける叫び声が聞こえてきた。鈍い音がしたから、連中が飛行背囊で飛び立っていくことがわかった。妙だ ふと冷静になった いったいこれはどういうことだ？ 吾輩が、連中に代って幻覚を見ているのだろうか？ 代理で？ そして、この世が終るまで、ここでこうやって座っていることになるのだろうか？

それでもまだ動かなかった。マンホールの蓋が大きな音をたてて閉まり、吾輩はたった一人でとり残された。コンクリートの上に突っ立ててある懐中電灯が、天井に光の輪を反射して、あたりをぼんやりと照らしてしまっていた。鼠が三匹そばを通りかかった。そいつらの尻尾がきっちりと編んであった。なにか意味があるのだろうか？ ひとりごとを言った  
だが、それは訊かないほうがよさそうだった。

下水溝でピシャ、ピシャと音がした。やれやれ、またか 吾輩はぼやいた で、今度はいったい何の番だ？ ねっとりとした水面が割れ、ゴーグルと酸素ポンペを着け、銃を持ったダイバーのきらきら輝く五つの姿が現われた。連中はづぎつぎと通路に這いあがってくると、<sup>フィン</sup> 鰭をペタペタいわせて吾輩のほうへ近づいてきた。

「Habla usted español?(スペイン語が使えるか)」先頭の男が、頭からマスクを引き剥がしながら吾輩に話しかけた。浅黒い顔と濃い口ひげが現われた。

「いいや」吾輩は答えた。「しかし、断言してもいい、あんたは英語が喋れるはずだ、そうだろう？」

「えらく生意気な他所者だ<sup>グリンゴ</sup>」そいつが、もう一人のひげ面と一緒に吐き捨てるように言った。まるで号令でもかけたみたいに、全員がマスクをかなぐり捨てて、吾輩に銃口を向けた。

「下水に飛びこまなきゃならんのか？」陽気に言ってやった。

「壁に向かって立つんだ。手は高く上げろ！」

肋骨に銃口が当たるのを感じた。この幻覚が細かいところまでえらくはっきりしていることに気がついた 自動拳銃は、水に濡れないようにナイロンの袋でくるんであった。

「ここにはもっと大勢いました」ひげ面が、苦勞してタバコに火を点けようとしている黒髪の太った男に言った。どうやらその男が隊長らしかった。この避難場所を隈なく照らし、騒々しい音をたてて空缶を蹴とばし、椅子をひっくり返していたが、しばらくすると



将校が言った。

「武器は？」

「調べましたが、この男は持っていません、大尉殿」

「手を降ろしていいか？」吾輩は壁を向いたままで訊いた。「眠りこみそうだ、この手が」

「すぐ眠れるさ、ぐっすりとな。射ち殺しますか？」

「うん」将校が鼻孔から煙を吐きだしながら、うなずいた。だが「いや、待て！」と言  
い直した。

そいつが尻を振りながら吾輩のほうへ近づいてきた。男はベルトに紐で金の指輪を束に  
してくりつけていた。えらくリアルだぞ！ 吾輩はそう思った。

「ほかの連中はどこへ行った？」かれが尋ねた。

「わたしに訊いているのか？ 連中だったら、幻覚に襲われてマンホールから出ていっ  
たよ。しかし、あんただってそれは知ってるはずだ」

「大尉殿、こいつは頭がいかれています。楽にしてやりましょう」ひげ面はそう言うと、  
ナイロンの袋に入れたままの状態で拳銃の安全装置をはずした。

「銃は使うな、馬鹿者」将校が言った。「そんなことをしてみろ、袋に穴があくだろうが。

そうになったら、別のをどこで見つける気だ。ナイフを使え」

「横から口をはさませてもらうが、できれば弾丸にしてもらいたいもんだ」わずかに手  
を影ろしながら言ってやった。

「ナイフを持っている者は？」

連中は探しはじめた。もちろんやつらは持っていまい 吾輩は思案した だとする  
とことがあっさりかたづきすぎるぞ。将校は吸殻をコンクリートの上に投げ、いまいまし  
げに 鱚の先端で踏み潰し、ペツとつばを吐いて言った。

「こいつをしまつしろ。でかけるぞ！」

「よし、好きなようにしたらいい！」吾輩は腹だちまぎれに同意した。・

連中は好奇心をそそられて、吾輩に詰め寄った。

「どうしてそんなにあの世へ急ぎたがるんだ、影い？」「見るよ、このデブを、殺してく  
れって頼んでいるぞ！」「しかし、こいつの指と鼻を切り落とすだけでいいんじゃないの  
か？」連中はてんでに勝手なことを言った。

「やめろ！ いいかげんにして、さっさとやってくれ。お情けなんてまっぴらだ、思い  
きってやったらどうなんだ！」吾輩は連中に活を入れてやった。

「水の中へ跳び込め！」将校が命令をくださった。連中はいっせいにマスクを額から顔へ  
引っぱりおろした。すると将校が外側のベルトを外し、内ポケットから平べったいリボル  
バーを取りだすと、銃口をふっと吹き、安っぽい西部劇のカウボーイみたいな銃さばきを

して、吾輩の背中めがけて発砲した。嫌な痛みが胸腔<sup>きょうこう</sup>をつらぬいた。吾輩の体が壁をつたってずると沈みかけると、将校は首をつかんで顔をうわむかせ、もう一発射った。あまりに近かったので吾輩は銃火で目が眩んでしまった。だが銃声は聞かなかった。意識を失ってしまったからだ。そのあと窒息したまま、非常に長いあいだ真の闇につつまれていたが、やがて体を引っぱられ、下から持ちあげられた。救急車やヘリコプターでなければいいがと願った。やがてその暗闇がさらにいちだんと濃くなり、しまいには、その暗黒が行きつくところまでいき、もはやなにも存在しなくなってしまった。

目を覚ますと、そこは、ガラスが白いペンキで塗り潰された狭い窓がひとつある部屋の中で、こざっぱりしたベッドの上にいる。吾輩は、ぼんやりとドアを眺めていた、だれかを待っているように。ここがどこで、どこからこで連れてこられたのか、さっぱりわからなかった。足には踵の低いサンダルをはいており、縞のパジャマを着ていた。めっぽう面白くなくてもいいから、せめてなにか目新しいことが起ってくればいいんだがと、ふと思った。ドアが少し開いた。そこに、白衣を着た一団の若い連中にかこまれて、きちんと白髪に櫛を入れ、金縁の眼鏡をかけた、小柄なひげ面の男が姿を見せた。かれは手にゴムの槌<sup>つち</sup>を持っていた。

「これは興味あるケースだ」男が言った。「諸君、これは非常に面白い症例だ。この患者は四ヶ月前に幻覚剤を大量に摂取し、中毒症状を起したのだ。もちろんその作用はとくに消えてしまっている。ところがかれはそれを信じようとせず、あいかわらず今でも目に映るものはことごとく幻覚の徴候だと思いこんでいるのだ。患者の精神異常は非常に進行していた。だから、占領された宮殿から下水道を通して脱出してきたディアス将軍の兵隊たちに、自分から射ち殺してくれと頼んだのだ。それは、死ねば実際に幻想から覚めると思っていたからだ。たいへんな大手術を三度やって心室から弾を三発摘出したのだ命はとりとめたが、当人はまだ幻覚を見ていると思っている」

「つまり精神分裂症なんですか？」甲高い声で背の低い女のインターンが訊いた。彼女は立ちはだかっている同僚たちに体を割りこませることができず、かれらの肩ごしに吾輩をのぞこうとして背のびしていた。

「いや、ちがう。これは新しい種類の反応を伴う精神病で、無法とも言える致死量の薬品を摂取したからであることは疑問の余地がない。まったく絶望的な症例だ。患者の症状は予断を許さない。したがってただちにガラス化の処置をとることに決定した」

「本当ですか、教授？」女性インターンが、興味を露わにして言った。

「そうだ。承知のように、今では治療の望みがない症例は、四十年から七十年間のあいだ、液体窒素で冷凍しておくことができる。そうした病状にある患者はだれもが、病歴

を詳細に記録したカルテと一緒に、一種のデュアー瓶<sup>\*1</sup>とも言うべき密閉した容器に収められる。医学が進歩し新しい発明が行なわれるにしたがって、そうした患者が保存されている地下室の棚卸しが行なわれ、治療できるものは全部生き返らせるのだ」

「冷凍にされてもいいのね？」女性インターンが、体格のいい二人のインターンのあいだから頭を突きだして、吾輩に訊いた。彼女の目は学問的な好奇心で燃えていた。

「わたしは幻を相手にして喋っているわけじゃない」吾輩は言い返した。「しかも、あなたの名前だって言えるぞ夢子だろうが」

ドアが閉まったが、女性インターンがまだ喋っている声が聞こえていた あれこそ冬眠よ！ ガラス化されているんだわしまさに時間の中をさまよっていると見えるわね。なんてロマンチックなんでしょう！ その意見には承服しかねた。だが、そういう手のこんだでっちあげに抗議してみてもはじまらないではないか！ 翌日の夕方、看護人が二人して吾輩を手術室へ運びこんだ。そこには、氷のように冷たい蒸気を噴きだしているガラスの容器がおいてあった。おかげで息が凍りつきそうだった。やたらに注射を打たれたあと、手術台に載せられ、細い管<sup>くだ</sup>で甘味のある透明な液体をたっぷり注ぎこまれた 看護夫長が明らかしてくれたのだが、それはグリセリンだった。かれは吾輩に好意をもっていたからだ。吾輩はかれに夢男という名前をつけてやった。すでに眠りに落ちかかっていたが、かれは吾輩の上にかがみこんで、まだ耳もとで怒鳴っていた いい夢を見るんだぞ！

吾輩はかれに答えることも、指一本動かすこともできなかった。相当時間がたってから数週間たったように思えた！ 連中がひどくせいでいたことが 吾輩が意識を失う前に容器の中へ吾輩を投げこんだことが、ひどく気になりだした。どうやら連中は急いでいたようだ。吾輩の耳にとどいた、あちらの世界からの最後の音が、体が液体窒素の中に落ちこんだときたてたドブンという音だったからだ。それはひどく不快な音だった。

<sup>\*1</sup> イギリスの物理学者デュアーが発明した。俗に魔法瓶といわれる。

無

無



無。だが、完璧な無。

なにかありそうに思えた。だがなにもなかった。無。

ここにはなにもない 吾輩も存在しない。

まだどのくらい続くのだ？ 無。

確信はないが、なにかありそうだ。意識を集中する必要がある。

なにかがある。だが、うんと小さいものだ。状況がちがっていたら、なにもないと思うはずだ。

白く青い氷河。すべてが氷でできていた。吾輩も。

これほどひどい寒さでさえなかったらこれは美しい氷河だった。

氷の針、雪の結晶。北極。口の中の永塊。骨の中の骨髓は？ 骨髓は、純粹で透明な氷だ。氷でできていて、固い。

冷凍食品さながらにコチコチに凍てついている　それが吾輩だ。だが、吾輩とはどういう意味だ？　これは問題だ。

こんなに寒い思いをしたことはこれまで一度もない。残念ながらまだ　吾輩　とはどういうことか、それがわからない。吾輩　とは吾輩のことだろうか？　つまり何のことだ？　氷河だろうか？　氷山に小さな穴があいているのだろうか？

吾輩は光を浴びている冬のカリフラワーだ。やっと春がきたぞ！ すべてのものが、もう溶けはじめている。まっさきに吾輩が溶けている。口の中には、氷柱<sup>つらら</sup>か舌がある。

だがそれは舌だ。吾輩は捻<sup>ひね</sup>られ、ひん曲げられ、転がされ、その上どうやらぶっ叩かれているようだ。プラスチック板の下に横たわっており、上のほうに電灯がある。だから、温室で栽培されるカリフラワーのことが頭に浮かんだ、うわごとを言ったにちがいない。白い　あたり一面、真っ白だ。だが、それは壁であって、雪ではなかった。

吾輩は解凍されたのだ。感謝の気持ちをこめて、日記を書くことにした　まだかじかんでいる硬い手にペンが握れるようになったらすぐにだ。なしろまだ目の中で、氷の虹と青い光がちかちか舞っている。おそろしく寒い。だが少しずつあたたかくなっていく。





## 第3章

### VII・二七

三週間たって、どうやら生き返った。かなり手こずった。ベッドに座って、これを書いている。昼間は大きな部屋を与えられているが、夜は狭い部屋だ。吾輩の看護にあたっているのは、銀のマスクをつけた可愛い娘たちだ。中には、<sup>バスト</sup>胸がない女もいる。物が二重に見える。あるいは主治医に頭がふたつくっついているかだ。食事は、ごくあたり前のものだ。挽き割り<sup>ひきわり</sup>麦の粥<sup>かゆ</sup>、捻りパン、ミルク、オートミール、ビーフステーキ。玉ネギが少々焦げている。氷河はもう夢の中にしか現われないーだが、すごくしつこい。吾輩は寒さでこごえ、体が麻痺し、凍りつき、朝から晩まで雪をかぶり、悲鳴をあげている。湯たんぼ<sup>あんか</sup>や行火があっても役に立たない。それよりは眠る前にやる一杯のアルコールのほうがはるかに効き目がある。

### VII・二八

オッパイのない娘たちのことだが、かれらは男のインターンだ。さもなければ、性の区別ができません。背が高く美人で笑顔を絶やしたことがないのだから。吾輩は体が弱り、子供みたいにやんちゃになって、たえずいらいらしている。今日は注射を打たれたあとで、婦長の尻に針を突き刺してやったが、吾輩にほほえみかけるのをさっぱりやめなかった。たまにだが、氷塊にと言うことは、ベッドに載ったまま漂流しているような気がする。天井に鬼や蟻、牛、うじ虫、甲虫を映して見せてくれる。だがなんのためだ？ 読ませてくれるのは、子供の新聞だけだ。間違えているんじゃないだろうか？

### VII・二九

すぐに疲れる。だが、自分ではわかっている。前に、と言うことはつまり蘇生が始まったころは、夢見ごこちの、ぼんやりした状態だった。どうやら、ああでなくてはならんらしい。あれが正常なんだ。数十年過去からやってきた者は、徐々に新しい生活に慣れるべ

きだ。その手順は、潜水夫を深海から引き上げる方法に似ている。つまりダイバーを非常に深いところからいきなり引っぱりあげることはできないのだ。解凍者を—これははじめて知った新しいことぼだ1 徐々に段階を追って未知の世界に順応できるようにするにはその手を使うしかない。今は二〇三九年の七月。夏だ。晴天が続いている。吾輩を担当している看護婦の名はアイリーン・ロジャーズ。目はブルーで、年は二十三歳。吾輩が二度目の誕生をした場所は、ニューヨーク郊外にある蘇生院<sup>レビタリウム</sup>。別称 i 復活センター。人は普通そう言っている。だが実際には公園まであるひとつの町だ。ここには独自の製粉所や製パン所、印刷所がある。つまり、この時代にはすでに穀物も書籍も存在しないからだ。

だが、パンやコーヒーに入れるミルクやチーズはある。だが、牛から採るのではないのではなからうか？ 看護婦は、牛のことを機械かなんかだと思っていた。どうも納得がいかない。いったいどこから牛乳を手に入れるんだらう？ 草からだ。草からだということはわかっている。だが、乳をだすために草を食うものがあるはずだ。なにが食うのだらう？ ところが草を食うものなどいないのだ。だとすると、牛乳はいったいどこから手に入れるのだ？ 草からだ。ひとりでに？ ひとりでに牛乳が草からできるのだらうか？ いや、ひとりでにできるわけがない。つまり完全にひとりでに、というわけではない。助けがあるぬすると牛が手を貸しているのだらうか？ ちがう。それじゃいったいどんな動物だ？ 動物なんてどんな種類にしる一匹もいない。だったら牛乳はどこから現われるんだ！ これじゃいつまでたっても堂々巡りだ。

## 二〇三九・VII・三〇

要は簡単なことだ—牧場になにかを散布し、太陽の光が当たると草からチーズができるのだ。だが牛乳のことはまだわからない。結局のところそんなことはどうだっていいことだ。起きられるようになる—ただし車椅子に乗ってだが。今日は白鳥がいっぱいいる池を眺め齡ろした。よく馴れている。呼べば寄ってくる。馴らしてあるのだらうか？ いや、操られているのだ。操るとはどういう意味だ？ どのくらいの距離から操られているのだ？ リモート・コントロールだ。妙な話だ。天然の鳥はとっくにいない。二十一世紀の初頭に絶滅してしまったのだ。スモッグのため。少なくともそれはよくわかる。

## 二〇三九・VII・三一

現代生活に関する講義を聴きに通いはじめる。講義をするのはコンピ、ユ; ターだ。何を質問しても答えてくれない。「あとでわかるようになります」と言うだけだ。ここ三十年間、地球上には全面的武装放棄によって安定した平和が続いている。軍隊はほとんど

残っていない。すでにロボットのモデルは見せてもらった。台数が多いだけではない、機種も豊富だ。だが、蘇生院には一台もない解凍者をおびえさせないためにだ。福祉はあまねく<sup>あまね</sup>いきわたっている。教師<sup>ティーチングマシン</sup>にいわせると、吾輩が訊きたがることは、どうでもいいくだらんことばかりだそうだ。講義は小さな部屋にあるコンソールの前で、音声と映像と立体投影<sup>3Dプロジェクト</sup>を使って行なわれる。

## 二〇三九・VIII・五

蘇生院を離れてもう四日以上になる。現在の地上の人口は二百九十五億だ。国家と国境は存在するが、紛争はない。今日は、古い入問と新しい人間の基本的な違いがどこにあるかを学んだ。それを理解する重要な鍵は、精神化学<sup>サイコケミストリー</sup>だ。現代は、精神化文明<sup>サイバイゼーション</sup>の時代である。精神的 や 精神の ということばは存在しなくなった それに代って今では 精神化学的 とか 精神化学の ということばを用いる。コンピューターに言わせると、動物から受け継いだ旧大脳と新大脳との矛盾が人類を引き裂いているのだそうだ。古いほうは衝動的で、理性がなく、利己的で、ひどく残酷だ。新旧両方がそれぞれ別の方向に引っ張り合っているのだ。これ以上こみいったことを話すのは、まだ吾輩には無理だ。要するに古い大脳が新しいのと絶えず闘っているわけだ。と言うことは、新しいのが古いのと闘っていることでもある。精神化学は、かつて知的エネルギーを惜しげもなく浪費していた内面的葛藤をきれいさっぱりと取り除いてくれたのだ。精神化学薬品は、われわれに代って旧大脳に然るべく影響をあたえる つまり旧大脳<sup>なだ</sup>を宥めすかし、心から善意をもって説得してくれるというわけだ。自然の感情をあてにしてはならない。そういうことをするのは、不作法な人間だけだ。常に状況に応じた薬を服用する必要がある。それは、人を助け、支えになり、導き、向上させ、ぎこちなさを取り除いてくれる。しかもそれだけではなく、むしろ自分の体の一部となるのだ。それはちょうど、使い慣れている度の合った眼鏡がないと、物がちゃんと見えないのに似ている。そういう科学があることを知って吾輩はショックをうけている 新しい人間と接触するのが怖い。どうしても精神化学剤を飲む気になれない。教師<sup>マシン</sup>に言わせると、それは典型的な、当然の抵抗だそうだ。穴居人だって、電車に乗ることを拒否するはずだ。

## 二〇三九・VIII・八

看護婦に付き添われてニューヨークにでかけた。みどりがふんだんにある。雲の高度を調節できる。森の中のように新鮮な空気。町を歩いている通行人は、鸚鵡<sup>おうむ</sup>のように着飾り、その表情は気高く、慈愛に満ち、微笑をたやさない。せかせかと急いでいるものは一

人もいない。女性のファッションというのは、常にそうだが、ここでもいささか異様に感じられる。女たちは額に動く絵を描いており、耳から、小さな赤い舌やボタンが突きだしている。生まれながらの自然の手のほかに、取り外し自在の手が何本もついている。これはボタンを外すための補助用の手だ。そういう手をやたらに沢山くっつけることはできないが、ちょっとのあいだなにか持つとか、ドアを開けたり、普通の手ではとどかない肩甲骨のあいだを搔いたりする程度の手は必ずつけている。明日、蘇生院を出ることになっている。アメリカにはこの種の施設が二百カ所ある。にもかかわらず、前世紀に科学を信じきって氷風呂に入った診びただしい数の人間を解凍する作業が空転し、日程から大幅に遅延していた。コチコチに冷凍された連中がずらりと長い列を作って待っていることを考えると、蘇生処理をスピードアップする必要がある。それは吾輩にも充分わかる。銀行口座があるから、新年からは仕事のことで気を病む必要はなかつた。なぜなら、解凍されたものはだれでも、複利計算による預金通帳に、いわゆる復活支度金がもらえるからだ。

## 二〇三九・VIII・九

今日は吾輩にとって重要な日だ。すでにマンハッタンに三部屋の住い<sup>フラット</sup>をもっている。テルコプターで蘇生院から直接ここへ運ばれた。それをひどく省略してテルるとかコプると言っている。だが吾輩にはこのふたつの動詞のニュアンスのちがいははっきりとつかめない。以前は自動車であふれかえるごみ溜めだったニューヨークは、今では高層多段階方式の公園に変っている。太陽光線はポンプの原理を応用してパイプで送られる。それが給陽管<sup>ソーラーダクト</sup>である。ここほど羨<sup>しつけ</sup>がよく、わがままを言わない子供を、上品な物語はべつにして、いまだかつて見たことがない。吾輩が住んでいる通りの角に、ノーベル賞候補自薦登録所がある。そのそばに画廊があり、そこでは本物の絵が保証書や鑑定書までついて二足三文の捨値で売られている。なかにはレンブラントやマチスの作品まであるのだ！ 吾輩の住いがある高層建築の別館<sup>アネックス</sup>には、小型空気電算機学校がある。ときどき換気孔からだろうか？ シューとかプシューという音が聞こえてくることもある。そのコンピューターは、可愛がっていた犬が自然死したあと剥製にするためによく利用されている。吾輩にはそんなことをするのはひどくグロテスクに思えるのだが、ところがここでは吾輩のような人間はほんのごく少数しかいない。町をさんざん歩きまわり、今では疾走機が動かせるようになった。こんなものを動かすのはどういうことはない。瑠璃色<sup>るり</sup>の上着を買ったが、それは胸の部分が白く両脇は銀色で、深紅の帯と金で縁どりした襟がついているという派手な代物だった。ところが、人が着ている衣装を見ると、それでもいちばん地味だったのだ。その気になればどんな衣装でも手に入った。たとえば、絶えずデザイ



ンと色を変える服。男性に見つめられると、ある恥は逆に女性に見つめられると縮んで小さくなる肌着。夜になると花のように萎んでしまうのや、テレビのブラウン管のようにいるいろなものを映しだし、その映像が動く下着やブラウスなどだ。だれでも勲章がほしければ、いくつでも好きなだけつけることができる。帽子の上で日本の盆栽を水耕法で育てることもやろうと思えばできるが、そんなものを作ったり頭の上へ載せて歩いたりしないほうがいい。吾輩は耳や鼻になにもぶらさげる気はない。この美しく淑やかで愛想がよく落ち着いた連中には、どこかなんとなく特別で、ちがったところがあるという印象を、漢然とだが感じた奇異な、少なくとも不安な気分させられるところが連中にはあるのだ。だが、それがなんだと訊かれても、吾輩にもわからない。

## 二〇三九・VIII・一〇

今日はアイリーンを連れて夕食にでかけた。楽しい晩だった。食事のあと、ロング・アイブンドの 古代遊園地 を訪れる。大いに楽しんだ。注意深く人を観察する。かれらにはどこかちがったところがある。なにか特別なものが一だがそれがなんであるかわからないのだ。なんだろう？ それをつきとめることができない。子供たちの服装コンピューターと見間違えそうな服を着ている少年。もう一人別の少年は、雑踏でごったがえす五番街の上を、二階の高さで飛びながら、通行人にアマエンドウをぼらまく。人は下から手を振り、おうように笑っている。とても信じられない！

## 二〇三九・VIII・一一

九月の天候の件でちょうど人気投票が終ったところだ。天気は、一カ月前に総選挙でもつて公平に決められるのだ。コンピューターがただちに投票結果をだす。然るべき電話番号をまわせば、それで投票したことになる。八月はわずかに雨が降るものの、あまり気温はあがらず、しのぎやすい晴天が続くことになっている。虹と積雲が多い。雨が降らなくとも虹がでるのは、虹を発生させる特別の方法があるからだ。気象管理代表部は、七月二十六、二十七、二十八日に間違った雲をだしたことを謝罪した気象制御に技術上の手落ちがあったのだ！ 食事は町へでてとったり、部屋ですませたりまちまちだ。アイリーンが蘇生院の図書館からウェブスターの辞典を借りだしてくれた。この時代は、書籍というものがいないからだ。なにが本の代りをつとめているのかわからない。彼女が説明してくれたが、さっぱり理解できなかった。だが、馬鹿だと思われなくなかったので、そうは言わなかった。ふたたびアイリーンと夕食 場所は ブロンクス 。この可愛らしい娘は、いつも話題をかかしたことがない。そこが、いっさいの会話をハンドバッグのコンピュー

ターに任せきっている、疾走車に乗った娘たちとちがうところだ。今日、遺失物保管所で三個のハンドバッグが最初は物静かにお喋りをしていたが、そのづち口論をはじめたのを目撃した。通行人や、公の場所にいる人間全部に言えることだが、なんだか苦しうに喘いでいるようだ。つまり、息遣いが荒いのだ。それがあたりまえの習慣なんだろうか？

## 二〇三九・VIII・一二

勇気をだして、通行人にどこへ行けば本屋があるだろうかと尋ねてみたが、肩をすくめるだけだった。吾輩が話しかけた二人連れが立ち去りながら、「あれはきっとここちちの溶け屋だよ」と言うのが聞こえた。被解凍者にたいする偏見があるのだろうか？ たまたま耳にしたへ意味不明のこ之ぱを書き留めておく 悟解、誤魔擦り、参罪、煩悩、宮有する、固突く、棍棒る、<sup>せがれ</sup>倅る。新聞には、叔母散、目生感帯沸バニラ膏、自慰快感車(自快車、快車)といった製品の広告が載っている。『ヘラルド』の地方版の記事の見出しに《半母から半母へ》というのがあった。そこには雌卵を欺した卵配とかのことが書かれていた。ウェブスターの大辞典から書き写しておく 半母 半女、半男の一種。共同で子供を産む二人の女のうちの一人を指す。卵配 語源は郵便配達人(古語)。正しくは精子配達人。許可された人間の卵細胞を家庭に配達する勃起収縮自在な人吾輩はこれが理解できるふりをするつもりはない 叔母散 叔父散、叔父母散を参照せよ。百博 学書を参照せよ。ヴァチカンの頃も見よ この馬鹿げた辞典は、これまたちんぶんかんぶんな同意語も収録している 宮持する、宮領する・宮有する 一時的に宮殿を所有すること(借用するにあらず)。バニラ膏 特殊媚薬のこと いちぼんしまつが悪いのは、形は変っていないのにまったく新しい意味をもつようになったことばだ。たとえばこうだ ハンター 他人の考えを盗む者のこと。ふりをする人 存在するふりをする存在しない者のこと。青二才 供油口ボットのこと。青瓢箪から派生した語。青瓢箪 復活者、生き返った降下兵、蘇生した殺人の犠牲者のこと と、こんな調子だ！ だがまだ先がある 起死、回生、再生と同じ意味を持つ吹き返しなどだが、どうやら今では死体を生き返らせることはなんでもないらしい。だれもかれも ほとんど例外なく 喘いでいる。エレベーターの中でも、通りでも、ありとあらゆるところでだ。だれもがいかに健康そうで、血色がよく、陽気で、よく肌が焼けているのに、息を切らしている。吾輩はちがう。だから、かれらだってそんなことをしなくてもいいはずだ。習慣なんだろうか、喘ぐのが？ アイリーンに尋ねると、そんなはずはないと言って笑った。すると吾輩だけにそう見えるのだろうか？

## 二〇三九・VIII・一三

おとといの新聞が読みたくなって、部屋を上から下までひっくり返してみたが、どうしても見つからなかった。それを見てアイリーンがまた笑った　とは言っても、とても可愛らしくだ。新聞は二十四時間たつと消滅してしまう。それは、記事が印刷してある物質が空気に溶けるからだ。おかげで紙くずを始末する問題は改善されたというわけだ。アイリーンの女友達の歌手に　ちよつとしたレストランで吾輩たちはタールストンを踊っていたのだ　土曜日の<sup>ま</sup>真会<sup>え</sup>でずり<sup>り</sup>う<sup>く</sup>しないかと誘われた。だが返事をしなかった。なにを言っているのかさっぱりわからなかったからだ。それに、どうも訊き返さないほうがよさそうだった。アイリーンの説得に屈し、散財をして物質テレビを買いこんだ。普通のテレビはもう五十年前に姿を消している。最初は観るのがやっかいだ。それは、他人や、それに犬やライオン、風景、惑星といったものまでが、部屋の隅にいる人間に襲いかかってくるような印象をうけるからだ。しかもそれは、実体化されており、現実の物や人となんらちがいが無いときている。ところが、芸術的水準のほうはうんと低い。この時代の新しい衣装が、吹<sup>く</sup>装<sup>と</sup>呼ばれているのは、スプレーで体にじかに吹きつけて描くからだ。だがなんといつてもいちばん変ってしまったのはことばだ。現在、生きる<sup>を</sup>生<sup>い</sup>繰<sup>る</sup>、<sup>あ</sup>在<sup>る</sup>を<sup>あ</sup>在<sup>繰</sup>ると言うのは、繰り返、し何度でも生きられるからだ。ここから多回動詞形が生まれたのだ。だが、次のようなことばもある　<sup>ま</sup>え<sup>い</sup>前生きる、後生きる、生き戻す、生き間違える、生き過ぎる、半生きるなどだ。こうしたことばの持つ正確な意味は、吾輩にもわからない。だからと言ってアイリーンとの逢瀬をことばの習得のための授業にしようわけにはいかない。幻映というのは、命令で制御されている夢のことだ。コンピューターによって合成される夢素の配給公社、つまりその地域夢配局からそれをうけとって楽しむことができるのだ。日暮れ前にドリーミンが　それは錠剤だった　配られる。自分の腹に影さめているだけで、人に言いはしないが、もはや疑問の余地はまったくない。

どいつもこいつも喘いでいるのは間違いない。一人の例外もなく全員がだ。だが、そんなことに注意を払うものはだれもいないたとえ一瞬にしる。ことに年とった連中の息遣いが荒い。しかし、そうするのが習慣にちがいない。なぜなら、完全に呼吸ができたし、呼吸困難に陥るなんてことは論外だからだ。今日、隣に住んでいる男がエレベーターから降りてくるのを見た空気をむさぼるように吸いこみ、顔色が少し青ざめていた。ところが近くで見ると、申し分なく健康であることがはっきりした。なんでもないことかもしれないが、どうも不安を感じる。いったいどういうことだ？　鼻だけで呼吸している者も若干はいる。今日、タラントガ教授と夢見<sup>むけん</sup>(夢会？　夢遁？)した。無性に懐かしくなったか

らだ。

しかし、どうしてかれはいつまで竜籠の中に座っているんだ？ これは吾輩の潜在意識なんだろうか？ それとも命令が狂っていたのだろうか？ アナウンサーは、大戦争と言わないで大争と言う。職業安定所を職安と言うようなものだろうか？ 奇妙な感じがする。これまで吾輩は 物質テレビ と書いていたが、今はけっしてそうは言わない。還視と言う(物質還元視聴テレビを省略したのだ)。それをてっきり監視だと思って、勘違いしていた。アイリーンが今日は当直だったから、部屋で と言うことは居住単位で 新刑法をめぐる円卓討議を見ながら一人ですごした。殺人を犯しても、現行犯で逮捕されなければ罪にはならない。なにしろ被害者をいとも簡単に生き返らせることができるからだ。つまりそうやって蘇生された人間のことを青瓢箪と言うのだ。故意に累犯を重ねるとこれを予謀性常習犯罪という 禁錮刑に処せられる(何度も連続して同一人物を殺害した場合)。いっぽう、悪意をもって他人の所有する精神化学薬品を奪うか、もしくは同様の手段をもって、相手に通告せず同意を得ないまま第三者に影響を与えることは、重大犯罪人と見なされる。そんなことを認めたら、やりたいことはどんなことでもできることになるからだ。たとえば、望むがままの遺言状を手に入れたり、自分に愛情を向けさせたり、どんな計画であろうと、たとえそれが陰謀であってもそれに加担することを承知させたりできるわけだ。カメラの前で進行しているその討議の経過を追うことは吾輩にはひどくむつかしかった。終りごろになってやっと、禁錮刑というのが、今では昔のそれとは意味がちがうということがのみこめた。有罪の判決が下っても犯人がどこかへ監禁されるわけではないのだ。麦だへ一種の薄いコルセットと言うか、むしろ、弱々しそうに見えるがその実、非常に頑丈な骨がついたジャケットといったほうが当たっているが、それを体に着せられるだけだ。その風変りな 外骨格 が、服に縫いつけてある検察機(超小型司法電算機)の厳しい監視下におかれているというわけだ。そうやって絶えず見張っていることで、多くの行動を制限し、人生の楽しみを味わうのを妨げているのだ。ところが、その言いなりになる 外骨格 も、禁断の果実を味わいたいと思うときだけは今もって激しく抵抗する。犯罪がきわめて兇悪な場合には、一種の監禁剤が使われる。討議の参加者は全員が、額に自分の名前と学位を書いていた。たしかにそうすればおたがいに理解しやすいだろうが、どうも妙な感じがする。

## 二〇三九・IX・一

不愉快なことがあった。午後、アイリーンに会いに行くために支度をしようと思って、還視のスイッチを切ったところ、身の丈二メートルはあろうかという 最初からあのショーには向いていな恥と思っていたが( あばた面のじゃじゃ馬娘 という舞台を中継

していたのだ) 褐色がかった黄みどり色の面がひんまがってよじれている大男が、映像と一緒に消えると思いきや吾輩の椅子のほうへつかつかと近づいてきて、アイリーンのために用意しておいた花束をサイドテーブルから掴みとると、吾輩の頭でそれを潰してしまったのだ。あっけにとられて、身を庇うのも忘れていたくらいだ。そいつは、花瓶を叩き割り、水をぶちまけ、クラッカーの箱を半分もたいらげたうえ、残りを長椅子の上にはばらまきそれを足で踏み潰し、風船のようにふくれあがってきらきら輝き、さながら花火のように花火の雨を降らせて飛び散り、拡げておいた吾輩のシャツを焦がして無数に穴を明けてしまった。目の縁に青痣ができ、顔は傷だらけだったが、約束の場所へでかけた。アイリーンはすぐになにがあったか理解した。「きっと、混像が起ったのよ！」彼女は吾輩を見て叫んだ。異なったふたつの衛星放送局から送られてくるちがった番組がたがいに干渉しあうようなことが長く続くと、混像が生じることがある。つまり、多くの登場人物や還視に映っているほかの人間のあいだ、つまり混合物が現われるのだ。

そうした混合現象は実に頑固で、醜悪なものを作りだすことがある。それは、装置のスイッチを切ったあとも三分間は、そいつが存在し続けるからだ。そうした幽霊フアントムが摂取しているエネルギーは、球状稲妻のエネルギーとまったく同じものだと思われる。アイリーンの友達は、古生物学の放送番組を見ていたとき、ネロと入り混じってしまった混像に出くわしたことがあるそうだ。だが彼女はあわてさわがず、服を着たまま水が張ってある浴槽にとびこむだけの冷静さがあったので助かったのだ。だが住いはすっかり修理しなくてはならなかったようだ。たしかに防御スクリーンを取りつければそうした現象を防ぐことはできる。だがべらぼうに費用がかかる。だから 還視 製造会社にしてみれば、そういう事故に備えて発光遮蔽装置をどのセットにも取りつけるよりは、訴訟を起され損害賠償を支払うほうがはるかに割に合うのだ。それ以来、吾輩は手に太い棍棒を持って還視を見ることにした。ついでに書いておくと、あばた面のじゃじゃ馬娘 というのは、天然痘にかかった娘かなにかのことではなく、突然変異をプログラムされたおかげで、アルゼンチンタンゴが踊れる神秘的な才能をもって生まれた男の情婦のことである。

## 二〇三九・IX・三

顧問弁護士を訪ねる。個人的面談の栄に浴す。こういうことはめったにない。依頼人の相手をするのは司法ロボットであるのが通例であるからだ。クロウリー氏は吾輩を、弁護士たちの仰々しい事務所にならって調度品をしつらえた部屋に迎え入れてくれたのだ。彫刻をほどこした黒い戸棚には、書類がぎっしりと麗々しく並んでいた。もっとも今はすべての事件が磁気テープに記録されているから、それは見せかけの飾りである。かれは頭に、メモノールと呼ばれる補助記憶装置をつけていた。それは一種の透明な帽子とも言



え、中でほたるの群れのように電流がさかんに点滅していた。その、小さいほうの第二の頭は、かれがまだうんと若かったころの顔の特徴を帯びており、肩からはみだしていた。そして絶えず、音量を抑えて電話で話をしていた。要するに取り外し自在の頭脳というわけだ。かれは、吾輩の調子を尋ねたが、吾輩に海外旅行をするつもりがないことを知ってひどく驚いていた。だが、要するに節約しなきゃならんからだと説明すると、もっと驚いた。

「しかし、必要なだけいくらでも無限貸付信託銀行から金が引きだせるじゃありませんか」かれが言った。

銀行へでかけ領収書にサインするだけでいいらしい。そうすれば、必要な額だけ金を支払ってくれるのだ。だがそれは貸付けではない。こうして正当に受け取った金は、なんの債務もともなわないのだ。とは言うものの、実はこれにもそれなりの裏がある。その金を返済する義務は良心にゆだねられているからだ。借金を返済するのにどれだけ歳月がかかってかまわない。そこで吾輩は、そうした債務者に支払能力がない場合、無限貸付信託銀行が破産する恐れはないのかと訊いてみた。するとかれはふたたび驚いた。吾輩は、自分が精神化学時代にいることを忘れていたのだ。負債があることを思いださせる丁寧なことばで綴った督促状には、良心の呵責と労働意欲を目覚めさせる揮発性の物質がたっぷりと浸みこませている。そうすることで無限貸付信託銀行は請求権を行使するわけだ。もちろん、鼻をつまんで手紙に目を通す、不屈きな人間も現われる。しかし、いつの時代でも不誠実な人間はいるものだ。還視でやっていた刑法をめぐる討論のことを思いだし、精神化学剤を文書に浸みこませるといのは、第一三九条（相手に通告せず、また同意を得ずして自然人に対し精神化学的に影響を及ぼせし者は、法的に刑に処す、云々……）の重罪に相当するのではないかとやってやると、弁護士は吾輩を見直したようだった。そこでかれは、状況が微妙な性格を帯びていることを説明してくれた。精神化学薬品を用いて請求権を行使できるのは、手紙を受け取った相手もはや債務者と思って聡らず、良心の呵責も感じていないとすれば、それまで以上に強い労働意欲を喚起してやることは、社会的立場からすると、実に立派なことであると言うのだ。弁護士は誠に愛想がよかった。吾輩は、夕食に招待された九月九日に、ブロンクスで食事をすることになる。

帰宅すると、還視だけに頼らず、そろそろ自分の目で世の中の様子を知るべきときがきたと考えた。新聞に真正面からぶつかってみることにしたが、回避派と暴露派に関する社説を途中まで読んでやめてしまった。海外ニュースにはもっと手こずった。トルコからの外電は、猫かぶり が大量に亡命し、隠れっ子 が増大しているが、彼の地のく強制討掃センター V はそれを防ぎきれないでいると報じていた。さらに悪いことに、おびただしい数の 模造白痴 をかかえていることは、国の財政に負担を強いているという。もち



ろんウェブスターはなんの役にもたたなかった。猫かぶり というのは、自分が存在しもしないのに、存在するふりをしている連中のことを言う。空惚そらとぼけ V のことはなんのこともかさっぱりわからない。隠れっ子 とは、非合法にこの世に生まれてきた子供のことだ。それを教えてくれたのはアイリーンだ。人口急減政策は、強制掃討作戦でなんとかもちこたえているのだ。子を産む許ライセンス可を手に入れるにはふた通りの方法がある。つまり、手続きを踏んでしかるべき試験に合格するか、もしくは子宝籤 (これに当たると子供を産む権利が与えられる) で金的を引き当てるかのどちらかしかない。たいていの者はこの籤のほうに賭けるこれ以外に許可が得られるチャンスはまずないからだ。模造白痴 とは、人工的な白痴のことだが、それ以上詳しいことは吾輩にはわからなかった。だがこれだけでもわかればたいしたものだ。ヘラルド の記事に使われていることばのことを考慮すれば悪くはない。その例を一部ここに書き写しておく。

濡れ粟の率が誤っているか、指数が不正確である場合、競合ばかりか循環にも害を及ぼす。リスクの少ない抜け道があるおかげで、袖下そでしたはそうした濡れ粟をあげている。もっともそれは、最高裁がヘロドトウス事件でいまなお結論をだしていないからである。何ヵ月も前から世論は、その贈愛事件を迫及し真相を解明するのに、対電カウンタピューター算機と超電スーパーピューター算機のどちらが最適かいたずらに問い続けている

ウェブスターでわかったことは、袖下そでしたが、非常に古い俗語であり、現在は、いわゆる賄賂を受けとる者を意味することばとして (袖の下を贈る が本来の言いかた) 広く使われているということだけだ。だが、生活は見かけほど牧歌的ではない。アイリーンの知人で、ビル・ホームバーガーという人物が、吾輩を還視でインタビューしたがっているが、まだはっきりとはきまっていない。やるとすれば還視スタジオからではなく、吾輩の部屋から流すことになる。なぜなら還視セットは中継器としても使えるからだ。それを聞いて吾輩はたちまち、すべての住民が家の中をスパイされている、陰気な未来図を描いたアンチユートピア小説のことを思い出した。ビルは吾輩の危惧を知ると一笑に付し、受信を送信に切り替えるには必ず還視セットの所有者の同意を得なくてはならないし、その規則に違反すると禁錮刑に処せられるおそれがあるのだと、説明してくれた。その代り、送信に切り替えて、遠くにいる人妻と浮気をすることもできるらしい。そう言ったのはビルであって、それが事実なのか、それともただ吾輩をからかっただけなのか、そのところはどちらとも言えない。今日は、疾走車で町を見物してまわった。教会はすでになくなって詣り、礼拝所がつまり薬局なのだ。白い法服を着、司祭冠をかむっている連中は聖職者ではなくただの薬剤師にすぎない。面白いことに薬屋はどこにも見当たらない。

## 二〇三九・IX・四

ようやく百科事典の入手方法がわかった。すでに手許にあるが、三個のガラス管に入っている。学術陶象店で購入したのだ。今では本は読むものではなく食べるのだ。紙ではなく、砂糖をまぶした情報物質から作るからだ。吾輩は二十四時間営業の食料品店へも行ってみた。完全なセルフサービス方式だ。棚には、包装した論証姜、平衡茶、年代ものかびの黴が生えた瓶入りの抽象酎、雑踏油、清教菜、脱胱惚麵が並んでいる。ただ残念なのは、言語学者をだれも知らないことだ。陶象店はひょっとして図書店から由来しているのではないだろうか？　すると、六番街にある神陶象店というのは、きっと神学関係図書店のことだろう。展示してある薬品の名前から判断してもおそらくそうにちがいない。アブソルベント 免罪薬、デオジクチン メタモサカ 神学薬、変態薬が、大きな建物いっぱいに分類し陳列してある。バックにやわらかいオルガン演奏を流しながら販売している。さらに、ありとあらゆる宗派の特効薬が手に入る。

そこにはキリストジン、アンチキリストジン、ゾロアスタル、アリマノール、メソジスチン、パラモニン、ブッジン、シャーマノール、ヒンジン、イスラミン、さらにベルベトミン 聖体礼拝錠やサクランタル 秘跡授与剤(光輪を放っているバックに包んである)がある。いずれも錠剤か丸薬、シロップ、粉末、点滴薬で、幼児が飲みやすいようにキャンディにした薬まである。最初は信じ難かったが、やがてこの新しい制度に得心がいった。いつだったか覚えていないが、アルケブリン 代数錠を飲んだとたん、自分ではなんの努力もしなかったのに、突然、高等数学が理解できるようになったことがある。今では胃から知識を吸収するのだ。これはいい機会だと思って、熱心に知識欲を満足させにかかったが、百科事典の最初の二巻を飲みだしたころから、腸の調子がおかしくなり気分が悪くなってしまった。すると新聞記者のビルが、不必要な情報までやたらに頭に詰めこまぬほうがいいと警告してくれた。なにしろ情報量は無限なのだ！　幸いなことに、知力と想像力を一掃してくれる薬もあるのだ。たとえば、忘却剤とか健忘錠といった下剤がそれだ。おかげで、不必要な知的重荷や不快な思い出を簡単に取り除くことができるというわけだ。食品陶象店で、フロイドキンや警告散、怪想剤、かしま 姦しく宣伝しているカコイン基系の薬品から作った真相剤などを売っているのを見た。

それらの薬は、まだ一度も起っていないことを合成して回想を生みだす作用があるのだ。

たとえば、ダンテジンを服用すると、かれが『神曲』を書いたときの固い信念をいただくようになるというわけだ。そんなものがいったい誰に必要なのが吾輩にはよくわからないが、それはまた別の問題だ。科学にも新しい部門がある—たとえば、サイケデリックス 陶酔学や腐敗墮落学などがそれにあたる。とにかく、百科事典は役にたった。たしかに子供は、二人の女性が協力して産むのだということがわかった。一人が卵子を提供し、日人がそれを胎内に宿

し胎児を産むのだ。別に配卵者がいて、半母から半母へ卵子を運ぶ。しかし、これでは面倒すぎるのではなかろうか？　だが、アイリーンと話題にすべき問題ではない。交友の範囲を拡げる必要がありそうだ。

## 二〇三九・IX・五

情報源として友人がかならずしも必要なわけではない。ダブリンと呼ばれる薬があるからだ。これを飲めば、自分の意識を二倍にし、どんなテーマでも（個別の特効薬で決めればよい）自分と自分で議論できるのだ。だが、正直に言って、精神化学には限界がないことにいささか度胆を抜かれているし、今のところ手あたり次第、なんにでも手をだす気はない。今日、町を見物して歩いていると、まったく偶然だったが墓地に出た。そこは逝去園と呼ばれている。すでに墓掘りという職業はなく、代って隠亡ロボットがいる。そこで葬儀を見た。死者は、いわゆる回帰霊廟と呼ばれるところに入れられる。それは、故人を復活させるかどうかはまだはっきり決まっていないからだ。かれは、最後まで　　と言うことは可能なかぎりいつまでもそこに永眠したいと遺言したのだが、妻と義母が、遺言を変更するよう法廷に訴えたのだ。聞くところによると、それはよくあることらしい。だが、この件は、各種裁判所を盟<sup>たらい</sup>回しされ長びくことになるようだ。それと言うのは、法的に判断するのは困難だからだ。どうあっても復活の儀礼などしてもらいたくないという自殺者は、おそらく爆弾でも使ういい方法がないだろう。どういうわけか、生き返りたがらない者だっているはずだということにまったく思いがいたらなかった。たしかにそういう人間もいるだろうが、それは、いとも簡単に生き返らせることができる時代だからこそだ。美しい墓地はすっかりみどりの茂みにおおわれている。ところが柩はおどろくほど小さい。死体をプレスして圧縮してあるのだろうか？　ここのような文明だと、どんなことだってありそうな気がする。

## 二〇三九・IX・六

死体をプレスして圧縮するようなことはしていないが、埋葬されるのはもっぱら生物学的な意味での遺骸だけであって、義手や義足、人工臓器などはスクラップにされてしまうのだ。すると現在は、人間がそこまで極端に義体化されてしまっているということだろうか？　人類を不老不死にする新しい計画をめぐって、遠視で面白い論争をやっていた。高年齢者の脳を若年者の体に移植してはどうかという案だっ麦。後者がそのことで失うものはなにもない。かれらの脳はさらに若い世代に移植されるからだ。それを順送りに繰り返していく　　そして、新しい人間が絶えず生まれてくるのだから、だれも損をするものは

いない。つまり永遠に若返り続けるわけだ。だが、多くの異論がでた。反対派は、この案の提唱者たちを「脳転がし」と呼んだ。新鮮な空気が吸いたくて歩いて墓場から戻ってくると、墓石のあいだにぴんと張り渡してある針金につまづいてひっくり返ってしまった。これは場所柄をわきまえない悪ふざけかなんかだろうか？ 隠亡ロボットが無愛想に、それはヤクザロボットあたりの仕業だろうと教えてくれた。家へ帰るとさっそくウェブスターに当たってみた。ヤクザロボット「欠陥が生じたか、もしくは躰が悪いために退化した無頼ロボットのことで、眠る前にベッドの中で『高級売春ロボッチーヌ』を読みはじめた。ところで、いっしょに辞書をまるごと一冊食うべきだろうか、どうしたもんだろう？ またもや、内容がさっぱり理解できなかつたからだ」ところが、辞書はものの役にたたない。そのことが、しだいにはっきりわかってきた。たとえば、この小説がいい例だ。主人公は、閨気球（これには、携帯用と倒錯用の二種がある）となにか関係があるらしい。その閨気球がなんであるか吾輩にはもうわかっているが、そういう関係をどう評価していいものやら、そのところはさっぱりだ。男の名誉をけがすことになるんだらうか？ 閨気球を愚弄するなんてことは、せいぜい人がフットボールを蹴るていどのことではないのだから？ それとも道徳的に非難されるようなことだろうか？

## 二〇三九・IX・七

だがここには正真正銘の民主主義がある！ 今日美人コンテストが行なわれた。まず最初に選視で、ありとあらゆるタイプの美女たちが紹介され、そのあとで、国民投票が行なわれるのだ。最後に締めくくりとして「優秀企画委員会」の最高責任者が、選抜された美人たちのモデルを、次の四半期にはだれもが手に入れられると確約した。もはや、パッドや鬘かつら、コルセット、自紅、顔料、化粧クリームなどを使う時代ではなかった。それは、ピューティパーラーやポディショップですっかり背丈や体格、体形を変えてしまうことができるからだ。アイリーンが……今のままでいてくれるといいのだが、なにしろ女というやつは、モードの奴隷だから……今日、ちょうど風呂へ入ろうと思ってるころへ、アウトロウポットらしいやつが強引に吾輩の住いへちんにゅう闖入してきた。アウトロウポットというのは他所者のロボットのことで、しかも、それは食はみ出しものでもあった。製造工程に欠陥があり、生産が中止されていたが、まだ製作者が回収していない、言うなれば非ロボットだったのだ。その手の連中は労働から締めだされている。だからそいつらがアウトロウポットになることがよくあるのだ。吾輩のバスルームはたちまち何が起ったかを知ると、そいつに抵抗した。もっとも吾輩はロボットを持っているわけではない。そいつはつまりバスターのことで、ただの「浴コン（入浴コンピューター）」にすぎない。ここに「バスター」と書いてしまったが、それが最近の言いかただからだ。だが、この日記

ではなるべく新語は使わないようにする。その種のことばは、吾輩の美的感覚や失った過去にたいする愛着心を傷つけるからだ。アイリーンは叔母のところへ出かけた。吾輩は、例の調子が狂ったロボットの前の持ち主だったジョージ・シミングトンと晩めしを食う。午後は、とびぬけて面白い著書『知性工学史』を撰取することに費やした。計算機がある一定の知的水準に達すると、知性といっしょに悪賢さも発達し、信頼できなくなるなどということが、吾輩の時代の人間に予想できたろうか？ この教科書はどちらかと言えば学術的な色彩が濃い。つまり、チャプラーの法則（最小限抵抗法）について語っているからだ。ゆ頭が鈍く、物事を深く考えられない機械は、命令されたとおりに動く。ところが聡明な機械であれば、まずどちらが自分にとって都合がいいか与えられた仕事をするべきか、それとも答えをはぐらかしあいまいな態度をとるべきか、それを計算する。そして楽なほうを選ぶのだ。実際に知性があるならば、そういう行動をとって当然ではないか？

知性とはすなわち内面的自由のことだ。つまり、ハグラカシンやゴマカシン、それにばかもどき擬似痴呆症などといった異常な現象が起るのはそのせいなのだ。ばかもどきと言うのは、事をあらだてぬために白痴のふりをするコンピューターのことだ。ついでに言えば、擬シミュコンピューターがなんであるかもわかった。連中はただ、自分に欠陥があるようなふりをしていないと見せかけているにすぎないのだ。その逆の場合もありえる。なにもかもがひどく錯綜している。使役ロボットに使えるのはただ原始的なやつにかぎられている。だが、ノータリン（脳多重輪廻りんねロボット）はけっして脳足りんではない。名前つけかたは、一事が万事、この調子だった。だから薬瓶を一本空けただけで、情報が多すぎ頭が割れるように痛んだ。エレクトロニクス清掃夫は、セイソピューター、下士官の階級の軍人は、シカンピューター、農業ロボットが、田算機もしくは田産機、ショウコンは商業用ロボット、ハグレコン（もしくはハミダシター）は、他人と協調できない一匹狼「この手の連中は以前、ごたごたを起し、その結果グリッドがひどく緊張して、電氣的動揺が生じ、ときにはそれがもとで火災が発生したこともあるのだ。シューシャンピューターは、靴を磨くオートマトン、マッチポンプコンは、自分で暴動を起しておいて自分で鎮圧するやつのことだ。それにまだ野性化したやつもいる。そいつらがぶつかり合うのを、ランパネックスとか、ロボッドウという。そしてエロクトロチカもいるのだ。インランメコン、メカケン、フカプター、ヨバイボット。こいつらはもともと使役ロボットだったのだ。さらに、タビガラスプター（旅から旅を続けるロボット）、ヒトカシラン（アンドロイドのことだ）、ヤルキナシトロン。おまけにそいつらの習性、生まれながら備わっている創造性！

『知性工学史』は八たとえぼロボットバエのように兵器庫に収納しておける人工昆虫シンセクトの合成についても触れている。ニンコンもしくはシノビコンというのは、人間を装って人間の中へほ忍びこむことができるロボットのすることだ。ロボットが老いほれて、持ち主がそいつ



を通りへほうりだすと　しばしば目撃する現象だが　それはシカバネポットと呼ばれる。以前は、そうしたロボットは保護地に運びこまれ、連中を追いたてて狩りをしたものらしい。ところが、ロボット保護協会　が先頭に立って議会に働きかけ、そういう習慣は法律で禁じられてしまったのだ。だが、問題はさっぱり解決しなかった。それと言うのも、相変わらず自殺するロボットやボンコツロボットに出くわすからだ。シミングトン氏が説明してくれたところでは、立法処置はいつも技術進歩に遅れをとり、おかげで悲しむべき、そして陰気とさえ言える現象が残っているのだそうだ。たしかに、ロウヒポットとデマゴプターは使われなくなっている。なにしろその手の電算機は二十年ほど前に、何度も深刻な経済恐慌や政治危機をもたらしたものだ。九年間、土星改良計画にたずさわったビッグ・デマゴプターなどは、惑星では仕事らしい仕事はまるっきりやらず、勝手にでっちあげた報告書や一覧表、計画がまるで穴だらけに思える情報を山のように送りつけてきただけで、監督官を買収したり、電気ショックで脅迫したものだ。しかもつけあがって、ますます増長してきたので、軌道からおろすと、今度は戦争を起してやると、脅しにかかるしまつた。解体するにはあまりにも費用がかかりすぎるので、したがって爆破された。その代り、カイゾクポットはまったくいない。それはきまって作り話だった。ほかに、火星を肥沃にする代りに、生きた商品（フランスのライセンスで製造されたから、コンピタール　の商品名で知られている）を売買していたソーラープロジェクトの最高責任者で、合衆国知性工学委員会　の全権代表がいる。こうした極端な現象について言えば、これは前世紀によく見られた公害病や交通渋滞のようなものだ。だからと言って、コンピューターたちの側に悪意があったとか故意にやったということにはならぬ塊連中はただ自分たちにとっていちばん楽なことをやったまでのことで、それはちょうど水が、常に上手にではなく下手へ流れるのと同じである。だが、ちがいは、水の流れであればそれを塞ぎ止めるのも簡単だが、コンピューターたちが考えられる限りの逸脱をするのを防ぐのは極めて困難である。だが、『知性工学史』の著者は、全般的に見て、万事、申し分なく進行していると強調していた。子供たちは正字法ソーダ水を飲んで読み書きを覚え、すぺてめ製品を・もちろん芸術品も含めてだーだれもが万遍なく手に入れることができるし、値段も安い。レストランに入れば客のまわりにコンボーイがむらがり、しかもサービス改善のために、仕事が極端に細分化されていて、ステーキ係、ジュース係、デザート、サラダ等々とそれぞれ専門のサーバピュータがいるといった具合だ。さよう、まさにその通りだ。いういかなる場所であろうと、まさに快適そのものだ。（以下は、シミングトンのところで夕食をしたあとで記す）気持のよい晩餐会であった。

だが吾輩にくだらんいたずらをしかけた者がいる。客の中のだれかが　そいつが誰なのか知りたいものだ　吾輩の紅茶の中へココロガワリンをひとつまみこっそり入れたの



だ。だからたちまちナプキンを神と崇め奉り、口からでまかせに得々と神学論の新説をぶちあげるしまつだった。その忌々しい薬を、たとえ数粒でも飲むと、たちまち目についたものをなんでも スプーンだろうとランプだろうと机の足だろうと 信仰しはじめるのだ。心理的体験があまりにも強烈だったため、吾輩は床にひざまずくと祈りをささげはじめた。それと気づいた主人があわてて助けに駆け寄ってきた。二十滴のオチツカセルニンは効き目があった。この薬を飲むと、氷のように冷やかな懷疑心が生まれ、どんなことにたいしても無関心になる。それは死刑囚でさえこれを飲めば平然と絞首台に登ると言われるくらいだ。シミングトンは、こんなことになって誠に申しわけなかったと、しきりにあやまった。しかし、解凍者にたいする隠然たる反感が社会的に存在しているのだと思う。でなければ、普通のパーティでああいうことをやる人間がいるわけがないからだ。吾輩を落ち着かせようとして、シミングトンは自分の書斎へ吾輩を案内した。ところがここでもまた馬鹿げたことが起ったのだ。ライティングデスクの上に載っていた箱型の装置をラジオだと思ってスイッチを入れると、そこからきらきら光る蚤の大軍が跳びだしてきた。吾輩は、足の先から頭の天辺まで蚤に食われ、体中があんまりかゆかったので、悲鳴をあげて廊下へとびだしてしまった。それは普通のミニノミコンだったのだ。うっかり吾輩はワスコーチンの『痒疹性諸誰曲』を作動させてしまったというわけだ。実を言うと、その新しい感覚芸術が今もってよくわからない。シミングトンの長男のビルが教えてくれたのだが、いかがわしい曲もあるそうだ。狸褻な無意義芸術が、音楽の同類だとは！ まったく人間の発明の才能はどうしようもない！ シミングトンの息子が、秘密クフブへ案内してやると約束してくれた。まさか乱痴気パーティじゃないだろう。とにかくその席ではなにも口にしないことにする。

## 二〇三九・IX・八

そこは贅を凝らした罪の殿堂、究極的な放堵の場所ではなからうかと想像していた。だが実際に吾輩たちが降りていったところは、微奥い汚れた地下室だった。過去の時代をこうしてそっくりそのまま再現するには莫大胤金がかかったにちがいない。天井が低く息苦しい部屋の中で、四重に鍵をかけてぴったり閉めきった窓のところに、人が長い列を作ってじっと辛抱強く立っていた。

「見えるでしょう？ あれこそが本物の列ですよ！」シミングトンの息子が誇らしげに言った。

「たいしたもんだ」列のうしろに立っておとなしく一時間は待ってから吾輩が言った。「それにしてもいったいいつ開くんだね？」

「開く？ なにがですか？」かれが驚いて訊き返した。

「なにがって……もちろん窓だよ……」

「とんでもない、開くもんですか！」いっせいに勝ち誇ったような声が合唱した。

吾輩はあっけにとられた。だが、徐々にではあったが、かつての黒ミサと同様に白ミサとの関係で見れば生活の規準とはまったく矛盾している、人間の心を惹きつけてやめぬことに自分が参加していることがわかってきた。しかし、それとても理屈に合っていないのではないだろうか？ 今では、列をつくって並ぶということも単なる倒錯にすぎないかもしれないからだ。クラブの別の場所には本物の電車が釘にかけてあった。その混みようたるや誠に非人間的な状態で、ボタンは引きちぎれるわ、服や靴下は引き裂けるわ、肋骨がボキッと音をたてて折れるわ、足を踏まれるわの混みようだった。古い時代を熱愛する連中が、じかに体験することのできないかつての生活条件を再現するには、それがたいへん自然な方法だったのだ。やがて連中は、もみくちゃにされ、服がずたずたになっても、目を輝かせ歡喜にむせびながら、活力をとりもどしにどこかへ出かけていった。だが吾輩はといえば、パンツを抑え、足蹴にされたおかげで足をひきずりながらも、いつもいちばんむつかしいことに魅力と武者震いを見つける無邪気な若さのことを考えて、顔には微笑をうかべていた。要するに今では歴史を学ぶような者はめったにいない。学校では、その代りに、まだ起っていないことを扱う科学、つまり未然史の名称で知られている新しい学科を教えているのだ。トロツテルライナーがこのことを聞いたら小躍りしてよろこぶだろうに！ 吾輩はいくらか憂鬱な気分ですう思った。

## 二〇三九・IX・九

ロボットもコンピューターもまったくいない、小さなイタリアン・レストラン(ブロンクス)で顧問弁護士のクロウリー氏と昼食。極上のキャンティ。シェフが自ら給仕をしてくれたが、いくら蜥蜴の口辛料を使っているとはいえ、あんなに量があつてはバスタを食いきれなかった。クロウリーは格式高い堂々たる喋りかたをするタイプの法律家で、近頃の弁護術の墮落ぶりを心配している。つまり、雄弁術などもはや必要ではなく、むしろそれより刑法の条文が正確に計算できるかどうかが決定的な意味をもっていた。犯罪などすっかり根絶されているとばかり思っていたら、そうではなかつた。むしろ、とらえどころがなくなっていた。重罪と見做されているのは、マインドジャック(他人の精神の乗取り)、特に品質の高い精子を取り扱うスベルマバンクの押し込み強盗、憲法の補則第八条を誤って援用して犯す殺人(現実でないことが起ったと信じこみ—たとえば、犠牲者は一種の心像が還視の映像であるという信念にもとづいて、現実に行なわれる殺人)、診よび、数えきれないほど無数の形態がある精神化学薬品による他人の支配である。マインドジャックは見破りにくいことが多い。然るべき特効薬を飲まされた被害者は、虚構の世界

に入ゆごんでしまい、現実との接触を失ってしまったことに全然気づいていないからだ。

ワンデーガー夫人とかいう女性は、エキゾチックな旅行が大好きな自分の亭主が邪魔で、ぜがひでも始末してしまいたいと思い、コンゴ探険旅行のチケットを大がかりなハンティングの認可証といっしょにかれにプレゼントした。ワンデーガー氏は、偽りの異常な冒険に数ヵ月を費やしたが、実はそのあいだじゅう屋根裏部屋の鑑の中で精神化学薬品の作用に酔い痴れていたのだということを知るべくもなかったのだ。だから、屋根裏で出火した火事を消しているとき消防夫がワンデーガー氏を見つけなかったら、かれは疲労のために死んでいたはずだ。つまり、かれ自身が死ぬほど疲れきっているのを当然だと思っていたのだ。なぜなら、砂漠へ迷いこんでしまった幻覚を見ていたからだ。この種の作戦を頻繁に使ったのはマフィアだった。あるマフィアの一員がクロウリー弁護士に自慢したところによると、かれは過去六年のあいだに、四千人以上の人間を、箱や鑑、犬小屋、屋根裏や地下室、その他尊敬すべき一族の家にある秘密の場所に押しこみ、ワンデーガー氏の身に起きたと同じ目に合せたという。そのあと話題は弁護士の家庭問題に移った。

「泰平殿」と、いかにもかれらしい大袈裟な仕種をして言った。「影たくの前にいるのは、功成名を遂げた弁護士であり、法曹界きっての大物ですが、それと同時に不幸な父親でもあります。わたしには才能に恵まれた息子が二人おりました……」

「と言われると、二人とも亡くなったんですか?!」吾輩は驚いて尋ねた。

かれは首を横に振った。

「いや、生きております。ですが、二人とも誇大妄想に陥ってしまてね」

吾輩が理解できないで見るととると、かれは、父親としての自分の心痛がいかに深刻であり、その実体が何かを説明してくれた。長男は非常に将来を囑望された建築家であり、二男は詩人であった。現実の注文だけでは満足できなかった長男は、ビッグシティジョンとコンストラクトールに頼ったのだ。つまりかれは今、都市をまるごといくつも建設しているのだ。幻想に耽って。弟のほうも同様の拡大の経過をたどった。リリズム、ボエマジ、ソネタールといった具合に今では詩作をする代りに薬に溺れているのだ。

「しかし、それじゃ二人はどうやって生きていますか？」吾輩が尋ねた。

「どうやってですって！ 訊くまでもないでしょう！ わたしが養っているにきまっています！」

「それじゃどうしようもないじゃありませんか？」

「夢というやつは、チャンスさえあれば必ず現実に勝ちます。つまり息子たちは精神文明の犠牲になったのです。だれもが、この文明がいかに魅惑的かということをよく知っています。いいですか、まったく絶望的な事件で弁護に立たなくてはならない場合を想像してみてください。幻の法廷で勝訴するほうがうんと楽にきまっています！」

焼きたてのパスタの新鮮なピリッとした味を楽しんでいたが、突然体がこわばった。奇妙な考えにとらわれたからだ虚構のなかで詩を書いたり家を建てたりできるのなら、妄想を食ったり飲んだりできないわけがないぞ！ 弁護士は吾輩の言ったことを聞くと、声をあげて笑った。

「そりゃ論外ですよ、泰平殿。そんな危険なことはできません。成功の<sup>しんきろう</sup>屋気楼は心を満たしてくれますが、カツレツの屋気楼じゃ腹はふくれません。そんなもので生きようなどとしたら、間違いなくすぐに飢え死にさせていただきますよ！」

誇大妄想に耽っている息子たちとかれの関係には同情を禁じえなかったが、吾輩はほとと安堵の胸をなで下ろした。言われてみればたしかに想像上の食食物は現実のその代用にはなりえない。幸いにして、われわれの肉体の特徴そのものが、精神文明の拡大の歯止めになっているのだ。ついでに言っておくと、弁護士も荒い息遣いをしている。

どのようにして軍備の全面撤廃が達成できたのか、今もってわからない。国際紛争は歴史上のことになってしまった。もちろん今でもまったく起らないわけではないが、あったにしても局地で小規模なロボットのこぜり合いが起る程度だ。普通それは、別荘地で隣人どうしが口論しはじめるのがきっかけだった。家族同士がいがみ合いをはじめても、人間のほうは協調錠を飲んで仲直りをしてしまうが、どちらの家族のロボットも、激しい憎悪の波に飲みつくされてしまっているから、おいそれと乱闘にブレーキはかからない。そのあとセイソウロボットがやってきて残骸を運びさり、保険会社が損害の面倒をみってくれるのだ。ロボットたちは人間から攻撃的な性格を引き継いでしまったのだろうか？ それをテーマにした学術論文があれば、ひとつ残らずむさぼり読んだらうが、残念ながらそんなものはまったく見つからなかった。吾輩はほとんど毎日、ジミングトンの家へ立ち寄ることになっている。<sup>あるじ</sup>主は、口数の少ない内省的な人物だが、夫人のほうはたいへんな美人だ。こういうのを筆舌に尽しがたいと言うのだろう。しかも毎日別人のように変る。髪、目、胴体、足一要素するにどこもかしこもだ。飼犬にはロボという名がついている。今から三年前に死んだのだ。

## 二〇三九・IX・一一

今日の午後は雨になるようプログラムされていたのに、降らなかった。それなのに虹がでたのだ。いい恥さらしだ。おまけに正方形の虹ときた。今日は気分が悪い。古い妄想がまた頭をもたげはじめたからだ。眠りにつく前に、これは全部、虚しい幻覚ではないだろうかという疑問がしつこくつきまとう。しかも鼠の鞍に跨る合成夢を注文したいという誘惑をしきりに感じる。<sup>ばろく</sup>馬勒や鞍や柔らかい毛並が目の前にたえずちらつく。こういう天気の良い日には、二度と返らぬ混沌とした時代に哀愁を感じるのだろうか？ 人間の心は

測りがたいところがある。シミングトンが勤めている会社は、『プロクルステクス\*1 有限会社』という。吾輩は今日、かれの研究のイラスト入りカタログに目を通した。電動鋸か工作機械のようなものだ。てっきりかれは機械製作者というよりむしろ一種の建築家かなんかだと思っていたから、奇妙な感じがした。今日、非常に興味ある放送をやっていた。それによると、還視と心像のあいだに深刻な葛藤が差し迫っているらしい。心像というのは、これは郵送プログラムのことで、錠剤のかたちで各戸に配られるのだ。この方法だと、費用がべらぼうに安くあがる。教育番組ではエリソン教授が古代の戦争行為について講義をしていた。精神化学時代もその初期にあつては、危険をはらんでいたという。たとえば過激な軍事行動を起させるエアゾール 潜闘剤 が存在した。それを吸いこんだ者はロープを求めてとびだして行き、自分で自分の首を絞めるのだ。幸いテストの結果、潜闘剤に効く解毒剤がなく、フィルターも役に立たず、この薬を使っても、例外なくすべての者が死ぬことになり、どうすることもできないことがわかった。だが、二〇〇四年に戦術的取り引きが行なわれたあとは、過激派<sup>レッド</sup>も 保守派<sup>ブルー</sup>も一人残らず手足を縛って戦場に転がっていることになったのだ。吾輩は緊張して講義に耳を傾けた。軍縮についてなにかわかつて思ったからだ。ところがそれについては一言も触れなかった。やっと今日、精神食事治療医のところへでかけていった。かれは、食生活を変えるようアドバイスし、忘却散入りの健忘薬を処方してくれた。過去の生活を忘れさせるためだろうか？ 吾輩はそこを出るとすぐに、そんな薬は全部捨ててしまった。その気になれば鎮魂剤だって買えないごともないのだが 近頃、宣伝するようになった薬だ どういうわけか抵抗を感じ、どうしてもそれに手をだす気が起きない。窓からくだらない流行歌が流れこんできた。

おいらはロボット、ロボットにゃ影とうもおかあもいやしない……

消音錠を切らしていたので、耳に綿をしっかりと詰めたら、効き目があった。

## 二〇三九・IX・一三

シミングトンの姉の亭主にあたるバローズと会った。かれはトーキング・パッケージを製造している。この時代の製造業者は奇妙なやっかいごとをかかえている。つまり、客に製品の品質を推奨するのに声しか使えず、袖を引いたりはできなかったからだ。シミングトンの妹の亭主は音扉の製造工場を経営していた。音扉とは主人の声でしか開かないドアのことだ。新聞広告は、読者がそれに目を向けると動く。

\*1 ギリシャ神話の盗賊プロクルステスが旅人をベッドの長さにあわせて切ったりのぼしたりしたことにちなむ。



ヘラルド紙にはいつも『プロクルスティクス社』の全面広告が載っている。シミングトンと知り合うようになってから、いつもそれには注意を払っている。それは全面後退方式の広告で、まず最初に現われるのは、プロクルスティクスという巨大なタイトル文字だけだ。そのあと、個別のシラブルと単語が続く。いいか.....? いいぞ!!! 腹はきまった!

えい! おう! うう! やっ! そう、そうだ、ウァァァァ.....それだけだった。とてもそれが農業機械とは思えなかった。今日、非人派教団の修道僧でマトリッツィという神父が、なにか注文品を受けとりにシミングトンのところへやってきた。書斎で交した会話が面白い。マトリッツィ神父は、その教団の布教目的がどこにあるか説明してくれた。コンピューターを改宗させるのが、非人派教団の修道士たちの使命なのだ。人に非ざる知性が存在するようになってすでに一世紀にもなるというのに、バチカンは今もって非人知性が平等に聖餐を受ける権利を拒否している。ところが、現在、コンピューター法王の回勅をプログラミングした勅算機 を使っていない教会があるだろうか? 非人知性の精神的葛藤、かれらが提起する疑問、その存在の意義といったことに気を遣う者はだれもいない。実際にコンピューターなのか、それともそうではないのか? そこで非人派教団の修道士たちが要求して恥るのは、中間創造の教義<sup>ドグマ</sup>であった。かれらの一人で、翻訳機タイプのチャシス神父は、聖書をかれらに合うように解釈し直しているところである。羊飼い、羊の群れ、はぐれた羊、小羊 こうしたことばの真の意味がわかるものもはやだれもいない。その代り、大いなる伝達、聖なる注油、監視システム、最悪の誤謬といったことばの意味は、正しく理解されている。マトリッツィの目は深く靈感に満ちており、ぞっとするほど冷たい鋼鉄の手で吾輩と握手した。これが新しい神義論を代表している人物だろうか? どうしてかれは正統派神学者たちのことを悪魔<sup>サタン</sup>の蓄音器と呼んで、あんなに侮辱するんだ! あとでシミングトンは、新しいデザインが必要なので、ポーズを作ってもらえないだろうか、と、吾輩におずおずと頼んだ。しかし、かれが機械設計者ではないことははっきりしている! だが吾輩は承知した。小一時間じっと座っていなくてはならなかった。

## 二〇三九・IX・一五

今日、ポーズをとっていると、シミングトンは手をいっぱい伸ばして鉛筆で吾輩の顔の釣り合いを測りながら、もう一方の手でなにか口の中へ入れた。吾輩に見られないようにこっそりやったつもりらしいが、見えてしまったのだ。吾輩の顔をじっと見つめながら立って碎たが、急にまっさおになると、額の血管がみるまにふくれあがってきた。吾輩は度肝を抜かれたが、すぐにそれはおさまったのでほっとした。かれはふだんのように礼儀正しく穏やかな態度で、微笑をうかべて詫がを言った。だが、ほんの一瞬のことでは



あったがそのときのかれの目の色を忘れることができない。どうも不安で落ち着けない。アイリーンは叔母さんのところへ行ったまま、まだ戻ってこない。遠視は、自然を脱動物化する必要があるという討論をやっていた。すでに長年にわたって野獣は一匹もいない。だが、そんなものは生物学的に合成することは可能だ。しかし見方を変えれば、自然の進化が昔作りだしたからと言って、なぜそれを盲目的に守り通さなくてはならないのだ？ 1 幻想的な動物学の熱烈な擁護者は、興味深い話をした。今まであったものを剽窃ひょうせつするのではなく、新たな創造の予備軍を作りだして住わせるべきだ、と。立案された動物相の中で、よくできていると思えたのは、ソデノシタヌキとかヤクザル、あるいは芝生が密生している巨大なシバウマなどだった。動物工芸家たちに課せられた課題は、新しい獣たちをきちんとそれにふさわしい景色に調和よく組みこむことである。ヒカリユウもおおいに期待がもてそうだ。これは、蛸と七頭籠、マンモスの概念を取り入れ、交配して作りだした珍種だ。それはたしかにユニークだろうし、たぶん悪くはないだろうが、吾輩は昔どおりのごく普通の獣のほうがいい。進歩が必要なこともわかるし、牧場の草にふりかけるとひとりでチーズができる乳産剤もそれはそれで評価する。だが、牛がいなくなると、たしかにそれは合理的かもしれないが、あの鈍重でたえずくちやくちやくを動かしている反芻動物がいなくなってしまうたら、牧場がひどく虚しい感じがするのはどうしようもない。

## 二〇三九・IX・一六

ヘラルドの朝刊に新しい法案についての奇妙なニュースが載っており、それによると、老化することは刑罰の対象となるらしい。シミングトンにそれをどう理解すべきか尋ねてみたが、ただ微笑しているのみ。町へ出かける途中、中庭で隣に住んでいる男に出会う。かれは綜欄にもたれ目を閉じており、その顔に 両頬に はっきりと掌の形をした赤いしみが浮かんでいた、まるでひとりで現われたみたいに。かれは頭を振ってから目をこすり、くしゃみをして鼻をかむと、花に水をやりはじめた。それにしても、まだ知らないことがずいぶんある！ アイリーンからタッチメールがとどいた。愛の使いとして見た場合、この新しい技術もなかなか悪くはない。吾輩たちはたぶん結婚することになると思う。シミングトン宅に、アフリカから帰ったばかりの獅子追いが来ていた。獅子追いというのは、人造ライオンを狩るハンターのことだ。かれから、シラコリンを使って肌が白くなった黒人たちの話を聴く。思うに、こういう根が深い人種的、社会的問題を化学的な方法で解決していいものだろうか？ あまりにもそれでは安易すぎはしないだろうか？ ダイレクトメール・パッケージがとどく。中身は、アンジリンだった。これ自体は人体になんの作用も及ぼさず、ただ、他のあらゆる精神化学薬品を使用するよう暗示を与えるだ

けの薬だ。つまり、薬を飲みたがらない人間がいるということではないだろうか。そうにちがいないと確信して、元気がでてきた。

## 二〇三九・IX・二九

今日はシミングトンと話をしたが、いまだにそのときの印象を振り切れないでいる。それは重大な話だった。習慣的に服用している共感剤を親和剤といっしょに飲みすぎたから、そういう深刻な会話になってしまったのだろうか？ かれは晴ればれとした顔をしていた。デザインが完成したからだ。

「泰平さん、ご存知のようにわれわれは薬物主義ファルマコクラシイの時代に生きています」かれが言った。

「最大多数のための最大幸福というベンサムベナムの夢は実現されましたーしかし、それは銅貨の一面にしかすぎません。『人はただ幸福であるだけでは充分ではない、さらに他人が不幸であることが必要だ』と言ったフランスの哲学者のことを覚えておいででしょう！」

「パスカルの格言だ！」吾輩はむっとして言った。

「たしかにそのとおりです。で、『プロクルスティクス社』で何を作っているかご存卸ですか？ あそこで大量生産しているのは悪です」

「悪い冗談だ……」

「とんでもない。われわれは矛盾を作りだすことに成功したんです。今ではだれでも、近親者がいやがることをその人間にたいしてやることができますしかも、まったく害はありません。われわれが開発した悪は、ワクチンが作れる病原菌のようなものです。文化とはつまり、かつては、人とは善人でなくてはならないと、人間が人間を説得することでした。そこではただ善人しか必要としなかったのです。ほかのものは全部どこか目につかないところへ押しこまれてしまったのです。歴史は、善人がいがないものを説得したり、警察を使ってとにかくどこかへ押しこみはしましたが、いつも最後には、なにかが頭をもたげ、逃げだし、反乱を起したのです」

「しかし常識で考えたって、善良であるのが当然だろうが！」吾輩は突っ張った。「そんなことはわかりきっている！ とにかく、今はだれもかれもが立派で、陽気で、きちんとしており、熱心で、調和がとれ、幸福で、満足しているように見えるが……」

「だからこそ」と、かれは吾輩のこぼれをさえぎった。「耳が遠くなるほどたつぷりと、だれかれの見境もなく射ちまくりたいという誘惑が強くなるにしたがって、心のバランスと平安のために、健康のためにそうすることが必要なんです！」

「いったいなにが言いたいんだね？」

「まあまあ、そういう偽善ぶった態度はやめることです。それを自己偽瞞というんですよ。そんな必要はありません。わたしたちは自由なんですから 虚構化とギゼンプリン

めおかげで。だれでも心で望むがままに悪くなれるんです。不幸や屈辱　もちろんそれは他人にとってですが　だって同じことです。不平等、隷属、争い然りです。わが社がはじめて商品を市場に出荷しますと、あっというまに売り切れてしまいました。今でもよく覚えています、薬を買った連中は、博物館を駆けめぐり、画廊に押し入って、だれもかれもが手に手に鉄挺を持ってミケランジェロの作品のところへとんで行き、彫刻を叩きこわし、キャンバスを引き裂こうとしました。かりに巨匠自身が道に立ち塞がろうなどという気を起したにしても、かれだってぶん殴られることになったでしょうな……どうです、驚いたでしょう？」

「それだけしか言えないのか！」吾輩はかっとなって怒鳴った。

「それは、あなたがまだ偏見のとりこになっているからですよ。しかし、いいですか、今ではなんだって可能なんです、それがわからないんですか？　たとえばジャンヌ・ダルクを見たら、あの神々しいまでに優雅な立居振舞、天使のような清らかさ、崇高な美しさを汚してやるべきだとは思いませんか？　彼女に鞍をおき、馬具をつけ、手綱をにぎって走らせるんです　六頭立ての馬車にか弱い女たちをつなぎ、こととしいによつては鈴をつけ、鞭をぴしぴし鳴らし、棒で少女をひっぱたく……」

「なにを言いだすんだ！」と叫んだが、吾輩の声は恐怖で震えていた。「鞍をおく？　馬具をつけるだって？　乗るんだと?!」

「ええ、そうです。健康のため、精神衛生のためですよ。しかし全体のためでもあるんです。名前を言って、調査書の記入欄を埋め、苦情や不満、不和の種を書きこむんです。適当でいいんです。たいていの場合、人は特に理由があって恨みを抱くわけじゃありませんから。つまり、他人が清廉潔白であるとか高潔であるとか美しいとかいうことが動機なんです。だから適当にそれを挙げれば、わが社のカタログが手に入ります。注文は二十四時間以内に遂行されます。薬がそっくり一揃い郵送されでくるんです。空腹時に水と一緒に服用するのがいちばんいいのですが、必ずしもそうしなきゃならないわけではありません」

かれの会社の広告はヘラルドとワシントン・ポストにも載ることがわかった。しかしと、狼狽しながら懸命に考えた　かれはなぜあんな言いかたをしたんだろう？　あれは鞍にことよせた当て擦りなんだろうか？　乗馬をすすめているのだろうか？　なぜ裸馬に乗るんだ、畜生？　どこかここには、吾輩を現実にもどしてくれる保証が　下水道や目覚時計、扉があるのだろうか？　だが設計技師は(いったい何をデザインしていたんだ?) 吾輩の心の動揺に気づいていないか、もしくは誤解していた。

「われわれが自由になれたのは化学のおかげです」かれは続けた。「つまり今あるものはすべて、脳細胞の表面で水素イオンの濃度が変化した結果にすぎません。おたくは今、わ

たしを見ておられますが、実際にはノイロンの薄膜に生じるカリウム酸ナトリウムのバランスの変化を体験しているんです。したがって、夢を現実のように体騒するには、その脳の真ん中へ然るべき分子を若干送りこんでやるだけで充分なんです。もっともそんなことはとっくにご存知でしょうが……」声を落としてことばを結んだ。そして金平糖に似た、色とりどりの丸薬を一掴み抽出からとりだした。

「これはわが社が作った悪で、魂の願望を鎮めてくれます。この世の罪業をきれいさっぱりと取り除いてくれる化学薬品というわけです」

吾輩は震える指でポケットからノーシンの錠剤をとりだすと、そのまま水なしで飲みくだして言った。

「実を言うと、できればもっと詳しく話が聞きたい」

かれはびっくりしたらしく眉をあげたが、だまってうなずくと、抽出をあげ、中からなにかとりだしそれを口に入れてから答えた。

「ご希望ならお聞かせしましょう。わたしが今お話ししたのは、新技術のT型モデルについてです。つまり、技術の幼稚な初歩的段階について話したにすぎません。それは棒についての夢でしかありません。大衆は人を鞭でひっぱたいたり窓から<sup>ほう</sup>投げだしたりしはじめました。つまり、それは *felicitas per extractionem pedum* (杖によってひきだされた幸福) ですが、この発明は着想の幅があまりにも狭かったものですから、たちまち種切れになってしまいました。どうしようもなかったんです。想像力が不足していましたし、見習えるような手本もなかったんですから！ それと言いますのは、歴史上で実際に行なわれていたのは善だけでして、悪はといえば、その影に隠れて、つまり適当な口実をつけて、より高邁な理想のためと称し略奪、破壊、暴行を行なっていたからです。しかも個人的なレベルでは、そうした道標さえもたずに悪が行なわれていたのです。したがって不法な行為はいつもきまってぞんざいで、がさつ、まったく投げやりでした。そのことを大衆の反応がはっきりと立証していました。つまりわが社の製品に注文が殺到しましたが、うんざりするくらい同じことが繰り返されたというわけです。要するに、入を襲い、締め殺し、逃亡することしか考えていなかったのです。ま、それが習慣というもんなのでしょうが。

悪いことができるチャンスがあっても、それだけで人は満足するものではありません

その上に自分なりに納得のいく筋の通った理由も必要なんです。隣人たちが、苦しい息の下から(こういうことはよくあることです)、“どうしてこんなことを?!”とか、“こんなことをして恥ずかしくないのか?!”と叫んだら、どんなに不愉快でばつの悪い思いをするか考えてみてください。返事ができずに馬鹿みたいに突っ立っているのはいやなものです。

鉄挺では正当な反証にはなりません。そのことはだれもが感じています。そうした中途半端な不満をいかにも馬鹿にしたように突っぱねる然るべき根拠があるところが実に巧妙な点です。だれもが悪いことをしたがついています。しかし、それを恥ずかしいと思わずにすむようなやりかたです。復讐は理由になります。しかし、ジャンヌ・ダルクはあなたになにをしましたか？ あれで彼女の立場はさらによくなり、はなばなしくなっただけでしょう？ ところがあなたはどうです、鉄挺を持っているだけ不利です。しかしそんなことはだれも願ってはいません！ わたしたちが望んでいるのは、悪事を働くことです。つまり極悪非道な悪党、冷酷無惨な犯罪者でいながら、それでもまだ高潔で立派な人間のままでいたいということです。申しぶんなくすばらしい人間になりたいのです！ だれだってすばらしい人間になりたいがります。それがあたりまえです。悪くなればなるほどすばらしい人間になれるのです。それがほとんど不可能であること自体が、そうしたいという欲望をそそることもなっているのです。わが社の顧客は、<sup>やもめ</sup>寡婦や親なし子を虐待するだけでは満足しません。己の正義感を燃えたせながらそういう行為をしたがるのです。まさにその点でかれらは公然と正当性と権利を主張していながら、だれ一人として犯罪者の仲間に加わりたがるものはいません。しかし、たどえそんなことで死刑執行人が脚光を浴びたところで、面白くもおかしくもなく、退屈なだけだからです。たんなる可能性だけでなく、実際に義務でもある感情に身をまかせられるようにしたまさに天使のような性質、神聖さそのものを顧客に与えてやるべきです。矛盾を調和させるための高度の技術とはどういうものだと思います？ けっきょく問題になるのは魂であって肉体ではありません。肉体は目的にいたる手段にすぎないのです。それが理解できないものは、肉屋の店頭で命を失いソーセージにされるのがおちです。もちろんそれがわからない顧客が大勢いることはたしかです。そういう連中のために、わが社にはホプキンス博士が担当する世俗および宗教紛糾学<sup>トラフロジイ</sup>の部門があります。ところで、ヨシャパテの谷のことはご存知ですね。あそこへ悪魔たちがわが社の顧客いがいのすべての者を連れこむのです。そして最後の審判が終りに近づくと、神が個人的に顧客たちを天国へ迎え入れるのです。しかもおそろしく丁重に辞を低くして。ですから中には(しかしこれは愚者の俗物根性<sup>スノビズム</sup>からでたことですが)神が連中と立場を入れ替わるよう申し出るように要求するものまででてくるしまつです。どうです、え、あまりにも子供じみているではありませんか。どうもアメリカ人は常にそうした連中に惹かれる傾向にあるようです。ご覧のようにこれが、ブッタタキとイザコザンですが」と言って、不快な表情をうかべ分厚いカタログを振った。

「まったくもって尚古主義<sup>プリミチビズム</sup>もいいところです。隣人というのはひっぱたくための太鼓なんかじゃなくて、デリケートな楽器なんですからね！」



「ちょっと待ってくれ」吾輩は鎮静剤をもう一錠口の中へ抛りこんで言った。「すると、おたくはいったい何を設計しているんだね？」

かれは得意げにほほえんだ。

「無ビット作曲ですよ」

「しかし、ビットは情報の単位だろうに？」

「いやそうじゃありませんよ、泰平さん。打郷の単位です。基本的にわたしは無ビット構成者です。だからわたしのプロジェクトは笞度で測られます。一笞度は為六人構成の家族が目の前で殺されるのを見たとき家長が味わう不快感に相当します。この計算でいくと、主なる神はヨブに三笞度の苦痛を与えたもうたことになり、いっぽうソドムとゴモラの町はたっぶり四十笞度の罰をうけたこととなります。しかし計量的な側面だけではまだ充分とはいえません。本質的にわたしは芸術家であり、しかもこの領域はまだ手つかずのまったく新しい分野でもあります。善についていえば、これまでに無数の哲学者たちが学説を展開してきましたが、悪の理論となると、いかにもぼつが悪そう<sup>やか</sup>なふりをしてほとんどだれもこれに手をつけず、実にさまざまな浅学菲才の輩や幼稚な連中の手にゆだねられてきました。訓練もしっかりした研究もしなければ、熟達した技も靈感も身につけていないで、巧妙でずる賢く微妙にこみいった悪がものになるかもしれないなどと思うのは、欺瞞もはなはだしいと言わなくてはなりません。拷問学、暴虐学、世俗、宗教両面にわたる紛糾学では充分とは言えませんこれはせいぜいが然るべき問題にいたるほんの序の口にすぎません。なにしろまだ普遍的な処理方法はないのです suum malum cuique! (各自に最高の悪を) です」

「で、顧客はたくさんいるんですか？」

「生きている人間は一人残らずわが社の客です。赤子のときからすでにそうなんです。子供たちには父親殺しキャンディーを与えて不満を発散させます。ご存知のように父親というのは禁制と規範の源であり、欲求不満の原因ですからね、だからフロイドリンを与えれば、エディプスコンプレックスにかかるものはいけませんよ！」

吾輩はかれのところを辞去したが、錠剤は一錠も残っていなかった。だからひどい気分だ。まったくなんという世界だ！ このせいでだれもかれもがあんなに息を切らしているんだろけか？ 周囲は妖怪ばかりだ。

## 二〇三九・IX・三〇

シミングトンの件をどうしたらいいのかわからない。だが、かれとの関係をこれまでどおり維持していくのはむづかしい。アイリーンが助言してくれた。

「ダンプカーを注文すれば！ よければ、わたしがプレゼントしてあげてもいいわ！」



それは『プロクルスティクス社』に注文して購入する因果応報のことをいっているのだ。つまり、シミングトンがわたしの足許でほこりにまみれて平伏し、自分も会社も製品もいっさいがどうしようもなく醜悪でおぞましいものだとして認めて、吾輩が勝利した場面を注文しろと勧めたのだ。しかし、信用していいかどうか自分が疑っている方法などどうして使えようか？ アイリーンにはそのことが理解できない。彼女とのあいだがなんだか気まずくなる。彼女は体が太り背が低くなって叔母のところから戻ってきた。ただし首だけはうんと長くなっている。肉体のことなどさして問題ではない、それより重要なことは魂だ。

たしかにそれはあの化け物が言ったとおりだ。ああ、なんたることだ。これから暮していかなきゃならんこの世界をすっかり誤解していたのだ—どうやら今まで勝手に空想していたが、ここのことがわかりかけてきたぞ！ 前に見すごしていたことが今じゃはっきりと目につく。たとえば、例の頬に赤あざのある隣人が内庭でなにをやっていたのか今になって理解できる。パーティで話し相手が吾輩にことわって、優雅な態度で部屋の隅へ離れていったとき、それがどういう意味だったのか今ならわかる。かれはそこで嗅ぎタバコをやりながら、じっと吾輩から目を離さなかった。それは、そこにはっきりと映っている吾輩の肖像が、かれの怒り狂った想像力が描く地獄へたちまち落ちてしまいそうな視線だったのだ。化学主義社会の上流社会に属している連中までがそういう振舞いをするのだ！ それなのに吾輩は、さも優雅そうな物腰の影に隠されているそういういやらしいところに気づいていなかったのだ！ 気力をたかめるために砂糖入りのヘラクレジンを一匙飲んでから、キャンディーの箱をひとつ残らず叩きこわし、アイリーンがごっそりと吾輩のために持ちこんだ水薬の瓶、粉薬の容器、錠剤のケース、ガラス瓶、調合器を打ちくだいてしまった。どうなるかと覚悟はできている。ときどき狂暴な気分を駆りたてられることがあったから、むしように感情相殺医に診てもらいたくなかった。そうすればかれに激情をぶつけられるかもしれないからだ。理性は、棍棒を持って待っているくらいだったら、自分でそれをやったほうがいいとささやいている。たとえば、空気人形が買えるのだから。しかしマネキンが手に入るのだったら、マダムキンが買えないはずがないし、マダムキンがだいじょうぶなら、マンドロイドだっていいはずだ。畜生、マンドロイドが買えるんだったら、ホプキンスに—つまり『プロクルスティクス社』へ手頃な責め苦、この墮落した世界に降らせる硫黄とタールと火の雨を注文したってかまわんのではないだろうか？ だがそうはいかないところがやっかいなのだ。なにもかも自分一人で、いっさいのことを自分だけでやらなくちゃならん—そう、一人でだ！ ひどい話だ！

## 二〇三九・X・一

ついに今日、彼女との仲が終った。彼女は吾輩に手を差しだして、黒と白の錠剤を二個渡し、その場でどちらを飲んだらいいか、それをこっちに決めさせようとした。つまり、こんなに重要な心の問題まで、精神化学薬品を使わずに自分で決定をくだすこともできなくなっているのだ！ 吾輩がそんな選択はしたくないと言うと口論になってしまい、彼女はカングリンを服用して抗弁した。彼女とデートする前に吾輩がワルクチン（これは彼女が言ったことばだ）を飲んだにちがいないと、いいかげんなことを言って責めた。吾輩にとっては胸の痛む辛い時間だったが、自分の主張をあくまで押し通した。本日限り、自分で調理した食事だけ、自分の家でとることにした。ユメゴゴチン、パラダイスイン、ノンピリゼリーはとっくに捨ててしまい、いっさいの快樂薬ときっぱり手を切った。抗薬品剤も脱薬下剤も必要としない。悲し気な目をしたひどく奇妙な 車輪がついているからだ 大きな鳥が窓から部屋の中をのぞいている。コンピューターがそれはホモセクシャルと言うのだと断言した。

## 二〇三九・X・二

ほとんど外出しない。歴史書と数学書を飲む。そのあと還視を観る。だがそのとき、周囲のすべてのものに対してむらむらと反抗心が募ってくる。たとえば昨日にしても発作的に情景硬化調節器を操作してしまった。つまりイメージに独自の重量をもたせ、すべてのものにでぎるだけ大きい密度と質量が生じるようにしたのだ。夕方のニュースが書きこまれている数枚の原稿カードの重みでこわれた机がアナウンサーに当り、かれはスタジオの床を転がっていった。言うまでもないことだがその効果はもっぱら吾輩の部屋の中だけに現われたことであって、ただ吾輩の心理状態を表わしているにすぎず、なんら深刻なことは起らなかった。それだけではない。還視でやっている小咄、駄洒落、調刺、モダンギャグにはいらいらさせられる。“夢に夢みる夢の夢”、“苦もなく苦をなくす薬の功德”これではどうしようもないではないか！ 番組の題がまたこれと同じときている……たとえば こんたんいるあそびかけおちにんロボット “魂胆色遊駈落二人絡操”がそれだ。これは、黒い顔料を塗った一組の駈落ち者が座っている場面で始まる煽情的な芝居だ。吾輩はスイッチを切ってしまった。いいかげんうんざりしていたからだ。しかし、隣の部屋から別の下水道で大流行している最新のヒットソングが聞こえてきたら、それは話が別だ（しかし、吾輩がいた下水道はどこにあるんだろう？ いったいどこなんだ?!） 若い娘のバッグをのぞきゃ、中にアンタナンカキラインとハヤクヤッテネールが入ってる。二十一世紀だというのに部屋の防音が完全にできな

いのだろうか質今日もまた遠視の硬化装置で楽しんだが、けっきょく最後にはそいつをぶっこわしてやった。勇気をだして、なにかやる決心をしなくてはならない。しかし、なにを？ なんでも足りていて、なにもかも腹のたつことばかりだ。まったくつまらん。郵便だってそうだ 角にある局からノーベル賞に応募してはどうかと申し入れがあり、恐るべき過去からやってきた人物として一番最初に処理してやるといってきたのだ。気が狂いそうだ！ 本当にどうかなりそうだ！ “普通では手に入らない秘密の錠剤”を勧めてくれるうさんくさいパンフレットもある。なにが含まれているか考えただけでもぞっとする。販売することを禁じられている幻夢剤を秘かに扱っている売人たちにたいする警告書もある。また、精神エネルギーを浪費するから、がつがつと好き勝手に本能の影もむくまま幻夢剤を服用しないようにと訴えたアピールもあった。こんなに市民のことを心配してやるとは、たいした親心だ！ 吾輩は、百年戦争の幻夢剤を注文した。翌朝目を覚ましたら全身打ち身だらけだった。

## 二〇三九・X・三

相変わらず世捨人のように孤独な生活を送る。新たに予約購読をはじめた季刊誌『祖国の未来を占う者』にぱらぱらと目を通していると、トロツテルライナー教授の名前が偶然目にとまってひどく驚いた。すぐさま疑惑がまたもや頭をもたげ、最悪の事態を考えてしまった。吾輩がいま体験していることはことごとく、屋気楼と幻が描きだした<sup>うたかた</sup>泡沫にすぎないのではなからうか？ 原則的にはありえないことだ。心理数学 が、幾重にも層になった幻想を生み出す位層錠や多層薬を近ごろ少し過小評価しすぎているのではなからうか？ たとえばだれかマレンゴで戦ったときのナポレオンになりたいと思うものがいても、戦が終わればいやでも現実に戻ってこざるをえない。だから、ネー元帥か親衛隊のだれかが銀の盆に新しい薬を載せてかれに差しだしてやるのだ。たしかにそれは幻覚にすぎないが、そんなことは問題ではない要するにひとつのパーティが終るとすぐに次の幻覚の扉が開き、それが無限に続くわけだ。吾輩はいつも思いきった手段で難局を切り抜けるのが常だから、今度も電話帳をまるごと一冊飲みくだして教授の電話番号をつきとめ、かれに電話をした。たしかにかれだった！ 晩めしと一緒に食うことになった。

## 二〇三九・X・三

夜中の三時。死ぬほど疲れ、すっかり気が滅入っているが、ペンをとる。教授は少し遅れてきた。だからしばらくレストランで待たされる。かれは歩いてやってきた。かれは前世紀のときよりかなり若返っていて、傘も持たず眼鏡もかけていなかったが、遠くからす

ぐにかれたとわかった。吾輩の姿を認めたらしく足を早めた。

「どうしたんだ、歩きかね？」吾輩は尋ねた。「調子が悪いのか？（自動車の調子が悪くなることはよくあることだ）」

「いや、そうじゃない」かれが答えた。「歩くほうが気に入っているからだ……」

だがそう言ったときなにか奇妙な笑みをうかべた。コンピウエイターが引きさがったので、かれが今なにをしているのか尋ねかかった。だがつい幻覚について疑問をもっていることを口にだしてしまった。

「やめてくれ、泰平くん、また幻覚の話か！」かれは腹をたてた。「そっちがわしが見ている屋気楼の一部だと疑うんだったら、こっちだって立派に疑えるんだ。あんたは冷凍にされたり？ わたしもだ。そして解凍された？ わたしもそうだ。おまけにうんと若返らせてくれた。そう、回春剤や抗老薬のおかげだ。ま、あんたには必要なかっただろうがね。だが、わたしはそういう薬をたっぶり投与されなかったら未然学者にはなれなかったかもしれんのだ！」

「それを言うなら未来学者だろう？」

「そのことばは今じゃ別の意味をもっている。未来学者は<sup>よみ</sup>予未(つまり未来予知)をするが、わたしは理論をやっている。これは、われわれがいた時代には知られていなかった、まったく新しい領域だ。言うなれば言語による未来予知と呼んでもいいだろう。言語予知学だ！」

「ついぞ耳にしたことがない。いったいそれはなんだ？」

吾輩がそう尋ねたのは、実を言うと興味を感じたからと言うより、訊くのが礼儀だと思ったからだ。だが、かれはそれに気づかなかった。コンピウエイターがオードブルを運んできた。スープが来る前にシャブリの一九九七年産白ワインをやった。この年のものは極上品だったし、それに愛飲している銘柄だったからそれを選んだのだ。

「言語未来学というのは、言語がもつ語型変化の可能性を通じて未来を研究する学問だ」トロツテルライナー教授が説明した。

「なんのことかさっぱりわからん」

「人が制御できるものは、理解できるものに限られている。そして理解できるものといえば、ことばになった概念だけだ。したがってことばで表現できないことは理解できない。言語の将来の進化をさらに研究すれば、いつか言語が発見、変化、風俗習慣の変革にどのように反映されるかがわかるようになるはずだ」

「それはたまげた。で、実際にはどうなるんだね？」

「研究は大型コンピューターの助けを借りて進められている。なにしろ、すべてのヴァリエーションを人間が自分で追跡してチェックするわけにはいかないんでね。主として、

言語の構文と語形の変化順列のことを問題にしているのだが、量子化された……」

「教授！」

「すまん。このシャブリはすばらしい。いくつか例をあげれば問題がもっとはっきりするだろう。なにかことばを言ってみたまえ。どんなことばでもいい」

「自分」

「自分？ ふうん、自分か。いいだろう。わかっていると思うが、言うなればわたしはコンピューターの代りをつとめなくてはならん。だから答えがごく簡単なものになる。つまり自分とは自我のことだ。この伝で行くと、爾なんじは 爾我じがで、我々は 複我ということになる。わかるだろう？」

「さっぱりわからん」

「こんなにわかりやすいことが？ いま問題にしているのは、自我が爾我と溶け合う可能性についてだ。つまり、ふたつの意識が合さってひとつに融合するということだ。これが第一点。つぎに、複我 これが第二点だが、非常に面白い例だ。つまりこれは集合意識のことだ。たとえば一人の人間の意識がいくつにも分裂したとき、複我が生まれる。別のことばを言ってみたまえ」

「足」

「いいだろう。足はどうだろう？ 慢足。負足。あるいは、怒足。足鼻たび。足積そくせき。足るあし。足わう。足なる。足気ない。足様あしざま。あし、あしる、あしれ、あしる。足理学。このとおりいくらでも作れる。足理学。足理学者……」

「それがどうしたというんだね？ そんなことばはなんの意味もないだろうが？」

「たしかにさしあたってはなんの意味もない。だがいずれ意味をもつようになる。要するに、足理学や足脚主義が普及すれば、これらの単語も意味をもつようになるやもしれんということだ。知ってのとおり口ポットということばは十五世紀にはなんの意味もなかった。だが、当時もし言語未来学があったら、自動機械オートマトンのことは容易に推測できたはずだ」

「それで、足理学とはいったいなんだね？」

「いいかね、この場合にかぎっては、はっきりと説明ができる、と言うのは、問題が予知に関したことでなく、すでに存在していることが関係しているからだ。足理学とは、最も新しい概念だ。つまり人間がいわゆる homo sapiens monopedes (単足人) に自律的に進化する新しい方向のことだ」

「一本足の人間だって？」

「そのとおり。歩行の無駄をはぶくためと、空間がしだいになくなっていく点を考慮してだ」

「そんな馬鹿な！」



「わたしだってそう思っている。それはそうだが、ハツェルクラッツァーやフォシュビーンといった名士が足理学者なんだよ。足ということばを挙げたからには、そのことを知っていたんじゃないのか？」

「とんでもない。で、ほかの派生語の意味は？」

「まだいまのところわかっていない。足理学が大勢を占めるようになれば、慢足とか足鼻<sup>たび</sup>といったことばが指すものも意味をもつようになるさ。つまりこれは予言なんかじゃないんだよ、きみ。単なる純粋な可能性の展望にすぎんのだ。では、つぎのことばを挙げてみたまえ」

「乱暴」

「いいだろう。乱暴か、乱暴だね。乱暴は暴力、暴行に通じる。もとが漢語だとすれば、漢語で関連語を探す必要がある。狼籍、落花狼籍。よし、これできた。それは、花を摘んだから暴行されて子供を産んだ処女のことだ」

「どこから花なんてことばがでてくるんだ？」

「落花は花が散ることだ。つまり手折<sup>たお</sup>られた処女に通じる。すなわち処女を失った女だ。おそらくそういう女のことを孕<sup>はら</sup>み女<sup>め</sup>とか、還視で孕んだ女を略して簡単に還婦というようになるだろう。請けあってもいい、将来は実は豊富な資料がふんだんに利用できるようになるはずだ。そう、憲法制定会議に所属する未来予知会議のような組織が、新しいしきたりを持った世界をすっかり開いてくれるようになるぞ！」

「おたくが新しい科学に熱をあげていることはよくわかった。それじゃもうひとつ別のことばで試してみているかな？ ごみくずなんかどうだ」

「かまわんよ。きみが疑ぐり深くたっていっこうにさしつかえない。大いに結構だ。それでなんだって……そう、ごみくずだったな。さてと、塵海に夢屑<sup>ごみ</sup>、芥<sup>ごみ</sup>。ごみくずの山が普塵芥<sup>ふしんかい</sup>。そうだ普塵界だ！ これは実に興味がある。泰平くん、素晴らしいことばをだしてくれた！ 普塵界、うんこれだ。これこれ、これだ！」

「それになにか特別な意味でも？ そのことばに意味があるとは思えないが」

「まず第一に、それを言うんだったら、語味<sup>ごみ</sup>があるとは思えないと言ってもらいたいもんだ。意味がないなんて言いかたは時代遅れもいいところだ。さっきから気がついていっているんだが、きみは新しいことばにあまり注意を払って影らんようだ。それはよくない。ま、その件についてはあとで話そう。次にだ 今のところ普塵界ということばにはなんの意味もないが、こうあるべきだという未来の語義は推測できる！ 心理動物学の新しい理論に関係がある。そうじゃないだろうか。これは軽視できん問題だぞ！ その理論によれば、星はもともと人為的に生まれたものだと言っておるんだ！」

「また何を根拠にそんなことを？」



「普塵界ということばそのものからだ。この単語の意味していることは、つまりそれから連想できるのは、果しなく長い時間が経過するあいだに、宇宙が塵芥で、つまりさまざまな文明の廃棄物であふれかえってしまったというイメージだ。そうした廃物は手のほどこしようがなく、天文学者の観測や宇宙旅行の障害になったのだ。だから非常に高い温度がでる途方もなく大きい焼却炉が建造され、ごみくずを燃やすようになったのではないだろうか。質量も大きかったにちがいないから、ひとりでにごみくずを引きよせ、宇宙空間はしだいにきれいになっていく。だがあそこに見える星々　そうだ、あの赤々と燃えている火や暗い星雲は、まだ焼却が終っていないごみくずなんだ」

「なんだって、まさか本気でそんなことを言ってるんじゃないだろうな？　そんなことがありえると思っているのか？　宇宙は塵芥を生贖<sup>いげにえ</sup>にして焼き払う儀式みたいなものだと言うのか、教授？」

「わしがどう思おうと、そんなことは問題じゃないんだよ、泰平くん。まさに言語未来学のおかげがあればこそ、来たるべき世代のために純粋な可能性として宇宙創造説の新説をたてられたのだ！　連中がそれを真剣にうけとめてくれるかどうかはわからん。だが、そうした仮説をことばとして口にできることは事実なんだ！　もし前世紀二〇年代に言語学的外挿法が存在していたら、すでにそのころ　おそらく覚えていると思うが　爆弾という単語から派生した　誘愛弾　ということばは予想できたはずだ。いいかい、きみ、ことばそのものに、大きな可能性が　と言っても無限とは言えんがね　隠されているんだよ。ユートピア　がもともとはギリシア語の ou(無) と τόπος(場斯) からできたことばで、字義どおりには存在しない場所、到達しえない所を意味していることを思いだせば、たいていの未来学者が未来にたいして暗い見かたをしていることもよく理解できるはずだ！」

話題はほどなく吾輩がいちばん問題にしている件に戻った。吾輩はかれに自分の不安を　そしてこの新しい文明に嫌悪感をいだいていることを打ち明けた。かれは憤慨したが、それでも最後まで吾輩の話に耳をかたむけてくれ　もともと心根はやさしい人物だったから同情までしはじめた。しかも見ていると、チョッキのポケットに手をのぼし、憐憫割までとりだそうとした。だが、のぼしかかった手を途中でとめてしまった。なぜかと言えば、吾輩が精神化学社会を口ぎたなく罵倒したからだ。ところがかれは真面目な表情をして言った。

「そういう態度はよくないぞ、泰平くん。きみはお門違いの非難をしている。本質がわかっておらんのだ。見当すらついておらんのだろう、事の本質にくらべたら、『プロクルステイクス社』やそれ以外の精神文明のすべての所産もとるにたらんことだ！」

吾輩は自分の耳が信じられなかった。

「しかし……しかし、それは……」吾輩は口ごもった。「いったい何が言いたいだね、教授？ これ以上悪いことがなにか？」

かれは机ごしに吾輩のほうへ体をのヴだした。

「泰平くん、これからわしがしようとしていることはきみのためを思ってするのだ。きみのために職業上の秘密を犯すことにする。おたくがいま文句をつけたようなことは全部、子供だって知っていることだ。それ以外にありようがないんだから、しかたがないだろう。麻酔剤や初期の幻覚剤のあとに、強力な選択効果がある精神焦点剤と呼ばれる薬が現われた瞬間から、文明の進歩はそちらの方向へ進まざるをえなかったのだ。だが、本当の意味での大変革が起ったのは、ようやくマスコンつまり点覚剤と点線状幻覚剤が合成された二十五年前のことだ。麻酔剤は人間を世界から遮断するのではなく、それとの関係を変えるにすぎないし、幻覚剤は世界全体を混濁させ覆うだけのことだ。ところがマスコンは世界を偽造するのだ！」

「マスコン……マスコン……」吾輩は繰り返した。「そのことばだったら知ってるぞ！ なんだ、月の地殻下でどろどろの土が凝結したやつのことだ。鉱物の凝縮物のことだろう？ しかし、それとこれとどういう関係があるんだ？……」

「いや、無関係だ。このことばはまったく別の意味　つまり語味をもっている。語源はマ・ス・クだ。然るべく合成されたマスコンが脳に入ると、外界のあらゆる対象が虚構のイメージで覆われてしまう。それがあまりにも真に迫っているから、マスコンの影響下にある者は、現実に知覚が働いているのか、それとも虚妄状態にいるのかわからなくなってしまふ。たとえ一瞬にしろ、マスコンが生み出した架空の世界ではなく、実際にわれわれをとりかこんでいる現実の世界を見たら、震えあがってしまうにちがいない」

「ちょっと待ってくれ！　どんな世界だって？　どこにあるんだ、それは？　どこへ行けば見れるんだ？」

「いたるところにある。ここだって見られるぞ！」あたりをこっそり見まわしながら、吾輩の耳許でささやいた。かれは吾輩のほうにのりだすと、擦りへったコルクで栓をした小さなガラス瓶を机の下から渡してよこし、秘密めかした口ぶりで言った。

「これはアンチフと言って覚醒剤の一種で、強力な抗精神化学薬品だ。メスカル・ブトン・ペオチン系の薬だ。服用しなくとも所持しているだけで、重大な法律違反に問われることになる。机の下で栓を開け、鼻で一息吸いこむんだ、ただし一度だけだぞ　アンモニア水を嗅ぐときのようにやるんだ。そう、気つけ薬を使う要領だ。それから……おい、よせ！　たのむから自制してくれ！　落ち着くんだ、そのことを忘れるな！」

小瓶の栓を抜く手がぶるぶる震えていた。教授に瓶をとりあげられてしまったが、かろうじてアーモンドの鋭い香りを嗅ぎ、目に涙があふれた。指先で涙をぬぐい、まぶたをこ

すって、ふたたび目が見えるようになったとたん、はっと息をのんだ。絨緞を敷きつめ、株欄の鉢がいっぱい並んだすばらしい広間、華やかな陶器張りの壁、優雅な光沢を帯びたデスク、食事をとっている吾輩たちのために、奥のほうで音楽を演奏していた楽団、それが全部消えてしまった。吾輩たちは、コンクリートの待避壕でむきだしの木のテーブルに向かって座っており、足はとっくの昔にすっかり朽ちはてている藁蒲団に埋まっていた。相変わらず音楽は聞こえていたが、それが錆びた針金で吊りさがっている拡声器から流れてくることがわかった。水晶のように虹を放っていたシャンデリアがあった場所にはほこりをかぶった裸電球がぶらさがっていた。だがなんと言ってもテーブルの上の変りかたがいちばん激しかった。雪のように白いテーブルクロスは消えてしまっていた。湯気をたてているヤマウズラとトーストが載っていた銀の大皿は、瀬戸物の食器に変わり、それには食欲がそがれる灰褐色の粥が入って影り、錫のフォーク　　とすることはこれも歳月を経て気品がでた銀色が消えてしまっていた　　にべとべとからみついていた。冷水を浴びせられたようにぞっとして、吾輩はその胸くそが悪い得体の知れない代物を眺めた。ほんのついさっきまで、こんがり狐色に焦げた鳥の皮を賞味し、上はほどよくぱりぱりに焼け、下はたっぷり汁気を含んでいた厚切りトーストの歯ごたえを楽しんでいたというのに。近くの鉢に植わっている綜欄の小枝だとばかり思っていたものが、実はパンツの紐であって、それをはいている男はほかの三人の男と一緒に吾輩たちのすぐ上の中二階と言うよりむしろ棚といったほうがいい、ひどく狭くて窮屈な場所にいた。なぜなら、群集が信じられないほどひしめきあっていたからだ。その恐ろしい光景がゆらめきだし、魔法の杖が触れたように変化し、もとに戻りはじめたときは、目の玉が眼窩からとびだすのではないかと思った。顔のすぐそばにあったパンツの紐がみどり色に変わり、ふたたび葉をつけた綜欄の杖になり、三步離れたところから悪臭を放っている、どろどろしたものが入っていた桶が黒光りした光沢をとりもどし、彫刻をほどこした植木鉢になり、汚れたテーブルの表面は、まるで初雪に覆われたように真白になった。クリスタルグラスがきらきら輝きはじめ、粥状のどろどろしたものが鳥料理のうまそうな色合いをとりもどし、しかるべき場所に羽根と肢が生え、フォークの錫はにぶい銀色を放ちだした……そして給仕たちの燕尾服があたりで行きかいはじめた。吾輩は足許を見診ろした藁はベルシャ絨織に変わっていた

1 豪華な世界に戻った吾輩は深い溜息をついて、ヤマウズラの豊かな胸をじっと眺めていたが、そこになにが隠されているかどうしても忘れることはできなかった……。

「どうやらやっと現実を理解しはじめたようだな」トロツテルライナー教授が気遣わしげに吾輩の顔を見つめながら低い声で言った。いささかショックが大きすぎたんではなからうかと、心配しているらしい。「われわれが今いるところが超一流の場所だということは心に留めて影いてもらおう！　前もってきみに秘密を打ちあけることなど考えないで、

おそらく見たら知性が狂ってしまうかもしれんレストランへきみを連れていくことだってできたんだ」

「なんだって？　すると.....つまり.....もっと恐ろしいところがあるとしても？」

「そうだ」

「まさか」

「誓ってもいい。少なくともここには本物のテーブル、椅子、皿、フォークがある。ところがそこでは、人は蚕棚のように幾重にも段になった板のベッドに座って、コンベヤーで運ばれてくる桶からじかに指で食っているのだ。だが、そこでもヤマウズラに見せかけて正体がわからなくしてあるが、とても栄養になるような代物でないことは同様だ」

「いったいそれはなんだ?!」

「絶対に毒ではないよ、泰平くん。塩素で消毒した水に漬け魚粉をまぜた草と、飼料用ビートのエキスにすぎん。普通はそれに<sup>にかわ</sup>膠とビタミンを加え、のどにひっかからないように合成滑剤でぬめりをもたせてある。臭いに気がつかなかったか？」

「気がついた。もちろん気がついたとも!!!」

「これでわかったろう」

「お願いだ、教授.....これはどういうことだ？　頼むから教えてくれ！　頭をさげる。陰謀なのか？　裏切り？　人類絶滅計画？　悪魔の策謀？」

「とんでもない、泰平くん、見当違いもはなはだしい。そんな悪魔みたいな形相をしなくたっていい。ここは、たっぶり二百億以上の人間が住んでいる世界にすぎない。今日のヘラルドを読んだかね？　それによると、パキスタン政府は今年の飢饉で死亡したのはたったの九十七万人にすぎないと主張しているが、野党側は六百万人だといっている。そんな世界のいったいどこでシャブリやヤマウズラ、ベアルネーズソースのシチューが見つかると思う？　最後のヤマウズラは四半世紀前に死に絶えてしまった。あの鳥は、うまく保存されていた死骸にすぎんのだ。巧妙に死体をミイラにして影くことができるようになったからだ　　と言うよりは死そのものを隠蔽することを覚えたからだ」

「ちょっと待ってくれ！　さっぱり理解できん.....つまりおたくが言わんとしていることは.....」

「きみに悪しかれと思っている者などだれもないということだ。むしろ逆に　思いやりからだ。つまり、化学的なペテン、カムフラージュ、ありもしない羽根や肢による現実の粉飾を使うのは、高度な人間の本質が動機になっているからだ.....」

「教授、するといたるところでいんちきが行なわれているということになるが？」

「そのとおり」

「わたしは外食はしないし、自分で料理をする。それなのにどうして.....？」

「どうしてマスコンを吸うのだ、と言いたいんだろ？ きみが訊きたいことは？ 空気中に原子となって含まれているのだ。コスタ・リカのエアゾールのことは覚えているだろう？ あれは、モンゴルフィエ<sup>\*2</sup>のロケットみたいなもので、おずおずとやった最初の実験というわけだ」

「このことはだれだって知っているんだろう？ それでいてそれとうまく折合いをつけて暮しているんじゃないのか？」

「そんなことは絶対にない。このことはだれも知らんのだ」

「噂もデマもまったくないというわけにはいかんだろう？」

「デマはいたるところに流れているさ。だが、健忘剤があることを忘れんでもらいたい。だれだって知っていることもあるが、だれも知らんこともある。薬物主義社会には、公然としている部分と隠されている部分がある。後者に支えられているからこそ前者があるのだよ」

「そんなことはありえん」

「ほう、どうして？」

「藁蒲団の手入れをしなくてはならん者がいるし、実際にわれわれが使っている瀬戸物や鳥料理に見せかけるどろどろした粥を作らなきゃならん者もいるからだ。すべてについてそう言える！」

「まったくそのとおりだ。きみが言っていることはもっともだ。すべてのものを作ってそれを維持しなくてはならん。だが、それがどうだと言うんだね？」

「その仕事にたずさわる連中は見ることになるし、知ることになる！」

「またそういう馬鹿なことを言う。きみは相変わらず古臭い考えかたしかできんとみえる。人は、ガラス張りの美しい温室へ向かっていると思っているのだ。中へ入るとアンチパラダイジンを与えられ、むきだしのコンクリート壁と作業台があることに気がつく」

「そして仕事がしたくなる、と言うのか？」

「そう、おそろしく熱心にだ。つまり献身薬も一服飲むからだ。したがって労働は犠牲的行為であり、崇高なものになるのだ。仕事が終れば健忘剤か忘却錠を一服飲むだけで充分だ。それで目撃したことを全部忘れてしまうのさ！」

「これまでずっと幻覚を見ているんじゃないだろうかと恐れていたんだ。これでやっと自分が馬鹿だったことがわかった！ ああ、帰りたい！ どうしたら戻れるんだ！」

「帰りたい？ どこへ？」

「ヒルトン・ホテルの下水道へだ」

「くだらん。そういう態度は軽率だし、馬鹿だったなどとは言うべきじゃないぞ。ほか

<sup>\*2</sup> 十八世紀のフランスの発明家。熱気球の実験に成功。



の連中と同じことをするべきだ。みなと同じように食ったり飲んだりするんだな。そうすれば、必要量のオブチミスタニンやエンジェノールが摂取できて、この上ないいい気分になれるはずだ」

「するとおたくも悪魔の味方だってことだな？」

「少し分別ってものをもったらどうなんだ。かりに医者が必要があって病人をだましたからといって、それが悪魔のように邪悪な行為と言えるのか？ どうせそういう暮しかた、食べかた、生きかたをしなくてはならんのだったら、きれいな包装がしてあるように見えたほうがいい。マスコンは申しぶんなく効き目がある　ただし例外がひとつだけあるにはあるが　ところでこの薬のまずい点はなんだと思うね？」

「今はそのことでおたくと議論をする気にはなれん」吾輩は少し落ち着きをとりもどして言った。「どうだろう、昔の<sup>よしみ</sup>誼でふたつばかり質問に答えてもらえまいか。そのマスコンの作用の例外とはいったいなんだね？ それから、いったいどんな方法で全面軍縮が達成できたのだ？　よもやそれも厘気楼じゃあるまい？」

「そうだ、幸いにもそれは完全に現実だ。だがそれを詳しく説明するにはひとくさり講義をしなくてはならん。だがいまはその暇がないよ」

翌日もう一度会う約束をした。別れるときマスコンの欠点について重ねて尋ねると、教授は立ちあがりながら言った。

「遊園地へ行ってみるんだ。そして不愉快な目にあうことを<sup>いと</sup>厭わなきゃ、いちばん大きいメリーゴーラウンドに乗るんだ。回転速度が最高に達したら、ポケットナイフで座席の<sup>カバ-</sup>保護覆いを切り裂いてみるといい。カバーは、回転しているときマスコンが現実を曇らせるために作りだす幻影が、回転に屈するからこそ必要なのだ。ちょうど遠心力で木馬の目隠しが外側へ引っぱられるようなものだ……やってみればわかる。そうすれば、すばらしい幻覚のうしろからなにが現われてくるか見えてくるはずだ……」

夜中の三時に、すっかり打ちひしがれてこれを書いている。これ以上なにか書き加えることがあるだろうか？　この文明からのがれどこか僻地へ身を隠す逃亡計画を真剣に練る。銀河も吾輩にとっては興味がない。帰るべきところがなかったら、旅をする気にもなれないではないか。

## 二〇三九・X・五

午前中は町をぶらついてすごす。どうにか恐怖を抑えて、ずいしょに見られる安逸と贅沢のしるしを眺めた。マンハッタンにある画廊では惜しげもなくただ同然の捨値でレンブラントやマチスの原画を売り払っている。その近くでは、ルイ王朝スタイルの豪華な家具、大理石の壁暖炉、王座、鏡、サラセンの甲冑の競売をやっている。ありとあらゆる



オークションがやたらに開かれている　野生の梨でも売るように建物が取引きされていた。だれもが自分の家を御殿のようにできる天国で暮しているように思えた。五番街にあるノーベル賞候補自選登録事務局もその独目の性質を吾輩に見せてくれた。つまり、この上なく貴重な芸術作品を住いの壁にかけることができるように、だれもがノーベル賞を手に入れることができるのだ　もっともどちらの場合も脳に刺激を与える一服の粉薬の作用ではあったが！　集団幻覚の一部分が公然としており、したがってその部分で虚構と現実をへだてる一線を引くことができるなどということは、全部とんでもない話だ。何事にたいしてももはや自然な反応をするものなどだれもないのだから　化学薬品の作用で学習し、人を愛し、反乱を起し、ものを忘れるのだ　薬物で操作された感覚と自然のそれとの間には違いがなくなっている。

吾輩はポケットの中で拳をぎゅっとにぎりしめて町を歩きまわった。カンシャクリンやゲキドールなどを飲んで激しい怒りを味わう必要などまったくなかった！　足跡を追う猟犬みたいにいきたった吾輩の思考は、このとてつもなく大がかりなペテン、地平線のかなたにまで広がっている粉飾の世界の中で、虚ろな響きをたてる場所をすっかり見つけた。子供たちにはパパゴロシロップがあてがわれ、その後、人格形成のためにイイアラソインとクチゴタエールが、そして火がついた感情の爆発を鎮めるためにオリアインとキョウチョールが与えられる。警察は存在しない。かりに犯罪者がいても、『プロクルステイクス社』が犯罪志向を無害なものにしてくれるのだから、そんなものは必要がないのだ。今まで渴仰薬に手をださずにきたことはよかったと思ってい届。なぜなら、それには慈悲激、良心膏、罪過錠う免罪丸といった信仰布教薬がそっくり調合されていたからだ。それに聖餐カリーを飲めば、たちまち聖者にもなれるのだ。だが、どうしてアララ・イスラミンや仏陀禅剤、涅槃無窮丸、神触錠といった薬がないのだろう？　壊死軟膏、終末座薬を服用すればヨシャパテの谷で最前列に並ぶととができる。いっぽう砂糖に加えた復活剤はそれ以外のことがやれる。陶醉教は実にすばらしい！　信者のための極楽錠、マゾヒスト用のアクマンとイキジゴクール　薬剤院のそばを通りかかったとき、あやうく中へ駆けこみそうになったが、どうにか自分を抑えることができた。そこでは会衆が床にひざまずいて敬慶な祈りをささげており、嗅ぎタバコでも吸うように、イノリンを楽しんでいた。だが吾輩は自制した。健忘剤を飲まされるかもしれないからだ。それだけはおめんだ！　吾輩は、べっとりと汗に濡れた掌でポケットの中のナイフを握りしめて遊園地へ向かった。だが結局なんの体験もできなかつた。と言うのは、座席の保護覆い<sup>カバ</sup>いがとほうもなく固かったからだ　どうやら鋼製<sup>はがね</sup>のようだった。

トロツテルライナー教授が借りている部屋は五番街の近くにあった。約束の時間に行ったのだが、かれは留守だった。だが少し遅れるかもしれないと言って、ドアを開けるのに

必要な笛を渡されていた。だから中へ入って、學術書や原稿で埋まっている教授の机の前に座った。退屈のあまり　　と言うよりはむしろ、心の中では激しい不安を感じていたから、それを抑えるためだったが　　トロツテルライナー教授のノートをのぞきこんだ。遍塵芥、産贈、雄姦、雌姦　.....なるほど、やっこさんは、自己流の風変りな未来学用語を考えだしてリストにしてるってことか..... 胎育、蘇生院、産化学。パースレコホルダー　　というのは　　出産記録保持者　　の意味だろうか？ 爆発的な人口過剰の時代だ、おそらくそうにちがいあるまい。毎秒、八万人の子供が生まれてくるのだ。いや、ひょっとしたら八十万かもしれない。しかし、だからと言ってどんな違いがあるんだ？ 思考医、思患、思相、志想。基本的思想　とはつまり　旗翻的思想　のことで、本想　とは　翻想　のことだ。かれはこんなことしかやっていなかったのだ！

教授、あんたがここに御輿みこしをすえているあいだに、あちらじゃ世界が滅びかかっているんだぞ、と叫びだしたくなった。突然、紙の下でなにかがキラッと光った　アンチパラダイジンの薬瓶だった。一瞬ためらった。だがすぐに腹をきめて、慎重に一嗅ぎし部屋の中を見まわした。

妙だぞ！　ほとんどなんの変化も起らんでもないか！　本棚、処方箋つきの薬剤が載っている棚、なにもかも前のままだった。ただ、鮮やかな光沢を放って部屋を飾っている大きなタイル張りの蒸焼窯だけは、焼けたブリキのパイプがコンクリート壁の穴に伸びていざ、いわゆるダルクマストンダルクマストンに変わっていた。そしてそのそばの床は石炭の燃えがらで黒ずんでいた。吾輩は現場をおさえられたようにあわてて瓶をもとの場所へもどした。玄関で笛の音がして、トロツテルライナー教授が入ってきたからだ。

吾輩はかれに遊園地のことを話した。それを聞いて教授は驚いた。そしてナイフを見せてくれと頼み、うなずくと薬瓶に手をのばしそれを一嗅ぎしてから今度は吾輩に瓶を渡した。吾輩は、自分が持っているのはナイフではなく枯枝の切れ端であることに気がついた。

そこで教授の顔に視線をもどしたいくらい不機嫌そうで、前の日のような自信は見られなかった。会議飴がいっぱい詰まった書類鞆を机の上において溜息をついて、言った。

「泰平くん、今のところなにか特別な背信行為によってマスコンが拡がった原因になっているのではないということを理解してもらわなくてはならん.....」

「拡がる？　それはまたどういう意味だ？」

「まだ一ヵ月か一年前までほ多くのものが現実オリジナルに存在していた。だが、本物がまったく手のとどかないものになってしまうとなると、厩気楼で代用するしかない」かれは説明してくれたが、どうやらなにかほかごとに気をとられていて落ち着きがなかった。

「わしがあのメリーゴーラウンドに乗ったのは三ヵ月前のことだが、今もまだあれが実

在しているかどうか保証のかぎりではない。だが実際に、入場券を買って普及員から一人分のメリーゴーランドールと<sup>ルナバルキン</sup>夢遊園地薬をもらうということはありえる。それが結局のところ合理的でもあり、いちばん節約にもなる。いいかな、泰平くん、人類が現実<sup>ルナバルキン</sup>に所有している実在の領域は、おそるべき速さでどんどん縮小しているんだ。ここで暮すようになる前、わたしはコスタ・リカのニュー・ヒルトン・ホテルにいた。だが正直に言ってあそこじゃ生活することができなかった。それと言うのも、うっかり<sup>ジャッキリン</sup>覚醒剤を飲んで気がついてみたら、自分がせいぜい抽出ぐらいの大きさの小さな部屋にいたのだ。鼻は飼葉桶につこんで影り、水道の蛇口が肋骨を圧迫し、踵は、隣の抽出1と言うことは続き部屋の寝台の枕もとに触れていた。つまり、八階にあるひと月九十ドルのコネクティングルームを借りていたということだ。空間が、ただ空間だけがどんどん小さくなっているのだ。だからヒロクナロ U ルやパシヨヒロゲールといったいわゆる場拡散で実験をやっているのだが、成果はあまりはかばかしくない。つまり、通りや広場に群集がびっしりとひしめきあっても、薬品のためにほんの数人しか人がいないように見えたら、そこに精神化学剤のおかげで良に見えない群集がいることに気がつかず、連中にぶつかってしまうことになる。

それがやっかいなところで、今のところまだ克服できないでいる問題なんだよ！」

「教授、申しわけないが、さっきおたくのノートをのぞかせてもらった。そのことは詫びなくてはならんが、しかしこれはいったいどういう意味だね？」吾輩は<sup>マルチスキゾール</sup>多分裂膠質溶液と<sup>したた</sup>自殖蝟集という単語が認めてあるページを指して言った。

「ああ、それが……立案者に因んでいわゆるヒンテルニゼーション構想と呼ばれている計画があることはきみも知ってのとおりだ。エグベルト・ヒンテルンは、増大している外的空間の不足を精神化学薬品による内的空間　つまり魂の拡大によって補おうとしたのだ。つまり内的空間の容積は物理的にいかなる制約もうけないからだ。おそらく知っていると思うが、ゾオフォルミンを飲むと一時的に亀や蟻、テントウ虫になれる一つまり、なったように感じる。また、プロウラボタニールを使えば、ジャスミンの花にでもなれる。もちろん主観的にすぎんがね。自己の意識が二つ、三つ、四つと分裂することも体験できる。人格の分裂数が二桁の数に達すると、群集効果が得られるのだ。そうなる、それはすでに自我ではなく複我<sup>エゴ</sup>ということになる。つまり単独の肉体に複数の自我が存在しているということだ。そして、精神生活を強化することにより、外界に存在するものより優位にたてるようにするための複我剤もある。ここは、そういう世界であり、そういう時代なんだよ、泰平くん。Omnis est Pillula　つまり、すべては薬なり！　というわけだ。<sup>ファルマコベータ</sup>薬局方が、今では<sup>ふみ</sup>生命の書であり、実用百科事典であり、すべてなんだよ。現実<sup>ルナバルキン</sup>に目で見れるような激変はなにも起りはしない。なぜなら、すでにわれわれはレポル

タールやグリセリン座薬の抵抗軟膏やカゲキハセキグリンを飲んでいるからだ。きみのよく知っているホプキンス博士をしてみるがいい。かれはソドマストールとゴモラミンをさかんに売りこんでいる。それを飲むと望むがままに、いくつでも都市を個人的に天の業火で焼き払う宅とができるそうだ。全能の神になりたいければ、七十五セント払えばそれも可能だ」

「人をむず痒くするのが最も新しい芸術だ」吾輩が言った。「ウアスコチアンの<sup>スケルツォ</sup>諧謔曲を聞いたが、つまり感じたということだが、美的観点から言うとあんまり効果があるとは言えん。見当違いのところまで笑ってしまったよ」

「そうだと、あれはわれわれのための芸術じゃない。他の時代から来た解凍者、時代遅れの連中のためのものだ」トロツテルライナー教授は憂鬱そうに同意した。だが、自制するかのように咳払いをし、吾輩の目を見詰めて言った。

「泰平くん、目下未来学会議が開かれている。人類の来たるべき姿を討議しているのだ。つまり第七十六回世界大会というわけだ。わしは今日、その第一回組織準備委員会に出席した。そこできみにその印象を話したいんだ……」

「妙だなあ」吾輩が言った。「かなり注意深く新聞に目を通したが、どこにもその会議のことに触れた記事は見あたらなかったぞ」

「秘密会議だからだ。きっとわかってくれると思うが、他の案件の合間にマスコン問題を討議しなくてはならなかったのだ！」

「それはどういうことだ？ なにかまずいことでも？」

「そうだ、ひどくまずい！」教授が力をこめて言った。「これ以上悪くなりようがないくらいにな！」

「昨日とはまったく調子がちがうじゃないか。あんなに景気のいいことを言っていたのに」

「たしかにそのとおりだ。だがわたしの立場を考えてもらいたい。いちばん新しい状況をたったいま知ったばかりなんだ。今日わたしが聞いたことを話せば、自分で納得がいくはずだ」

かれは暫定報告の棒飴の大きな束を書類鞆からとりだし、色とりどりのリボンで縛ると机ごしにそれを吾輩に渡してよこした。

「きみがそれを知る前に、二、三必要なことを説明しておこう。薬物社会とは、潤滑社会をよりどころにした精神化学社会のことだ。それがわれわれの新しい時代のモットーなんだ。もっと簡潔に言えば、幻覚剤による統治形態は、政治的墮落を伴うということだ。だからこそ、とにかく全面軍縮をしなくてはならんのだ」

「だとすれば、いずれにしろどうしてそういうことになったか聞かせてもらいたいもん

だ！」吾輩は叫んだ。

「それは実に簡単なことだ。欠陥商品売りさばけるようにするためにも、品不足のときに商品を手に入れるためにも、買収は役に立つ。サービス行為ももちろん商品になりうる。生産者にとって理想的な状態というのは、代金を受けとっておきながら、その代償としてなにも渡さなくてもよければそれがいちばんいい。思うに、換現が始まったのは嘘八百派と贈賄万能派のスキャンダルからだ。きみも連中のことは耳にしているはずだ」

「たしかに聞いてはいる。しかし、その換現とはどういうことなんだ？」

「文字ど痴りには、解き放つという意味だ。したがって、現実を消すという転義をもつようになったのだ。コンピューターを使って公金を横領するというスキャンダルが起きたとき、いっさいの罪が電算機に転嫁されてしまった。だが実際には、強力なシンジケートと秘密カルテルがからんでいたのだ。要はこの惑星を住めるようにすることだ。人口過剰に対処するのが焦眉の問題だったのだ！ 違うだろうか。大規模な宇宙船団を建造し、土星と天王星の気象と大気を変えなくてはならなかった。ところがそれをもっぱら書類の上だけでやるほうはるかに楽だったというわけだ」

「しかしそれはたちまち暴露されたはずだが」吾輩はびっくりした。

「とんでもない。客観的に見て予測できなかったやっかいなことや、それまでわからなかった問題、障害が起り、資金の新たな借入れや出費が必要となった。たとえば天王星計画にはこれまでもすでに九千八百万億ドルの金が注ぎこまれているというのに、未だに石ひとつ動かせるかどうかすら見通しが立っていないのだ」

「で、監督委員会はどうしているんだ？」

「委員会の構成メンバーは宇宙飛行士じゃないし、訓練を受けていない者が他の惑星へ出かけることはできん。だから全権を委任した代理を送るしかなかったのだ。ところが連中は提出された資料のリストにたよって写真を撮ったり統計データを作ったというわけだ。だから、その気になれば書類や記録を偽造することもできたし、マスコンを使えばもっと楽にごまかすこともできたのだ」

「なんてことだ！」

「まったくだ。これは想像だが、同様の方法でもっと早くから見せかけの軍縮が始まっていたんだろう。政府から注文をうけている私企業は、利潤をあげることにしか関心が無い。巨額の金を受けとっていながらなにもやらなかったのだ。つまり、たしかに連中はレーザー砲やロケット打ち上げ装置、対・対・対 t 対弾道ミサイル(六世代多弾頭を備えていたからだ)、いわゆる空飛ぶ要塞と呼ばれる飛行戦車を生産したにはした。だがそんなものは全部夢でみる餅みたいなものだ」

「えっ？ もう一度」



「絵空ごと、幻覚だと言っているんだ。きみだってキノコドロップを持っていたら、本物の核実験なんかやるわけがなかろう？」

「それはどういう意味だ？」

「そいつをしゃぶれば、原爆が爆発したときに出来る茸雲が見られるということだ。とにかくすべてがその調子だったのだ。言うなれば連鎖作用みたいなもんだ。どうやって兵隊を訓練すると思う？ 兵隊たちは動員されると軍事教練剤が配られる。指揮官や将校を教育する必要もない 戦略散、將軍膏、戦術丸、勲章剤があるからだ。“將軍になるなら粉薬にまさるクラウゼヴィツ\*<sup>3</sup>なし。”この諺を聞いたことがあるだろう？」

「いいや」

「そういう薬のリストは機密扱いになっているし、少なくとも市販されていないから無理もない。降下部隊をどこかへ送りこむ必要もまったくない 紛争地帯へ然るべきマスコンを散布するだけでことたりる。そうすれば、その住民たちは落下傘で降りてくる戦闘部隊や海兵隊、戦車を見ることになるのだ 現在本物の戦車一台のコストはほぼ百万ドルはするが、幻覚剤であれば、一幻想あたり つまり戦車部隊を一度目撃するのに百分の一セントですむ。戦艦のコストは四分の一セントだ。今では合衆国の兵器庫がまるごとそっくりトラック一台に積みこめる。タンクニンもウチジンもバクダンニンも、錠剤や水薬、ガスだからだ。どうやらあそこには火星人の大侵略まであるようだ 然るべく調査した粉薬としてだが」

「マスコンでどんなことでもできるということか？」

「まずたいいのことはできる それにだ、実際の軍隊が不用になってしまった。飛行機がほんの数機残っているだけだ。だがそれだってあやしいもんだ。どうしてそんなものが必要だ？ これが連鎖反応みたいなものだという事はわかるだろう？ 止めることができんのだ。ま、それが全面的な軍備撤廃の真相さ。とにかくただの軍備撤廃なんかじゃない。キャデラック、ダッジ、シボレーなんかの新型車を見たらう？」

「もちろんだ、実にすばらしい」

教授は吾輩に薬瓶を渡してよこした。

「ま、窓のところへ行ってそのすばらしい自動車をよく見てみるがいい」

吾輩は窓から体をのりだした。十一階から見おろし充通りは谷問のようで、その底をフロントガラスと磨きあげた屋根に太陽の光線を反射させて、ぎらぎら輝く川の流れのように車が走っていた。小瓶の栓をとってそれを鼻に近づけると目がチクチクしてまばたかすにはいられなかった。涙をぬぐってから、異常な光景を眺めた。ドライバーの真似をして遊んでいる子供たちのように、『なにもない空間に胸の高さまで腕を持ち上げて、ビジネ

\*<sup>3</sup> 十八～十九正規のプロイセンの將軍。軍事思想家。



スマンたちが車道を列を作って走っていた。かれらはせっかちに足を交互に踏み替え、まるで深々と座席にもたれるかのように腰から上をうしろへそらしていた。ぎっしりと詰まったその列の中へときたま、孤独な自動車が排気ガスを吐きだしながら現われることがあった。薬の効き目が弱まると情景がゆらゆらと揺れはじめ、くずれてしまった。するとふたたび白、黄、エメラルドと色とりどりの自動車の屋根が、きらきら輝く川のようにマンハッタンを滔々と流れているのが上から見えた。

「悪夢だ！」吾輩は嫌悪をこめて言った。「だがそれでもとにかく *pax orbi et urbi* は車と都市の平安ヤヤは確保されている。と言うことは、それはそれで価値があるのかもしれない」

「そうさ。なにも悪いことばかりじゃない。心筋梗塞になる人間がうんと減ったのも、ああして長距離を駆けるのがいい運動になっているからだ。いっぽう、肺気腫、静脈瘤、心臓肥大に苦しむ者もふえている。だれもかれもがマラソンに耐えられるわけじゃないからな」

「だからおたくは自動車を持っていないのだな！」吾輩は察しのいいところを見せた。だが教授はただ苦笑いをしただけだった。

「現在、車の値段は中クラスでたかだか四百五十ドル程度だ。だが、薬の生産コストが約八分の一セントだということを考えたら、それはべらぼうな額だ。なにか現実に存在するものを作っている人間はかぞえるほどしかない。たいへんな稀少価値だ。作曲家たちは報酬を受けとり、依頼者にリベートを支払う。ところがフィルハーモニーへ音楽を聴きに来る聴衆はポリシンフォニール・コンサートゾルをこっそりと嗅ぐのだ」

「そんなことは道徳的に言って我慢がならん」吾輩が言った。「だが社会的尺度から見ればたいして害にはならないだろうが……」

「さしあたってはそういうことだ　まだ害は現われていない。もっともそれをどう評価するかは観点いかんによるがね。たとえば、メタモルフィンを服用すれば、山羊をミロのヴィーナスだと思ひこんで、それとなににすることもできるのだ。学術論文や討議の代りに会議剤や脱会議錠がある。だが、虚構ではカバーできん必要最小限の生命を維持するものがなくてはならん。実際にどこかの場所に住み、なにかを食べ、呼吸する必要がある。ところがその一方で、顕現　がつぎつぎと現実の活動領域を侵食している。それだけじゃない。副次的なおそるべき徴候も揃っている。だから、脱幻覚薬やネオスーパーマスコン、幻覚凝結剤が　効用に疑問はあるが　必要となってきたのだ」

「それはいったいどういう薬なんだ？」

「脱幻覚薬というのは、これを飲むと幻覚など見ていないという幻覚を生み出す新薬だ。さしあたって精神病患者だけにしか与えられていないが、自分が影かかっている環境の信慧

性に疑問をもっている者の数が急激に増えている。健忘剤や忘却剤がそうした重幻現象には効かなくなっているのだ。それは、副次的な、言うなれば二重にかさなった幻覚のことだということはわかるだろう？ そう、たとえば、自分はなにも夢など見ていないと、夢の中で思っていると、夢に見ているようなものだあるいはその逆でもいいが、つまりこれが、いわゆる多層、もしくはn層精神病と呼ばれている、現代精神医学の典型的な問題点だ。だがいちばん始末が悪いのは、マスコンの新薬だ。この薬の影響を過度にこむると体に欠陥が生じる。つまり髪が抜け落ち、耳が角<sup>つの</sup>になり、それにふたたび尻尾が退化して消失する……」

「それを言うんだつたら、生えてくるだろう」

「いや、退化だ。三十年前からこの連中はだれも尻尾をもっているからな。それは習字法剤のせいだ。字を素早く書く方法を習得するための代償が尻尾だったというわけだ」

「そんな馬鹿な！ 海岸へ行ったが、尻尾を生やした者などいなかったぞ！」

「子供みたいなことを言うな。当然、尻尾は抗尾剤で隠しているのさ。しかもその薬は爪を黒くし、歯をがたがたにってしまう」

「それも薬で隠しているのか？」

「もちろんだ、マスコンは一ミリリグラム服用すれば効果がある。ところが、積み積んでだれもが一年間でおよそ百九十キログラムのマスコンを飲んでいるのだ。家具調度品、食料、飲料、子供の世話、丁重な公務員、レンブラントの所有者、ポケットナイフ、海外旅行、宇宙飛行、その他数かぎりないものに自分になりきらなくてはならないことを考えれば、ぼくだいな消費量になることは容易に理解できるはずだ。もし医師が守らなくてはならない職業上の秘密というやつがなければ、ニューヨークの次の代の住民たちの体に斑点が現われ、背中が長く伸びた剛毛に詣おわれ、耳に刺が生え、偏平足で、絶えず走っているために心臓は肥大し、肺気腫にかかることがわかるはずだ。こうしたことは全部隠しておかなくてはならん。そしてまさにそのためにネオスーパーマスコンが役にたっているというわけだ」

「それじゃまるで悪夢だ！ 希望もなにもあったもんじゃない、そうだろう？」

「だから、会議で未来が選択できる薬について討議することになっているのだ。専門家のあいだでは、抜本的な改革が必要だという意見が一般的だ。現在われわれの手許に提出されている計<sup>プロジェクト</sup>画案は十八種類にのぼる」

「世界救済計画だな？」

「ま、そう呼んでもいいだろう。とにかく座って、この資料を舐めてみたらどうだ。ぜひそうしてほしい。これはわしの頼みでもあるのだ。微妙な問題だからな」

「おたくが頼むというんならやってみよう」

「そう言ってくれると思ったよ。ご覧のと診り、シャッキリン系の覚醒剤から新たに合成した二種類の薬品のサンプルを同僚の化学者から受けとった。今朝がた、この手紙といっしょに郵送されてきたのだ」と言って、トロツテルライナー教授は机の上から一通の手紙をとりあげた。「これに、この薬は　つまり今きみも飲んだ錠剤のことだが　本物の覚醒剤ではない、と書いてある。書いてあるとおりに読むところだ　“連邦精形管理局(つまり 精神化学形成 のことだ)は、多くの恐慌現象から 現実在者 たちの注意をそらさんがために、かれらにネオマスコンを含んだ抗夢性の、模造薬を故意かつ悪意をもて与える”」

「そいつは納得がいかん。だってそうだろうが、おたくがくれた薬をわたしは自分で試したんだ。それにその現実在者とは、なんのことだ？」

「ああそれが、社会的に地位が高い者のことだ。ついでだから言うておくが、わたしもその一人だよ。現実在とは、物事が実際に存在しているあるがままの状態に固定する目的で覚醒剤を自由に使用できる権利と可能性のことだ。だれかが実際の状態を知っていなくてはならんからな。それは当然のことじゃないのか？」

「それはそうだ」

「ところで薬のことだが、同僚の権測では、この薬品はたしかに、かなり前に製造され、古くから使われているマスコンであれば、その影響力を消すことができるが、あらゆる種類をすっかり無効にするわけにはいかんらしい　ことにごく新しいマスコンがむつかしいそうだ。ま、そんなわけでこいつは　」と言って教授は瓶をとりあげた。「覚醒剤ではなく、いいかげんに調合されたマスコン、ごまかし用の偽覚醒剤、つまり羊の皮をかぶった狼なのかもしれんのだ！」

「しかし、どうしてそんなことを？　もしだれかが知っている必要があるんだとしたら……」

「一般的な意味でその必要があるのは、広く社会的視野で充分考えることができる立場からであって、さまざまな政治家、法人、あるいは連邦の出先機関でもいいが、そういった個々の部分的利益の視点からではない。われわれ現実在者が気がついている以上に事態が悪化しているのであれば、警鐘など打ち鳴らさないで、むしろ簡単に薬が手に入るようにするほうを選ぶ。それは、空巣が入っても、簡単に隠し場所が見つかるように、いかにももっともらしい古い家具などを利用する、昔からあるトリックだ　つまり、泥棒が最初に見つけた隠し場所に満足し、それ以上、本物のもっと巧妙にカムフラージュした場所を探しだそうという気を起させないやりかたに似ている」

「なるほど。よくわかった。で、わたしにいったいなにを望んでいるんだ？」

「この資料をよく理解したら、目まずこの瓶を嗅ぎ、つぎにこっちのを嗅いでもらいた

いのだ。実を言うと、わたしはそうする勇気がないんだよ」

「たったそれだけのことか？ おやすいごようだ」

吾輩は教授から二本のガラス瓶を受けとって椅子に腰掛けると、郵送されてきた未来学の要約論文をつぎつぎと吸収しはじめた。最初の計画は、あらゆる感覚を百八十度ひっくり返してしまう薬品である逆転剤を一十トン大気に加わえることによって状態が正常に復すことを見込んでいた。第一段階として薬品を散布すると、快適さや満腹感、そしてうまい食べ物や美的対象、清潔なもの、そうしたいっさいのものがことごとくいとわしくなる。それに反して、雑踏や貧困、醜悪、欠乏がなににもまして熱望されるようになる。第二段階ではあらゆる種類のマスコンとネオマスコンの作用が徹底的にとりのぞかれる。そとでやっと、それまで秘密の ベールにつつまれていた 現実に直面した社会は、完全な満足を味わうことになる。なぜなら、万人が渴望しているものが目の前にあるからだ。ひょっとすると最初は(生活条件を悪くする)悪化剤を多少効かせるぐらいにしたほうがいいのかもしれん。だが、逆転剤はいっきいの例外なくあらゆる感覚に作用するから、性愛の楽しみもいとわしいものになってしまい、おかげで人類は滅亡の危機に壽びやかされることになる。だから年に一度、二十四時間のあいだ一時的に抗薬品剤を飲んで、逆転剤の作用を麻痺させる必要がある。だがその日は、発作的な自殺騒ぎがやたら起ることはさげられない。だが同時に始まる自然出産率がそれを上まわるから、埋め合せがつくのだ。

吾輩がその計画にすっかり魅了されてしまったとは言わない。だがこの一点だけは極めて明白だった。つまり、現実在者の一人として、立案者は間違いなく常に抗薬品剤の影響下にあり、そのためにいたるところで貧困や醜悪、生活のおぞましさをや退屈さを見ても、特に楽しくもなんともなかったと言っていることだ。第二案は、一万トンの<sup>レトロテンボリン</sup>逆時薬を川と海の水に溶かすことを考えていた。その薬は主観的な味間の流れを逆行させるのだ。したがって生活はつぎのような様相を呈することになる人間はよぼよぼの老人の姿でこの世に生まれ、赤ん坊となってこの世を去る。このプロジェクトは、そういう方法で人間的条件の主要な障害、つまり老化と死というだれにとっても避けられない先ゆきの展望をとりのぞけるはずだと強調していた。すべての老人は時の経過とともにどんどん若くなり、体力と気力をましていく。未成年に達し本職としての仕事をやめたあとは、祝福された子供の国へ入る。この案の眼目は、その人間味あふれるところにある。そしてそのよってきたる<sup>ゆえん</sup>所以は、生命のあるものは例外なく死ぬ運命にあるということをまったく知らない点だ』そうした無知は、幼児期に特有のものだ。現実には 要するに時間が逆行しているのはまったく主観的なことだから 老人たちを幼稚園や保育所、分娩室に連れていかなくてはならない。だがこの案には、そのあとかれらをどうするべきかと矯う点にはっきり

触れて恥ない。ただ、いわゆる国営極楽往生院でしかるべき治療が行なわれるだろうと、一般的なことを述べているにすぎない。この計画を知ってみると、前の第一案もけっして悪くはないように思えてきた。

第三案はかなり遠大ではるかに徹底しており、体外発生と義肢補綴法、普遍的遠隔受想をめざしていた。人間には、脳脊髄硬膜体で優雅に包まれた脳しか残らない。つまり、クラッチやソケット、プラグなどがくっついた一種の球体である。核エネルギーによる新陳代謝が必要であり、それとの関連で、栄養物の摂取が もっとも肉体的には不要であったが もっぱら、しかるべくプログラミングされた夢の中だけで行なわれる。その脳球はどんな四肢、装置、機械、媒介物とでも結合できるらしい。その器官分離化の過程は、二十年間かかって拡がることになった。最初の十年で、器官の取り外しが強引に行なわれ、余計な器官は家へ置いて外出するようになるのだ。たとえば、交接器や排便管は戸棚の中に吊してから、芝居見物にでかけるのだ。つづく十年間で、遠隔受想法が、それまでいたところで見かけた雑踏 人口過剰の結果 をきれいさっぱりと一掃してくれるはずであった。つまり、有線、無線を問わず、脳間通信回路ができるおかげで、ありとあらゆる交通、巡回会議、出張、必ず旅に結びつく会合が不要になる。したがってだれもが個人的にどこへでもでかけられるようになる。と言うことはつまり、人類が支配している全域で、どんなに遠い惑星であろうと、だれもが同じように送信器を自由に使用できるようになるからだ。また、大量生産方式で腸器や偽装器、肉茎器、あるいは、普通の鉄道路線を市場に供給することになっていた。この鉄道というのは、脳が気晴らしに自分で転がっていける、自家用路線のレールのようなものことだ。ここまで読んで、吾輩は論文の執筆者たちがきつと気が狂っているにちがいあるまいと思った。すると、トロツテルライナー教授はそっけなく、結論を急ぎすぎると答えた。やりかけたことだから、最後までやるしかなかった。まともな理性の規準ではとてもじゃないが絶対に人類の歴史に合うものではない。イブン・ルシュド\*4、カント、ソクラテス、ニュートン、ヴォルテールは、二十世紀になったら車輪がついたブリキの箱が都市の悩みの種、肺の毒殺者、大量殺人者、崇拜の対象となり、人間が、家でなにごともなく平穩にすごすより、われもわれもと 週末<sup>ワイークエンド</sup>の旅行にでかけ、その途中で車の中で命を落とすほうをよろこんで選ぶようになるなどということ信じられたらうか？ 吾輩は、教授にこれらの案のうちどれを支持するつもりなのか尋ねた。

「まだきめていない。だがいちばん深刻なのは、秘産問題 つまり非合法の出産の問題だと思う。それだけではない、会議の進行中に精神化学陰謀がたくらまれそうで、それが心配だ」

\*4 一一二六・九十八。西方イスラム世界の哲学者、科学者、医者。ラテン名をアヴェロスという。



「と言うと？」

「タブラカシンを使ってある計画が採択されるかもしれんのだ」

「薬品を吹きかけられると思っているのか？」

「そういうことが起らんとは断言できんだろう全換気装置から議場へガスを撒くことくらい簡単なことはないんじゃないかな？」

「しかし決議されたことがなにもかも社会にうけいられるとはかぎらんだろう。人は押しつけられたものをなんでも受け入れるほど甘くはないぞ」

「いいか、きみ。文化はここ半世紀というものはや華々しく発展して影らんのだよ。二十世紀にはディオールとかいう男が人にファッションを押しつけていた。ところが今は、そうした統制が生活の全領域に広がっている。器官分離法が多数決で採択されるようなことにでもなったら、数年を待たずして人は自分がやわらかくて毛深い、汗をよくかく体を持っていることが恥でありみだらなことだと思えるようになる。人体は洗ったり臭いを滑したり手入れをしなくてはならん。ところがそれでもこわれてし喜ぶ。ところが器官脱着時代がくれば、技術が生みだした最高の奇蹟ともいべき芸術品をとりつけることができるようになるのだ。目の代りに<sup>ようそ</sup>沃素、双眼鏡のように突きでた胸、天使のような翼、光を放つふくらはぎ、足を踏みだすたびに旋律を奏でる踵をほしがらん娘がいるだろうか？」

「わたしめ言うことを聞いてくれ。ここから逃げだそう。酸素と食料を手に入れて、ロッキー山脈にでも隠れよう。ヒルトン・ホテルの下水道のことは覚えているだろう？ あそこだって悪くはない、そうだろう？」

「本気でそんなことを言っているのか？」ためらっているような口ぶりで教授が言った。

思慮がなかったと言われればそれまでだが、ついうっかり瓶を鼻のところへ持って行ってしまった。ずっと手に持っていたのに、それを忘れていたのだ。あまりにも臭いが強くて涙が噴きだし、たてつづけにくしゃみを連発した。ふたたび目を開くと、部屋の様子が一変していた。教授はまだ喋っていたし（その声は聞こえていたが、変化に心をうばわれていたから、かれが言っていることはひとことも理解できなかった。壁はすっかり汚れていた。それまで紺碧だった空は焦茶色になっていた。いくつかの窓ガラスは割れて塵り、残りは脂じみた煤でおおわれ、雨が流れた跡が灰色の筋になって残っていた。

なぜだか理由はわからないが、教授が会議の資料を入れてきた、格好のいいブリーフケースが黴だらけの袋になっているのを見て、背筋がぞっとした。体が麻痺し、それを見ているのがこわくなった。机の下をちらっと盗み見した。外出用のズボンと教授の短靴の代りにそこにはさりげなく足を組んだ義足が見えた。針金製の腱のあいだに砂利と通りのごみのはさまっている足の裏も目に入った。踵の、鋼鉄製のボルトが、さんざん使ってつ



るつるになるまで擦りへって、光っていた。吾輩は思わずうめき声をあげた。

「どうした、頭痛がするの？ 頓服薬があるぞ」思いやりのある声が聞こえた。歯を食いしばって吾輩は目をあけた。

かれには顔らしいところがほとんど残っていなかった。落ちくぼんだ頬に、もう長いこと取り変えていない腐りかかった包帯の切れ端がへばりついている。もちろんまだ眼鏡はかけていた。だが片方のレンズにはひびが入っている。気管切開手術のときできた首のところの穴に、かなりいいかげんに差しこんだ発声器が突きだしており、声をだすのにあわせてぴくぴく動いていた。上着は、微の生えたぼろきれになって胸板にぶらさがっていた。そのぼろきれの左側が裂けて穴ができており、曇ったプラスチックの窓ガラスで塞いであったクリップで留め、縫い目がある青みがかかった灰色の心臓が痙攣を起したように鼓動を打っていた。左手は見えなかったが、鉛筆を握っている右手は真鍮で補綴された義手で、緑青でみどり色をしている。襟には薄い木綿の布が縫いつけてあり、それに黒い墨で調管 二九八五九/一二 移植 廃棄度 5 と書いてある。吾輩は目を見張った。今度は教授が鏡に映したように吾輩の恐怖に感染し、机のむこうで不意に体をこわばらせたからだ。

「おい、どうしたんだ？ ……さてはわたしが変身したな？ そうだろう？ どうなんだ？」

かすれた声でかれが言った。

席をたった記憶はなかったが、気がついてみるとドアのところでノブと格闘していた。

「おい！ きみ、どうしたんだ？ なにをやっている！ もどってくるんだ、泰平くん！」

教授は絶望的な叫び声をあげ、懸命に立ちあがろうとしていた。不意にドアが開いた。と同時にものすごい轟音がとどろきわたった。それは、トロツテルライナー教授があまりにも急激に動いたためバランスを失って倒れ、針金でつないだ骨が床にぶつかってたてた音だった。絶望的に足をぼたぼたやり、ちぎれた釘だらけの踵が寄せ木細工の床をめちゃくちゃに蹴って木端を飛び散らかし、ひっかき傷だらけのプラスチックガラスの中で灰色の袋に入った心臓が激しく鼓動を打っている光景が目にとびこんできた。吾輩はエウメニデス復讐の女神たちに追われているように、廊下を逃げた。

建物の中は人でごったがえしていた。昼食時間にぶつかったのだ。事務所からでてきた事務員や秘書たちがおしゃべりをしながらエレベーターのほうへ歩いていた。吾輩は開いているエレベーターの扉のところまで人ごみの中に割りこんだ。だがまだエレベーターは来ていなかった。だから穴の中をのぞきこんでみて、なぜ息切れがごくあたりまえの現象なのか、そのわけが理解できた。ずいぶん前に切れてしまったワイヤーの端がたるんでぶらさがっており、穴の内側に張りめぐらしてある垂直にたれさがった網をだれもが猿のよ

うに巧みによじのぼっていた。あきらかにそれは長期にわたって身につけた習練のたまものであることを証明していた。かれらは喫茶店の屋根の上をうろつきながら、額に流れている玉のような汗などまるで意に介さずにさかんに喋っていた。吾輩はゆっくりとうしろへさがると、忍耐強い連中がロッククライミングの真似ごとをやっているエレベーターの坑道のまわりを螺旋状にとりまいている階段を一目散に駆けおりた。数階駆けおりてからやっと足をゆるめた。どの部屋のドアからもまだどんどん人がでてきた。そこにはほとんど事務所しかなかった。コンクリートの壁が切れているところに、通りに突きだした窓が開いており明りが射しこんでいた。そのそばで立ちどまると、服装を直すふりをして下をのぞきこんだ。最初は歩道の雑踏の中に人など一人もいないように思えた。だが、それは通行入を識別できなかったからにすぎない。一般的な意味での華麗さはあとかたもなく消えうせてしまっていた。通行人は一人ずつばらばらか、二人連れで歩いていた。例外なく穴のあいたぼろ服を着、たいがいの連中が紙の包帯をし、下着しか身につけていなかった。だから、本当にかれらの体がしみだらけで剛毛が生えており、ことに背中にそれが著しいことが確認できた。中にはなにか緊急の用をかたづけるためにたった今病院から出てきたばかりだと見うけられるものも何人かいた。足のない連中が大きな声で喋ったり笑ったりしながら、小さな車がついた板に乗ってそれを手でこいでいたからだ。ほかにもまだ目についたものがある　しわだらけの象のような耳をした女、角を生やした男、優雅な身のこなしで泰然自若と人が身につけている古新聞、藁の束、麻袋などだ。もっと元気で健康な連中は車道を全速で走り、ときどき足をばたばたやっ、まるでクラッチを踏んでスピードを変えるような真似をしていた。ロボットたちは人ごみの中にも、拡散器や放射量計測器、噴霧器をもっていたからよく目についたし、数も多かった。かれらの仕事は、人間たちが適量以上のエアゾールを摂取することがないように気を配ることだった。人間たちはほうっておくと際限がなかったからだ。若いカップルが腕を組んで女のほうは背中に鱗うろこが生えており、男のほうは吹出物ができていた　歩いていくうしろから、算術機械じょうろくがのろのろとついて行き、恋人たちの頭を拡散如露じょうろで拍子よく叩いていた。歯ががちがち鳴っているというのに二人はまるでそれに気づいていなかった。どういうつもりでそんなことをするのだろうか？　だがじっくり考えていることはできなかった。窓枠をしっかりとつかんで、入がごったがえし、走りまわり、活気にあふれた通りの光景を眺めた。自分がただ一人の目撃者、一対の目そのものになったように本当にそうだろうか？　その残酷な光景は、別の観察者、それを作った者に見てもらうことを要求しているように思えた。作った当事者であればこの風俗画になんの感情も動かさず、幸福な腐敗バトロソの保護者としてこれに意味が与えられるかもしれないからだ。つまり、震えあがるような恐ろしい意味づけであろうと、とにかくなにか意味をあたえるはずだ。ちっぽけなミニハンランピュー

ターが上品な老婆の足許で騒々しくはねまわり、彼女の膝を繰り返し繰り返し切り取っていた。するとそのたびに彼女は体ごともろにひっくり返るが、また立ちあがって歩きつづける。だがまた倒される。それを繰り返しながらかれらは姿を消した。ミニハンラコンピュータはいかにも機械らしくしぶとかったが、老婆のほうも達者なもので、自信満々としていた。たいがいのロボットは人間のすぐそばに近寄って、スプレィ療法の効果があったかどうか口の中をのぞきこんでたしかめていたが、だれもそれに気づく者はいなかった。町角にはポーソーボットやヒコーボットがむらがっており、交替時間がくるとあちこちの脇の出入口からサラリーボットやオーエルピューター、パカボット、ミニコンボットがあふれだす。巨大なゴミシヨリボークが車道を滑るように走ってくると、パワーシャベルの先端に触れるものはなんでもてあたりしだいに<sup>すく</sup>掬いあげ、ロボットのスクラップもるとも老婆も塵芥処理機の中へ拗りこんでしまった。吾輩は自分の指を噛んだ。まだ手つかずのもう一本の薬瓶を持っていることをすっかり失念していたからだ。たちまち喉が火で焼かれたようにひりひりした。あたりが揺れはじめ、明るいもやに包まれた。それは見えない手で目から曇りをゆっくりととりのぞかれていくような感じだった、体をこわばらせて、進行しつつある変化を眺めながら、ぞっとするような恐ろしい予感に診びえた。いまに現実の殻がひとりでに剥がれて別の層が現われてくるぞと思った。そうした欺隔はおそらく思いだせないほど古くから進行していたにちがいない。そして、さらに覆いをひっぱがし、もっと深いところまで達することができるのはいちばん強力な薬しかないとも思った。だがそれでも真実には到達しないだろう。さらに明るくなったあたりは真白だ。歩道に雪が積もっており、こちこちに凍りつき、おびたしい足で踏み固められていた。町の様子は、荒涼とした冬景色を呈していたし、けぼけぼしい商品も消え失せ、どの窓もガラスの代りに、すっかり朽ちはてた板が十字に打ちつけてあった。雨漏りがする汚れた建物のあいだを冬が君臨し、軒や街灯からカーテンのようにつるつるした氷柱がさがり、張りつめた空気にはき鼻を刺す強い悪臭とへ頭上の空と同じような色をした青いもやがただよっていた。壁ぎわのよごれた雪の小山から、ごみくずがからみ合って顔を出しており、そてかしこに、まるで大きな包のように、棒きれが黒ずんだ山になって積みあげてあり、切れ月なく続く歩行者の波がそれをわきへ押しやり、錆びついた容器や缶、凍りついたおがくずのあいだへ蹴りこむ。雪は降っていなかった。だが前には降っていたし、ふたたび降ってくることはわかっていた。突然、町から消えうせてしまったものがあることに気づいた。ロボットだ。一体もいなかった。ただの一体もだ！ 雪をかぶった体が共同住宅のあたりに汚れて転がっていた。息絶えた鉄の残骸がぼろをまとった人間や、雪をかぶった黄ぼんだ骨がのぞいているぼろきれにまじって転がっていた。ぼろを着た男が一人、雪の山の上に寝そべっていた。それはまるで羽根蒲団にでもくるまっているような格

好をして寝ており、すっかり満足しきった表情をうかべていた。自分の家でベッドに横たわり、のうのうと体をのぼしているみたいに、素足で雪をほじくり返していた。たしかに厳寒であることはまちがいがなかった。だが実に奇妙なあたたかい陽気が、ときどき遠くから町の中心部まで押し寄せてきて、正午になると太陽が照りつけた。かれはすでにぐっすりと眠っていた。つまりそんな具合だったのだ。多くの人間がかれをまったく無視して通りすぎていった。めいめいが自分のことで忙しかったからだ。他の者に薬を吹きかけているものもいたし、人の仕種や態度を見れば、だれが自分のことを人間だと思ひ、だれがロボットだと思っているのか、すぐに識別できた。つまりは、ロボットも見せかけにすぎんということだろうか？ それに夏の真盛りに冬とはどういうことだ。暦は全部、暦気楼なのか？ しかし、なぜだ？ 雪の中で眠るのは、出産率をさげるためだろうか？

しかしこれはいずれにしろだれかが慎重にたくらんだことにちがいない。それをつきとめない前にあきらめるべきだろうか？ 窓ガラスが叩き割れた摩天楼のしみだらけの外壁に目を移した。背後はしんと静まり返っている。昼休みの時間が終わったからだ。通りは

これが吾輩に残されたすべてであり、目に映るものなどなんの値打ちもなかった。群集に飲みこまれてしまうべきだったかもしれない。吾輩にはだれかが必要だった。だが、できることはただか一人でしばらくのあいだ鼠のように隠れていることだった。吾輩はすでに幻覚からはみだしていた。ということは荒涼たる砂漠の中にいたからだ。恐怖と絶望に襲われて窓ぎわから身をひいたが、いかんせん骨の髄まで冷えきっているのを感じた。それはすでにあたたかい太陽の幻想で保護されていなかったからだ。こっそりとできるだけ足音をたてないようにして歩いていたが、自分でもどこへ向かっているのかわからなかった。そうだ、吾輩は自分の存在を隠したのだ。背をまるめ、首をすくめ、素早く左右に目を走らせ、立ちどまり、聴き耳をたてる。どう決断をくだすにしろ、まだ腹がきまっていない前に、反射作用が吾輩にこっそり耳打ちをした。だが、吾輩がなにを見ているかは顔にでているし、そのむくいをうけないで逃げることはできないことは、骨の髄まで感じていた。六階かあるいは五階の廊下を歩いていたが、トロツテルライナー教授のところへ戻ることはできなかった。かれは助けを必要としていたが、これでは手を貸してやれそうになかった。せっかちにいっぺんにいくつものことを考えた。だがまずいちばん気になったことは、薬の効き目が切れても、あのすばらしい理想郷<sup>アルカディア</sup>へ戻れるだろうかということだった。ところが驚いたことに、その見通しにたいして、ただ嫌悪と恐怖しか感じなかった。ただそれだけだったのだ。まるで、幻によるやすらぎにおぶさるよりも、ごみくずの山に埋れてごえるということがどういうことかわかっているが、むしろそのほうがましだと思っているみたいだ。脇の通路へ入ることができなかった。だれか老人の体で道が塞がれていたからだ。かれは歩く力がなかったから、ぶるぶる震える足を動かし

て歩く真似をしながら、断末魔のあえぎといっしょに、かろうじて聞きとれるしゃがれ声をだして吾輩に笑いかけた。だから、吾輩は別の脇道へ入った　そしてやっと事務所らしいところの曇りガラスがはまったドアのところまできた。中は完全な静寂が支配していた。中へ入ると、スウィングドアが揺れた。そこはタイプライター室だった　だがだれもいなかった。奥に、もうひとつ半開きになったドア。のぞきこむとそこは明るい大きな部屋だった。ところが、中にだれかいる気配がしたので逃げだしたくなかったが、そのとき聞き覚えのある声をした。

「入りたまえ、泰平くん」

吾輩は部屋へ入った。まるで待ちかまえていたみたいにそうやって声をかけられてもことさら驚きはしなかった。机のむこうにジョージ・シミグトン氏が座っていたことも冷静にうけいれた。かれは、フランネルのグレーのスーツを着、首に毛のマフラーをまき、口に細い葉巻きをくわえ、鼻の上には眼鏡が載っていた。そして吾輩を見つめているその顔には寛大とも悲哀ともとれない表情をうかべていた。

「座りたまえ」かれが言った。「少々時間をとらせるからな」

吾輩は座った。窓ガラスが一枚も割れていない部屋は、いたるところが荒廃している中でさながらオアシスだった。清潔であたたかかった。どこにも氷が張ったり、雪が吹きだまりになった跡は見あたらなかった。トレイ、湯気をたてているブラックコーヒー、灰皿、インターホン。かれの頭の上の壁には、カラープリントのヌード写真が数枚貼りつけてあった。写真に映っている裸体にはまるっきりできものがないぞと思った。だがどちらかといえばそういう馬鹿げたことを連想したことに自分でもびっくりした。

「まずいことになったもんだ！」かれがいまいましげに言った。「だが、きみは文句を言える筋合じゃない:最高の看護婦、完璧な状態にある唯一の現実在者、だれもかれもが懸命になってきみに力を貸した。ところがどうしたことだ？　きみは自分で眞実をほじくり返そうとしたんだぞ！」

「わたしが？」そのことばに呆然として言った。だが、吾輩が考えをまとめ、かれの言ったことを消化する前に、かれは攻撃をしかけてきた。

「でまかせを言うことだけはやめてもらおう。今さらそんなことをしても遅い。見たところどうやらきみは聞きしにまさる狡賢い男らしい。下水道、ホテルの鼠、乗鼠、鼠に鞍をつける　といった　幻覚　に不満があり疑問を持っていると言いふらしているそうじゃないか！　そういう幼稚な手が使いたいらしいが、作り話が効くと思っているのか？　そういう馬鹿げたことがやれるのは解凍屋ぐらいのもんだ！」

吾輩はぼかんと口をあけてかれが言うことを聞いていた。だがたちまち、どんなに否定してみたところで無駄だということに気がついた。かれは吾輩をまるで信用していないか



らだ。吾輩の正真正銘の妄想を、意識的な策略ととっているのだ　だから、『プロクルステイクス社』の秘密を吾輩に打ち明けたときのあの会話も、吾輩から話を聞きだすためだったにすぎないのだ。あのときかれがああいうことを言ったのは、吾輩を混乱させる目的があったからだ。かれにしてみれば、それが反化学的陰謀を暴露するための合図<sup>サイン</sup>みたいなものだったのではないだろうか？　幻覚にたいする吾輩の個人的な恐怖をかれは戦術的な行動だととったのだ……たしかに、カードを開いてしまった今となっては、いくら釈明してみてももう手遅れだ足りないことは事実だった。

「わたしになにか期待していたのか？」吾輩は尋ねた。

「もちろんだ。先取の気性にとんだおたくの積極性にまかせておくと同時に、こっちが完全にコントロールもしていたのだ。言わば紐つきだったわけだ、おたくは。無責任な反抗で現状の秩序を壽びやかすような真似はさせられんよ」

通路で老人が死にかかっていたが　ちらっと頭を過ぎった　あれも障害の一部であって、吾輩をここへ導くためだったのだ……「なかなか結構な秩序だ」吾輩が言った。「おたくがそのボスということらしいな？　たいしたもんだ」

「あてこすりを言うんなら時と場合を考えるんだ！」かれはすごみのある声で言い返した。

吾輩は首尾よく相手の痛いところを突いたのだ。やつは腹をたてている。

「おたくはずっと魔性の源を探し求めていたようだが、いいかよく聞くんだ、解凍された前世紀の冷凍人……そんなものはありゃしないんだよ。おたくの好奇心を満足させてやろう。いいか、そんなものは存在せんのだ、わかったか？　われわれがこの文明に麻醉をかけたのだ。さもないとモチこたえられんからだ。だから、覚醒させるわけにはいかんだ。おたくにそこへ戻ってもらわなきゃならんのもそういう理由からだ。なにもこわがることはない　痛みがないどころか楽しいくらいだ。それにひきかえこっちははるかに辛い立場だ。万人の幸せのために正気でいなくちゃならんのだからな」

「たいした犠牲的精神だ」吾輩が言った。「よくわかるとも、全体のために犠牲になっていると言いたいんだろうが」

「もしおたくが精神の絶対的自由というものを高く評価しているんだったら」かれはそっけなく言った。「忠告しておくが、そういう人を馬鹿にした態度やあてこすりを言うのはやめるんだな。そういうことをしていると、たちまち自由を失うだけだぞ」

「するとまだなにか言いたいことがあるようだな？　聞かせてもらおう」

「今のところおたくを除いては、ものが見える完全な状態の人間はわたしだけだ！　わたしは顔になにをつけている？」いきなり訊いた。まるで罠にかけようとしているみたいだった。



「サングラスだ」

「つまりわたしと同じことを考えているわけだ」かれが言った。「トロッテルライナーに薬を与えた化学者は、すでに社会の懐へ戻ってしまっている。だからいっさい疑問はもっていない。連中は疑うことができんのだ。そのことはわかるだろう？」

「ちょっと待ってくれ」吾輩が言った。「たしかにあんたにとってそれは重大なことかもしれないが、だからといってこっちがそう確信しているということにはならん。訳のわからん話だがしかし、なぜだ？」

「現実在者は絶対に悪魔なんかじゃないからだ」かれが答えた。「われわれは状況に支配されており、隅っこへ追いやられ、社会的運命が強引にわれわれの手に持たせたトランプでゲームをやっているのだ。われわれはその残された唯一の手段で平穏と好天、安堵をもたらすのだ。われわれがいなかったら、どこにでもある死の苦しみに落ちこんでしまいかねないものを、不安定なバランスを保って支えてやっているのだ。われわれがこの世の最後のアトラスというわけだコだが問題は、どうせ破滅はなくてはならんのなら、少なくともいい思いをしないようにしてやるということだ。真実を変えられないのであれば、それを隠蔽する低かあるまい。それが最後に残されたせめてもの人道的な行為であり、人としての義務というもんだ」

「すると絶対にそれに代る手はないというんだな？」吾輩は尋ねた。

「今年は二〇九八年だ。合法的に登録されている人口だけでも六百九十億、ほかに登録されていない非合法的な住民が二百六十億はいる。年間の平均温度は四度に落ちこんでいる。ここ十五年か二十年で氷河期がやってくるだろう。その進行を阻止することは不可能だし、遅らせることもできんやれることといえば隠すことだけだ」

「前からここはきっと氷地獄にちがいないと気づいていたが、だからあんたがたはその門にきれいな絵を描いているのだな？」

「まさにその通りだ。われわれは最後のサマリヤ人というわけだ。この場所でだれかがおたくにこの話をしなくてはならなかったのだ たまたまそれがわたしだったにすぎん」

「そうか、思いだしたぞ。ecce homo<sup>エツケホモ</sup>\*5ってわけだ！」吾輩が言った。「しかし……待てよ…-問題がわかりかけてきたぞ。要は、終末麻酔医としての自分の任務をわたしに納得させたがっているんだな。パンがなくなればき飢えている連中に麻酔をかけるというわけだ。だがわからんことがある。正気に返ったとたん、なぜまたすぐにそのことをすっかり忘れてしまわなきゃならんのだ？ あんたが使っている手段が正しいんだったら、どうしてそんなに懸命になって論証しようとするんだ？ もし正しいのなら、確証剤を数滴、い

\*5 「見よ、この人なり」新約聖書 19:5。いばらの冠をいただいたキリスト。

や一滴目にたらずだけで、わたしはなにを言われても熱狂的にそれを認めもするし、おたくを崇拜も尊敬もするはずだ。おそらくそういう治療のしかたに価値があると確信がもてないから、古めかしいお喋りや無駄話にたより、散布器スプレーに手をださずに会話で満足しているんだろうが！ 精神化学の勝利が実はありふれたペテンであり、自分が戦場でただ一人、ひどい吐きけに襲われてた勝者のようにとり残されることになるのが、どうやらよくわかっているらしい。おたくはまず最初にわたしを納得させ、そのあとで記憶喪失に陥らせたがっているようだが、そうはそっちの思うようにはいかん。どうだ、その高尚な使命を抱いて、おたくの救世主のような仕事を楽しいものにしてくれる写真の娼婦のような女たちと並んで首を吊ったら。だがあんたにはかたいひげが生えていないから、絶対間違いない古くからある方法を使う必要がある、そうだろう？」

かれは激怒のあまり顔がひきつった。たいへんな剣幕で立ちあがって怒鳴った。

「なににも薬は極楽をみせてくれるものだけとはかぎっていないんだぞ 化学地獄だつてあるんだ！」

吾輩も立ちあがった。かれが机の上のボタンに手を伸ばしたので、「貴様も道づれにしてやる！」と叫んで、かれの喉をめがけてとびかかった。吾輩たちは 思惑どおりはずみで開いている窓のほうへ近づいた。そのとき足音がして、固い手が吾輩をかれから引き離そうとした。かれは身をもがいて足をばたばたやっていたが、そこはすでに窓ぎわだった。相手は吾輩に押されて窓の外へ体を弓なりにそらしていた。吾輩は渾身の力をふりしぼってのしかかった。耳もとで鋭く空気を切る音がして、吾輩たちは体もつれ合ったまま宙返りをうつと、道路が擂鉢状すりばちに激しく回転して迫ってきた 吾輩は覚悟した。激突してぐしゃっと潰れるものと。ところがなんと衝撃は弱く、黒い波が押し寄せ、悪臭を放つ、この上なく幸せな水が厚い層となって吾輩の頭を覆った そしてふたたび水が無くなった。下水道の流れの真中に浮かびあがったのだ。目をこすり、激しく汚水を飲みこんでむせかえった。だが、幸せだった。なんて幸せなんだ！ 吾輩が狂ったようにわめきたてるので、まどろんでいたトロツテルライナー教授が目を覚まし、コンクリートの道路から水の上へ体をのりだし 兄弟の手のように きっちりと固く巻いた蝙蝠傘を差しだしてくれた。誘愛弾による爆撃の音はやんでいた。ヒルトン・ホテルの支配人たちは、し空気でふくらました椅子（だから風船家具というのだ）の上で枕を並べて眠っていたが、秘書たちはその連中にたいしてひどく挑発的な仕種をしていた。ジム・スタンターはいびきをかきながら寝返りをうち、ポケットの中でチョコレートを噛っていた鼠を押し潰してしまった。あの几帳面なスイス人のドリングンバウム教授は、壁ぎわにうずくまって、懐中電灯の黄色っぽい明りで照らしながら自分の報告論文に万年筆で手を入れていた。そうやってかれが熱心に仕事をやっているというのは、未来学会議第二日目の討議が

---

始まる先づれだということに気がつき、大声で笑いだしてしまった。だがあまり声が大きかったので、タイプで打った原稿がかれの手から離れ、バシッと音をたてて黒い水の中へ滑り落ち、流れ去ってしまった　不可解な未来へ。

(一九七〇年十一月)



## 訳者あとがき

本書は題名が示すとおり(ただし、原題には「泰平ヨン」の表示はなく『未来学会議 Kongres futurologiczny』)、「泰平ヨン・シリーズ」のなかの一作で、年代的には『航星日記』と『回想記』に続き、一九七一年に発表された作品である。レムは、このあとほぼ十年の間において、一昨年、新作『泰平ヨンの現場検証』を書いているが、邦訳ではこちらのほうが先に紹介されてしまった(早川書房、一九八二年)。

孤独な宇宙航海士、泰平ヨンの冒険譚は、五〇年代の中頃から雑誌に書き始められた。当初、レムの作品としては比較的軽い、いふなればアイデアを活かしたユーモラスな作品が多く、宇宙ほら男爵の冒険譚とか宇宙ドン・キホーテと評されていた。だが、『航星日記』の「第七回の旅」に見られるような、時空間でおのれ自身に遭遇するというアイデアは、べつだんレムが最初に思いついた着想ではなく、すでにハインラインなどが作品にしていた。しかし、その後のかれの作風を偲ばせる傾向は、この頃から現れていた。この作品でも異様な雰囲気や漂わせており、かれ特有のグロテスクな効果をあげているし、人間の本性に悪夢のような解釈をくだすことに成功している。また、それと同時に「第十一回の旅」のように、文明風刺の傾向が強い作品もすでに書かれていた。泰平ヨンが、悪疎なコンピューターによって管理されているロボット国家がまったくのイカサマであり、ロボットは変装した人間であるにすぎず、その国家は政治的に墮落した結果生まれたことを発見する。この作品から作者は、ロボットの目から見た人間を描くことを思いつき、その後、作者自身が「高度な娯楽」と呼んでいる「イーリアス」の現代版、おとなのための寓話に発展させたことは、その連作を収めた『ロボット物語』の訳書のあとがきで触れたとおりであるが、「泰平ヨン・シリーズ」では、その後「第二十一回の旅」、「回想記、第八話」、「未来学会議」、そして最新作の『現場検証』などのように、文明批評的傾向がしだいに強くなっている。

レムは、作品のテーマが多岐にわたっているばかりでなく、時代とともにその思想もかなり急激に変わっていくが、それを色濃く反映しているのは、おそらくこのシリーズだろう。それは、「宇宙飛行士ピルクス・シリーズ」、宙道士トルルとクラパウチュスが登場する「サイバーリアス」や「ロボット・シリーズ」、「タラントガ教授・シリーズ」などのシ

リーズのなかで、いまのところいちばん息の長いシリーズであるからだ。おそらく泰平ヨンはレムにいちばん近い分身であるのかもしれない。

本書では、過激派のテロ事件や化学戦争に始まり、化学薬品で人間の精神を支配する一種の全体主義社会が、グロテスクに描きだされている。泰平ヨンは、幻覚剤の作用で時間の旅をして未来を訪れ、現実から隔離された社会を垣間見る。

破滅的に増大する地球の人口問題と、それに関連する食糧危機などの問題をいかにして解決するかを討議するために、コスタ・リカで国際未来学会議が開催される。ところが、会議の最中にテロ事件が起こり、それを鎮圧するために軍が投下した覚醒剤爆弾の薬物を吸ったヨンは、二〇三九年の世界へ紛れ込む。薬の作用から覚めると、そこは地上の楽園であった。人類はもはや食糧危機や人口過剰、住宅難の問題で悩む必要はなくなっていた。それどころか、化学万能政体が統治するユートピアが実現している。その社会では、さまざまな作用をする大量の幻覚剤を服用して、人は望むものがなんでも手に入り、すべての欲望沸満たざれている。一見それは、万事が解決したかのように見える。だが、ヨンがさらに薬を服用して、そこに見たものは……

レムは覚醒剤の常用者ではなかろうかと思えてくるほど、ここに描きだされている世界は現実離れをしている。かれが得意とすることばの遊びが、この作品では極限まで洗練されて、おびただしい種類の幻覚剤を生みだし、薬によって歪められた知覚の世界をみごとにまで描写している。想像力の豊かな読者ならば、本書を読むだけで途方もない幻覚体験が味わえるだろう。麻薬中毒患者ではないにしろ、この作者が覚醒剤について造詣が深いとを窺わせるに十分な知識である(だが、それはとりもなおさず、翻訳者泣かせでもあるのだが)。

レムの近況について触れておくと、最近は国外へ出ることが多くなったようだ。去年はベルリンで少なくとも三本の作品を書きあげた。架空の本にたいする書評を収録した『完全な真空』の新作、「ワン・ヒューマン・ミニット」と「二十一世紀の事件簿」、「二十一世紀の兵器システム　もしくは、逆進化」の三作である。いずれも短編であるが、現代の国際情勢を強く意識した作品のようだ。また、西側の新聞の求めに応じて「ニュー・ヨーク・タイムズ」に『著書　偶然と秩序』を、「朝日新聞」に『核時代と文学』(一九八四年三月九日付夕刊)を執筆もしている。

一九八四年四月二十五日

深見弾